

図版 1 静岡県伊豆の国市八丁平遺跡第 1 地点採集石器（塚原明生撮影）



図版 2 静岡県伊豆の国市八丁平遺跡遠景
右手に見える低い崖が第 2 地点（漆畑稔 1968 年撮影）



図版 3 静岡県伊豆の国市八丁平遺跡第 1 地点石器採集崖面と石器
採集された 2 枚目の火山灰層の下に石器を二つ置いて。左は第 2 地点の石器（漆畑稔 1968 年撮影）

静岡県伊豆の国市八丁平遺跡採集石器の研究

ー日本列島における中期旧石器時代をめぐってー

安蒜 政雄・小田 静夫・加藤 真二・佐藤 宏之・設楽 博己・竹岡 俊樹

要旨

静岡県伊豆の国市八丁平遺跡から採集された石器は、石器の観察と採集状況から中期旧石器時代の可能性があることを『大仁町史』で述べた。本稿では、複数の旧石器時代研究者によって、この石器に分析を加えた。その結果、『大仁町史』において年代推定の拠り所としたおよそ 10 万年前の火山灰層の下に露出して発見されたという層位的な所見は、石器の観察によって軌道修正を余儀なくされた。また、縄文時代の石器ではないかとの見方も提示されたが、技術形態的な分析によって中期旧石器としての可能性は依然として残ると考えた。前・中期旧石器捏造事件以後、日本列島における人類の成立問題は多方面からアプローチがなされている。あらゆる機会をとらえて議論を深めていくことが求められるのであり、本稿もその試みの一つに位置づけられる。

1. はじめに

戦後まもなく群馬県新田郡笠懸村（現みどり市）岩宿遺跡で発掘調査された石器は、日本列島に旧石器時代が存在していたことを証明した。それ以来、日本の旧石器時代と文化の研究は進展し、日本列島における人類文化の始原や東アジアにおける人類の拡散という大きな問題を解き明かすための素材を、各地の旧石器時代遺跡は提供してきた。2000 年に発覚した前期・中期旧石器捏造事件が斯界に与えた影響は大きく、研究の再出発を余儀なくされたが、この問題の追究は事件の反省の上に立って不断に推し進めなくてはならない。

現在、日本列島最古の旧石器は、後期旧石器時代初頭のおよそ 38,000 年前を上限とする。それをさかのぼるとされる石器も複数知られているが、いずれも石器自体の評価や遺跡の年代などに問題を抱えていて、誰もが認める前・中期旧石器はきわめて限られているといつてよい。

本稿で検討する静岡県伊豆の国市（旧大仁町）八丁平遺跡から採集された石器も、中期旧石器の可能性のある資料のひとつである。この石器は 1967（昭和 42）年に、のちに大仁町教育委員会に勤務する漆畑稔によって発見されたものであるが、2000 年代になって『大仁町史』の編纂事業の際、編纂委員長の原秀三郎と委員であった本稿の筆者の一人である設楽が注目し、2011 年に採集された場所の付近と思われる地点の発掘調査をおこなった。本稿は、石器発見のいきさつや発掘調査の経過を略述し、複数の研究者が観察をふまえてこの石器に考察をくわえたものである。

（設楽博己）

2. 八丁平遺跡における石器の発見

2-1. 八丁平遺跡の位置と景観

八丁平遺跡は、静岡県伊豆の国市（旧大仁町）浮橋字八丁平に存在する（図 1-1）。主要地方道路の伊東－大仁線（19 号線）を田京から北東に進み、葦山峠方面に向かって県道田原野函南線（135 号線）をさらに北東に行くと浮橋の盆地に出る。深沢川とほぼ平行に走るこの幹線道路を、加茂神社の先で左折して山間の道を登っていくと右手に畑が見える。そこから林道を登っていった先が八丁平遺跡である。

八丁平遺跡は深沢川の西側の丘陵上に位置し、周辺には標高 600 ～ 700 m の山々が展開している。遺跡の付近の標高は約 358 m であり、大仁地域のなかでももっとも高所にある遺跡の一つである。図版 2 は漆畑が石器を採集した 1967 年に遺跡から西北に向かって撮影した写真であるが、今ではスギなどの雑木林に覆われてこのように視界は開けていない。低いところに深沢川の支流の小支谷があり、奥に写っている農作業の資材置き場である藁葺き屋根の小屋は、トタン葺きに姿をかえて今もある。

2-2. 石器の発見と発掘に至る経緯

1960 年代は、縄文土器の始原を求めて洞穴遺跡の発掘調査や踏査がさかんにおこなわれた時代である。八丁平遺跡は戦前から縄文時代の土器や石器が採集されていた遺跡であるが、こうした機運に乗じて大仁町域の遺跡と遺物を探索した漆畑は、1967 年の秋にこの遺跡を訪れて二つの石器を採集した。そのうちの一つは、農道をつくるために開かれた切り通しの断面に露出した赤土、いわゆるローム層で地表からかなりの

深さのところに崖面に食い込むようにして見つかった礫器であり、もう一つは畠のわきの切り通し面で、地表からそれほど深くないところから見つかった礫器である。『大仁町史』では前者を第1地点、後者を第2地点とした（設楽 2010：14-15）。

第2地点は八丁平遺跡として登録されている場所であり、採集された石器の周辺から縄文時代早期の土器が採集されていることから石器は縄文時代のものである可能性がある¹⁾。しかし、第1地点採集の石器はその無骨な質感の一方で洋梨形の整った形態をしていたために、原と設楽は後期旧石器時代以前の可能性のある旧石器ではないかと考えた。石器を発見した翌年に漆畑がカメラを抱えて八丁平遺跡を再訪し、採集した場所に石器を戻して写真撮影をおこなったことをわれわれは知り（図版3）、その写真も見せていただき、八丁平遺跡も案内していただいた。

第2地点は旧状が残っていたが、それ以外の景観は採集当時と大きく変わっており、第1地点を特定することはできなかった。しかし、町史編纂の上からばかりでなく、日本列島における旧石器文化の始原を求めるという大きな問題にアプローチすることも場合によっては可能であるとの認識から、大仁町史編纂委員会によりこの遺跡の発掘調査をおこなうことにした（設楽・増島 2014；設楽・山本 2015）。

（設楽）

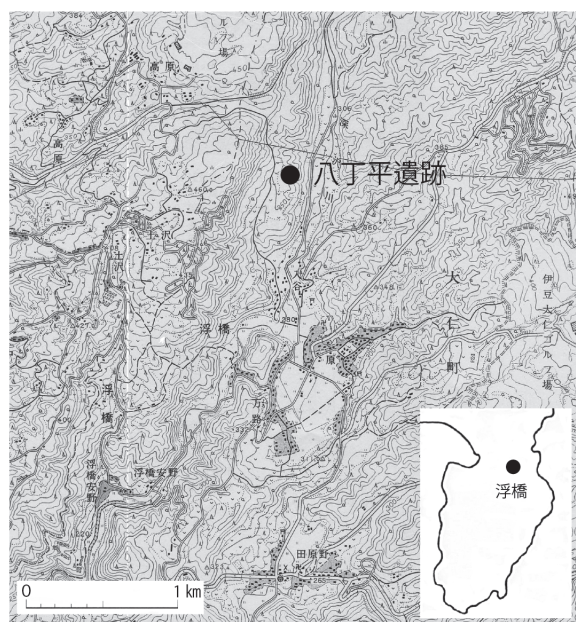
3. 八丁平遺跡第3地点発掘調査と第1地点採集の石器をめぐって

3-1. 発掘調査の経過と結果

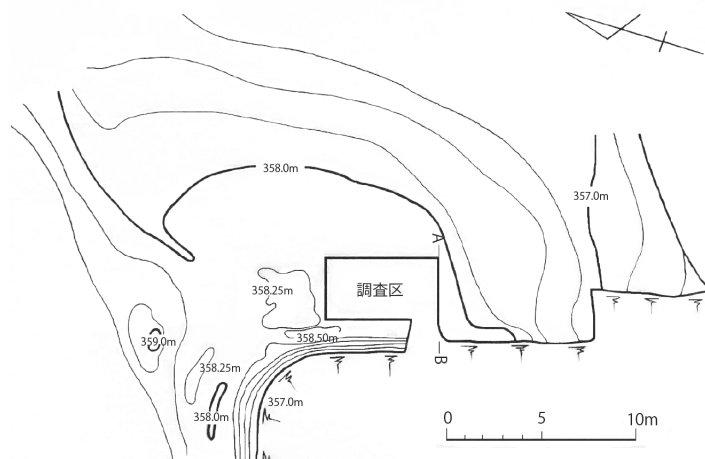
漆畑の記憶を頼りに、採集地点にもっとも近いと考えられる地点を発掘調査した。発掘調査は、2011年6月1日～6月8日の8日間にわたっておこなった。発掘地点は現在ブナ畑であり、6×3mのトレンチを設定し、重機と人力を併用して発掘調査した。調査面積は約18m²である（図1-2）。

最終的に、地表面から深さ約6mの自然礫層まで掘り下げた。層序は上から第1層（表土）、第2層（褐色土）、第3層（赤色スコリア）、第4層（褐色土）、第5層（黄褐色砂＝三島パミス）、第6層（暗褐色土）、第7層（灰褐色土）、第8層（赤褐色砂）、第9・10層（黄褐色砂＝Hk-Da-5）、第11層（暗褐色土）、第12層（暗赤色土）、第13層（明褐色土）、第14層（赤色砂＝Hk-Da-4）、第15層（黒灰褐色粘土）、第16層（暗灰褐色粘土）、第17層（礫まじり暗灰褐色土）である（図1-3）。各層の土壌をサンプリングした。

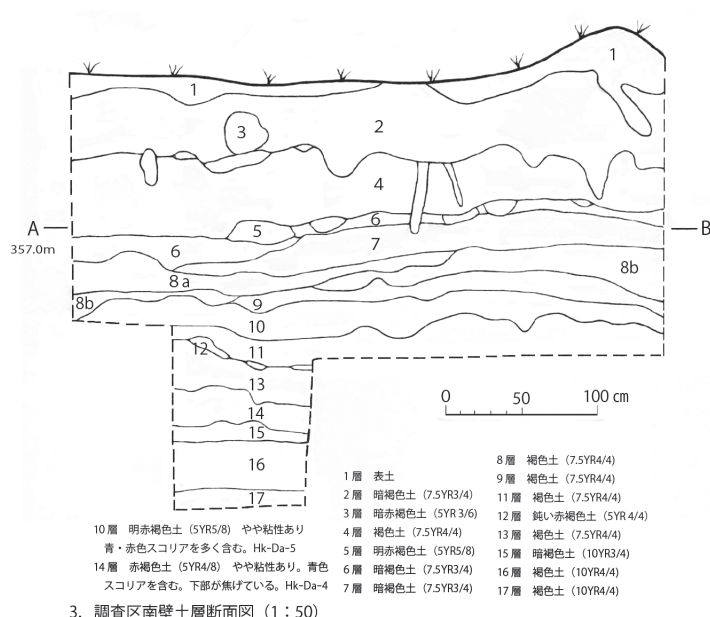
人工遺物は第1層の表土層から縄文土器が出土した以外、それ以下の層からは出土しなかったが、第11層から長さ5cmほどの自然の河川小礫（いわゆる「イモ石」）が1点出土した。発掘調査地点と第2地点の間



1. 八丁平遺跡の位置（1：50000）



2. 調査区周辺の地形測量図（1：400）



3. 調査区南壁土層断面図（1：50）

図1 八丁平遺跡の位置図および発掘調査区周辺測量図と土層断面図

の距離はおよそ 50 m あるが、縄文土器が出土したことからまがりなりにも発掘調査地点は八丁平遺跡の一角といってよい。そこで発掘調査地点を、八丁平遺跡第 3 地点とした²⁾。地質学の増島淳により、周辺の露頭との比較を踏まえて八丁平遺跡のスタンダードな層序がおさえられたことは、第 1 地点採集の石器の帰属を考えるうえでこの調査の成果であったといえよう。発掘調査の結果は、『大仁町史』にその概略を掲載した³⁾ (設楽 2014)。

3-2. 第 1 地点採集の石器をめぐって

3-2-1. 採集石器の概要

第 1 地点採集の石器 (図版 1・図 2-1) は、長さ約 14cm、幅約 10.5cm、厚さ約 5.5cm と手のひらいっぱい大きさで、重さは 994g と 1kg 近くありずっしりとしている。体積は 808.5cm³ である。石材はホルンフェルスである。扁平な礫の周囲をあらく加工し、先端部を数回の打撃で尖らせた尖頭礫器と呼ばれる形態の石器である。片面には自然の礫面が大きく残っている。

このような形状と製作の特徴をもつ大型の礫器は、旧石器時代から縄文時代を通じて用いられたが、『大仁町史』で旧石器と認定したのは採集された土層と技術形態的な分析および周辺の資料との比較による。技術形態的な分析と比較検討は後述するとして、ここでは石器が採集されたのが露頭にみられる 2 枚の火山灰層のうちの下の火山灰層の直下であったという漆畑の所見とかかわる発掘調査での層位的な所見と石器の外見だけを述べておくことにしよう。

第 1 地点での石器採集時の露頭における 2 枚の火山灰層は、今回の発掘調査でとらえられた 9・10 層と 14 層に相当する。9・10 層は表土下およそ 150cm より 25～30cm ほどの厚さで、14 層が表土下およそ 2m より 20～25cm ほどの厚さで堆積している。9・10 層の軽石 (パミス) 層が箱根の達磨山に起源する Hk-Da-5 に、14 層の軽石 (パミス) 層が Hk-Da-4 に相当する。これは増島の堆積土壌の肉眼観察と重鉱物組成の特徴などによる所見⁴⁾ にもとづいたものであり、Hk-Da-5 の降下はおよそ 9 万年前、Hk-Da-4 はおよそ 10 万年前とされている。

採集された石器にはあたらしい損傷個所が複数あり、『大仁町史』に「表面は風化して黄褐色を呈しており、黄褐色の粘土がこびりついている。表裏に一箇所、重機によると思われる幅の広い一続きの擦過痕が、礫面を大きく残す面にはもう一箇所新しい傷が認められるほか、側縁に一箇所、やや大きな新しい欠損 (通称ガジリ) が認められる。また、剥離の稜線や側縁には、付着した粘土が摩耗によってとれて青味がかかった石本来の地肌が露出した部分が全体にわたって認められ

る。」と述べておいた (設楽 2010: 17)。これは、最後に検討したい。

3-2-2. 日本列島の前・中期旧石器をめぐって

前・中期旧石器時代の区分 旧石器時代は前・中・後期の三期に区分されることが多い。これは欧州で成立した区分であるが、世界史的にみた場合の前・中期旧石器時代と後期旧石器時代の区分は石刃技法の成立によるものであり、明瞭である。これに対して、前期と中期の区分は地域差が絡み、複雑である。

ヨーロッパなど西方世界において中期旧石器時代の特徴は、ムステリアン石器群の成立すなわち斜軸尖頭器など小型剥片石器の多用化や調整打面による調整石核技法であるルヴァロア技法の成立、あるいはハンドアックスの衰退などに求められる。東アジアにおいてはこうした基準を欠くが、中国では早期ホモ・サピエンスの登場といった石器とは関係のないイベントに応じて区分されたり、中期旧石器時代のはじまりをおおよそ 20 万年前にさかのぼらせる意見もある。朝鮮半島の場合はルヴァロア技法が顕著ではなく、またハンドアックスが後まで残る特徴があり、裴基同は中期旧石器時代を認めながらも前期との違いの不明瞭さに苦労をにじませている (裴 2001)。このように東アジアにおいては時代区分の年代軸の取り方ひとつとっても安定したものではなく、前期旧石器時代と中期旧石器時代の区分を認めない立場に立つものも多い。

ハラム・モヴィウスは、ユーラシアの前期旧石器時代の地域差を問題にし、ヒマラヤ山脈とパキスタン北部を結ぶ線を境として西側にいわゆるアシュールリアン石器群が展開するのに対して、東側ではチョッパー (片刃加工礫器)、チョッピング・ツール (両刃加工礫器) の礫器伝統が残ることをあきらかにし (Movius 1944)、その境界線はモヴィウス・ラインと呼ばれるようになった。この理解は西方世界の進歩的發展に対する停滞的な東洋というオリエンタリズムに根差すものでもあったが (佐藤 2003: 16)、その後、中国でアシュールリアンとは趣を異にしているもののハンドアックス石器群が検出されて、モヴィウス・ラインに再考が迫られた (裴編 1958)。西方世界の基準によって前期旧石器時代は律せられるものではなく、それと同様にムステリアン石器群の非存在によって中期旧石器時代自体の区分を解消するのは東洋的停滞論に逆戻りすることだという佐藤宏之の警鐘 (佐藤 2003: 16-17) に耳を傾ける必要がある。

佐藤が“東アジア型ハンドアックス石器群”と呼ぶ非アシュールリアン石器群は、華中・華北南部から朝鮮半島に前期旧石器時代後半期に成立するが、120ka (12 万年前) 以降にも“ルヴァロア技法による石器群”と非ルヴァロア技法の“東アジア型中期旧石器時代石器

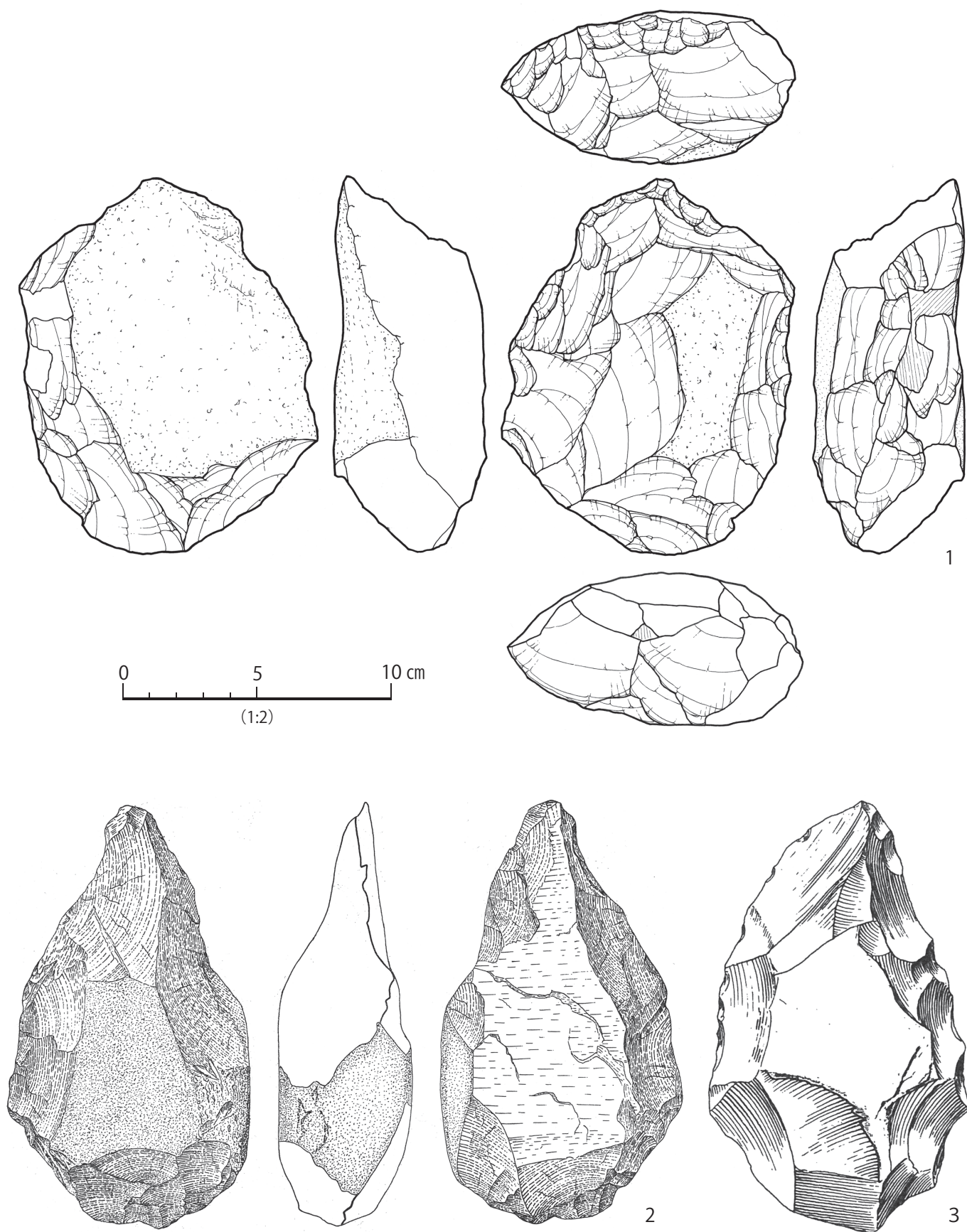


図2 八丁平採集石器と朝鮮半島・中国の中期旧石器
1：八丁平遺跡（飯田茂雄原図）、2：全谷里遺跡（金・鄭 1979）、3：丁村遺跡（王ほか 1994）

群”が対峙することから、積極的に前・中・後期の区分を認める（佐藤 2009）。日本列島においては後期旧石器時代をさかのぼる可能性が議論されている資料は数が少なく、前期と中期の区分を議論するには至っていないのが実情とされるが、このような状況に置かれた大陸に隣接することと、東洋的停滞論を回避するためにもとりあえず120ka-3.8kaを中期旧石器時代として前期旧石器時代と分離する立場に立っておきたい。

前・中期旧石器への二つのアプローチ 戦後において日本列島の旧石器時代の始原を求める取り組みはいくつもあるが、初期のころのアプローチは二つの方向に集約される。ひとつは石器の中にオールドワンタイプとよく似た礫器が存在することを問題にした方向性と、いわゆる珪岩製石器からの追究の方向性であった。

大分県大分市丹生遺跡と同県日出町早水台遺跡は前者の取り組みの代表的な例である。ともに 1960 年代になってからとくに問題視されて数次にわたり発掘調査されたが、丹生遺跡の石器群（佐藤ほか 1962）はおおよそ 30 年後にまとめられた総括報告書において、後期旧石器時代のもの⁵⁾であるとの結論に達している（鈴木編 1992）。

早水台遺跡の礫器は、ヨハネス・マリナーによって下部旧石器時代に属すると問題提起されたものである。早水台遺跡の礫器に対して芹沢長介は、当初縄文時代早期と報告されたとおり（八幡・賀川 1955：122-123）押型文土器に伴うと主張してその問題は解決したのであるが、第 5 次調査で出土した石英脈岩・石英粗面岩製のいわゆる珪岩製石器をアジアの前期旧石器に類似するとして注目し、その後芹沢は栃木県栃木市星野遺跡や岩宿遺跡 D 地点などで珪岩製石器を求めて発掘調査を重ねた。

しかし、石英脈岩には明確な打撃点やバルブがあらわれない（長井 2010：45）など、この石材は剥離の観察が困難を極めることから、人工品か自然によるいわゆるエリオスか否か研究者の評価もまちまちであった。紅村弘によって中国の周口店第 1 地点出土の前期旧石器と比較された愛知県新城市加生沢遺跡の領家片麻岩製とされる資料（加生沢遺跡調査会 1968、紅村 1989）にも人工品かどうか判別の困難なものが含まれており、礫や破碎礫を含む土層からの出土はその見極めのむずかしさに拍車をかけている。いわゆる岩錐堆積という岩崩によって形成された土砂の中から出土した資料も判別に注意を要することが問題にされていった。

相沢忠洋が発見した群馬県伊勢崎市権現山遺跡第 1 地点の石器は、これもマリナーによって洋梨形ハンドアックスとして中期旧石器時代の石器と評価された。しかし、近年春成秀爾によって、出土したとされる層位が明らかでなく表面についている新しい傷が顕

著であることや縄文時代の石器によく似た形態のものがあることなどから、大工原豊の所見（大工原 2004：66-67）も参考にして時代判定が誤っているのではないかと指摘している⁶⁾（春成 2018）。

捏造事件をこえて 前・中期旧石器捏造事件の発覚によって、捏造に関与した人物の調査地点はことごとく否定されて、後期旧石器時代を遡る石器文化の研究は振出しに戻ったが、上述の捏造者関与以外の遺跡と資料を含めて前・中期旧石器時代としての遺跡と石器の認定に厳密な指標を設けることが提案された。諏訪間順は捏造発覚から 10 年後の学会シンポジウムにおいて、後期旧石器時代を遡る石器群を認定するための条件として以下の四つの指標を提示した（諏訪間 2010：51）。

- ① 石器に残された明確な加工痕
- ② 偽石器の含まれる可能性のない安定した遺跡立地（礫層や岩錐堆積物などでない）
- ③ 4 年以上前の火山灰層の介在や X 層段階より下層から出土するといった層位的な出土状況
- ④ 石核、剥片、接合資料など石器の複数出土

捏造発覚以前からの前・中期旧石器認定に対する着眼点を含むが、捏造を教訓にして整備された指標として汎用性が高い。①は石器の個体自体の要素であるが、捏造資料の検証作業の過程で問題視された石器の表面における新しい傷の有無も加えればより安定性は増す。

日本列島でこのすべての条件を満たした遺跡や石器はきわめて限られており、すべてではないにしても条件のいくつかを備えた前・中期旧石器時代の可能性のある遺跡は 10 遺跡余りを数えるにすぎない（佐藤 2010：367）。しかし、発覚後の 10 年余りでその数に達していることは日本列島における旧石器時代始原問題への取り組みが重要な研究課題として認識されて精力が傾けられたあらわれとも評価することができよう。なかでも確実性の高い遺跡をとりあげて八丁平遺跡の石器と比較検討するが、その前に中国・朝鮮半島における中期旧石器の代表例に目を通しておこう。

3-2-3. 中国・朝鮮半島の中期旧石器

中国丁村遺跡の中期旧石器 丁村遺跡は中国山西省の西南、西安から北東におおよそ 350km の汾河左岸の河岸段丘上に立地する。1954 年に中国科学院脊椎動物と古人類研究所により発掘調査され、汾河に沿った 90 ～ 103 の 14 地点から、多くの石器と哺乳動物の化石、人類の歯が出土した。石器は砂礫層から出土し、その上部には黄土層または似黄土層が堆積している。

石器は少数の石核石器と多数の剥片石器からなる。石核石器は、砍砸器（かんそうき チョッピング・ツール）、ハンドアックス（図 2-3）、球状器である。砍砸器はすべて交互打

撃によって製作されている。石器の石材の大半は、中国で角頁岩と呼ばれているホルンフェルスである。球状器は石球と呼ばれる独特な石器であり、多くは石灰岩でつくられ石英もあるように、ほかの石器と異なる石材である。剥片石器は、単辺・多辺形器、厚尖状器、小型尖状器（ピック）、刮削器（スクレイパー）であり、厚尖状器のうち三稜尖状器は丁村ポイントと呼ばれる固有のピックである（裴編 1958）。

加藤真二は中国華北地方の旧石器時代を5期に編年する（加藤 2000）。第Ⅰ期は単純で便宜的な石器の段階（約25万年前以前）、第Ⅱ期は発達した大型石器をもつ石器群の段階（約30万～10万年前）、第Ⅲ期は定型化、多様化した小型石器を主体とする段階（約10万～3.5万年前）、第Ⅳ期は石刃技法をもつ段階（約3.5万～1.8万年前）、第Ⅴ期は細石刃の段階（約1.8万～1.1万年前）である。

周口店第15地点や丁村遺跡の石器群は、このうちの第Ⅱ期に相当し、鉞状石器（クリーヴァー）、鶴嘴状石器（ピック）、両面調整石器（バイフェイス）などの大型石製品と、剥片剥離技術により整った形状の剥片を生産するための石核とそれによって生み出された剥片が結びついた定型的な石製品をもつ石器群と評価されている（加藤 2010：457-460）。この時期は約30万～10万年前の土壌である L_3 から $S_1^{7)}$ 相当期であり、定形的で高度な技術により管理された石器群によって計画的な人類行動の発達が促された最初の重要な画期であったとされる（加藤 2010：457-460）。

王建らは丁村遺跡の第Ⅲ段丘の地点などで発掘とともに古地磁気測定をおこない、文化層のすぐ上でブレイク亜逆磁極帯（12万年前）が検出されたことによって、およそ12万年前に絞り込んだ（王ほか 1994）。

大韓民国全谷里遺跡の中期旧石器 朝鮮半島では1978年に京畿道全谷里遺跡においてハンドアックス石器群が発掘調査されて、ヨーロッパの前期・中期旧石器との比較とその年代に議論が生じた（鄭 1984）。

朝鮮半島の中期旧石器は全谷里遺跡をはじめとして佳月里遺跡や舟月里遺跡など数多く検出されている。その石器群は、尖頭形とともに楕円形のハンドアックス（図2-2）、クリーヴァー、チョッパー、多面体石核、そして刮削器類である。それらの特徴は石器が定形化しておらず、不規則で任意的なことで、石器表面のほとんどが自然面で覆われており、二次加工がみられる石器が著しく少なく、打面調整技法がまだないといった点とされる（裴 2001：5）。

この石器群の年代については、土壌クサビ構造とその環境変動とのかかわりという韓国独自の地質学的な分析により、当初75,000年前が上限とされていたが、その後同様の研究によって上限がおよそ13万年前に引き上げられ、さらに全谷里遺跡の基盤岩のK/Ar年

代測定によって、30万年前までさかのぼる可能性が指摘されている（裴 2001：5）。

松藤和人らはレス（黄土）―古土壌編年という東アジアの広域にわたる地質学的な検討を踏まえて、今のところもっとも古いハンドアックス石器群の存在を忠清北道萬水里遺跡第4文化層に認めて、海洋酸素同位体によるステージであるMIS（Marine Isotope Stage）8の約25万年前に求めている（松藤ほか 2007）。これに対しては、萬水里遺跡の石器の認定に疑問を呈する小畑弘己のように、朝鮮半島におけるハンドアックスの上限年代はMIS7の20万年前までとおさえる見解もあり（小畑 2010：488）、金正培もおおむねおなじような位置づけをしている（金 2005：264）。

東アジア型ハンドアックス石器群の特質 丁村遺跡と全谷里遺跡の石器群には、次のような共通性がある。ハンドアックス、ピック、クリーヴァー、チョッパーといった大型の石器とその製作で生じた大型の剥片、不定形の剥片を伴う。ハンドアックスは先端をとがらせてピック状に仕上げたものが多く、とくに片面に顕著に自然の礫面を残すことを特徴とする。球状器あるいは石球、多面体石器と呼ばれる球状の石器を共有することはこの二つの石器群の間に系譜的な関係があったことを強くうかがわせる。

これが佐藤のいうところの“東アジア型ハンドアックス石器群”であり、なによりもこれらの石器群に共通する大きな特徴は、大型重量石器を中心に構成されていることである。佐川正敏は長野県飯田市竹佐中原遺跡A地点で検出された「厚手扇形刃器」・「厚刃刃器」をそれぞれピックとチョッパーをイメージした大型重量石器と認めつつも、中国や朝鮮半島の大型重量石器と大きく異なっていたとした（佐川 2008：184、佐川 2010：361）。このようななかでハンドアックスを含む大型重量石器が大型の剥片石器とともに発掘調査によって安定した地層から出土したのが岩手県遠野市金取遺跡である。

3-2-4. 岩手県金取遺跡の旧石器と八丁平遺跡第1地点の旧石器

金取遺跡の中期旧石器 金取遺跡は遠野市の市街地からおよそ10km西北の丘陵地帯における中位段丘上に立地する。1984年に工事現場から大型斧形石器が発見されたことに端を発して1985年より3次にわたる発掘調査がおこなわれた。

第1次調査において、問題の石器は第Ⅲ文化層と第Ⅳ文化層から出土した。第Ⅲ文化層の石器群40点の内訳は、石斧（ハンドアックス（竹岡 2005：45））（図3-1）、円盤状石核（図3-3）、チョッパー、スクレイパー、楔形石器、フレイク、チップであり、第Ⅳ文化層の石器群8点は、楕円形石器（図3-2）、チョッパー、チョッ

ピング・トゥール、スクレイパー、フレイクである。なかには 21cm 長の大型剥片が存在している。これらの石器の多くはホルンフェルス製である。第Ⅲ文化層の石器群は石器や剥片が集中したブロック状をなす。第Ⅲ文化層中の 3d 層に Yk-MP 焼石村崎野火山灰 (6.8～7.8 万年前) などが、第Ⅳ文化層中の 4a 下層に Aso-4 阿蘇 4 火山灰 (8.5～9 万年前) などが検出されたことから、第Ⅲ文化層の年代は 3.5～6.8 万年前、第Ⅳ文化層の年代は 6.8～8.5 万年前と推定されている (菊池ほか 1986、黒田ほか 2017)。

このように、金取遺跡の石器群は諏訪間の指標すべてを満たすものであり、現在もっとも確度の高い中期旧石器時代石器群として多くの研究者に評価されている。わけても大型剥片を含む大型重量石器の存在は、金取遺跡の第Ⅲ・Ⅳ文化層石器群が東アジア型ハンドアックス石器群を指標にした丁村 - 全谷里 - 金取というホライゾンの末端に位置する可能性を高めているのではないだろうか。

この大型石器群ホライゾンを認める立場に立てば、日本列島への最初の人類の移動はいつどのようになされたのであろうか。佐藤は、日本列島における後期旧石器時代をさかのぼる石器が出土した遺跡を 15 あげているが、そのなかで 6 遺跡を 70ka 以前の中期旧石器時代前半期とする。そしてそれらの遺跡は、MIS6 (185～128ka) 末期のもっとも寒冷な 130ka に朝鮮半島から拡散した現生人類以前のホモ属が残した可能性を説いた (佐藤 2016: 202)。

その根拠は、古くに見つかったために年代比定の根拠があいまいな愛知県新城市加生沢遺跡を除いてその年代が島根県出雲市砂原遺跡⁸⁾ (松藤編 2013) の火山灰層序編年による 120ka を最古とすることと、それらは日本列島と朝鮮半島が陸続きになった段階に陸橋を伝って流入し、日本列島最後の陸橋の形成が MIS6 の 130ka とされる地質学分野の有力な意見にもとづくものである。丁村 - 全谷里 - 金取という、大型重量石器ホライゾン形成の地質学的な説明として論理的ではある。

八丁平遺跡第 1 地点採集石器の技術形態的分析 金取遺跡の石器群の特徴である大型重量石器という点は、八丁平遺跡第 1 地点採集の石器にあてはまる。

小野章太郎は石器認定作業の骨子として、A) 剥離面の認定 - 打点・バルブ・リング・フィッシャーなど剥離面に表れる諸要素の確認、B) 剥離の同時性の確認 - 風化の程度の識別、C) 剥離の順序による検討 - 剥離面の組み合わせの石器としての整合性の確認、D) 全体形状と剥離面の組み合わせの関係 - 全体の形状・刃部など機能部分の形成の確認をあげた (小野 2018: 226)。

小野がおこなった分析は石英脈岩など認定が困難な石器を対象にしたものであったが、すべての石器に当てはまる。これは技術形態的な分析であり、A・C・D は技術による視点であり、D は形態による視点、そして B はタフオノミー的な視点にもとづく。C は大工原豊が分析の視角とした剥離技法による分類 (大工原 2002) を含む。

技術形態的な観点から八丁平遺跡第 1 地点採集の石器をみると、洋梨形の円刃に仕上げたいわゆる尖頭礫器であり表裏面のとくに片面に礫面を多く残す。側縁は直接打撃による求心剥離により剥片剥離をおこなうが、その際に交互剥離によってジグザグの側縁をなす。大工原豊によれば、交互剥離技法とは打面と作業面を交互に入れ換えて剥離を進行させていく方法であり、側縁部を横から見ると大きく波をうつ状態となっている場合が多い (大工原 2002: 11)。後期旧石器時代前葉の打製石斧に認められる技法であり、打製石斧製作の技法としては古拙な部類に属す。また、先端は細かな剥離で尖頭部を作出し、ピックとしての機能を付加しているらしい。

この石器を石核とみる向きもあるかもしれないが、刃部成形があきらかなことと、洋梨形の目的的な形態作出がうかがえることからトゥールとみるのが妥当だろう。そのうえで、15cm 長の 1kg に近いいわゆる大型重量石器であること、中国・朝鮮半島の中期旧石器時代のハンドアックスがしばしばピックの機能をもち合わせていることや、円刃をなす類似資料が丁村・全谷里遺跡に認められること (図 2) から、技術形態的には東アジア型ハンドアックス石器群に連なる中期旧石器の可能性を否定することはできないであろう。

八丁平遺跡第 1 地点採集石器の認定と帰属 諏訪間の四つの指標に照らして八丁平遺跡第 1 地点採集の石器を評価してみよう。まず、上述のように①の指標である人工的な手が加えられた石器であることは疑いない。

あとは②～④の条件であるが、④は偶然の発見であり、複数の石器や剥片などが伴わないというのは捏造遺跡の特徴としてあきらかになったことだから、採集されたときにそのような目的意識をもって周辺まで観察し発掘調査におよぶことがなかったとしても致し方ないことであり、単独発見資料として評価していかざるを得ない。

②の遺跡の立地条件であるが、これまで中期旧石器時代遺跡の候補地としてあげられている遺跡は丘陵部に立地する傾向があり、八丁平遺跡もその仲間に加えられる点は評価されなくてはならない。

南関東地方の武蔵野台地などでは旧石器時代の遺跡の発掘調査が数多くなされているが、X 層というおよ

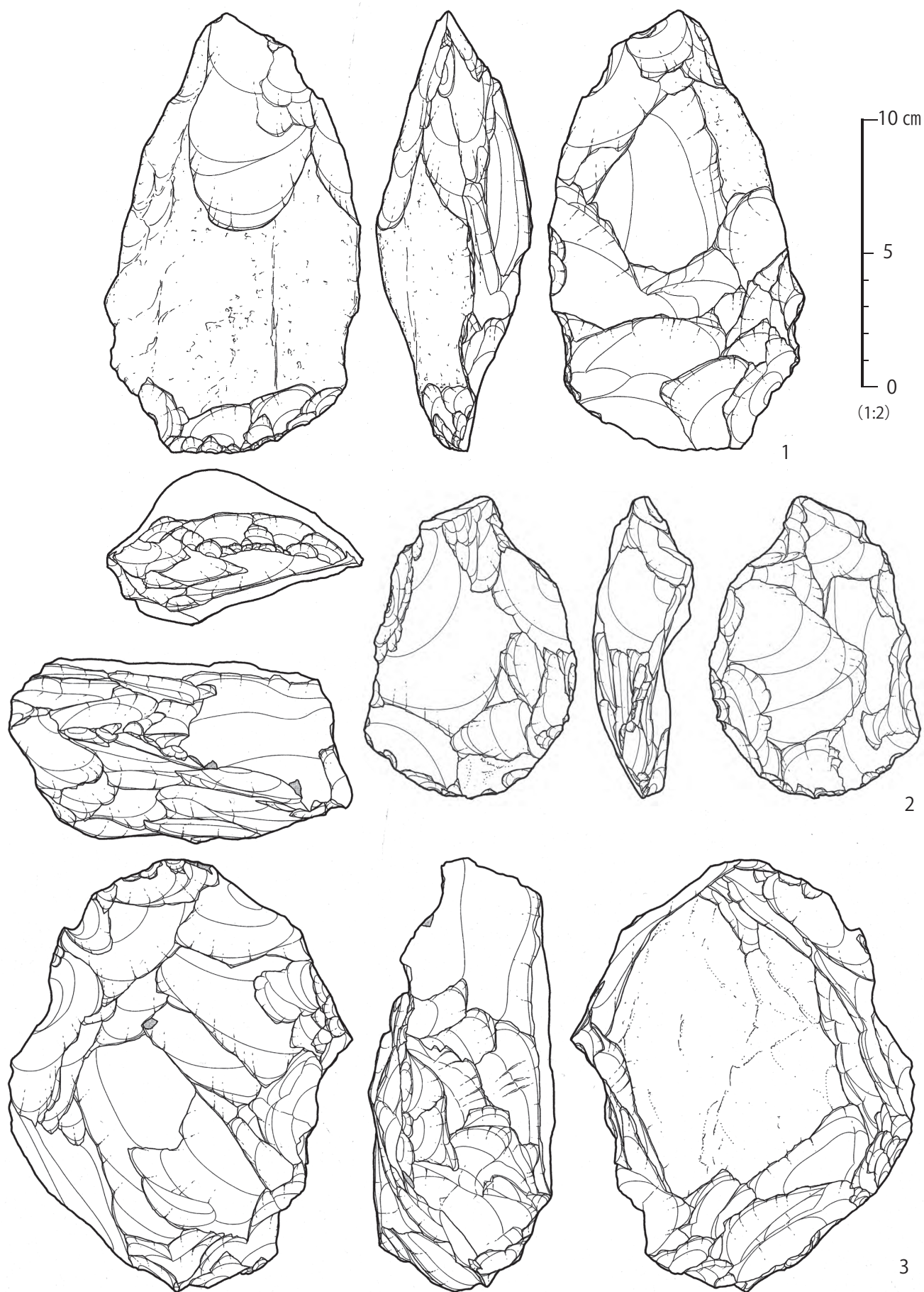


図3 岩手県金取遺跡第Ⅲ層(1・3)・第Ⅳ層(2)出土石器(黒田2005)

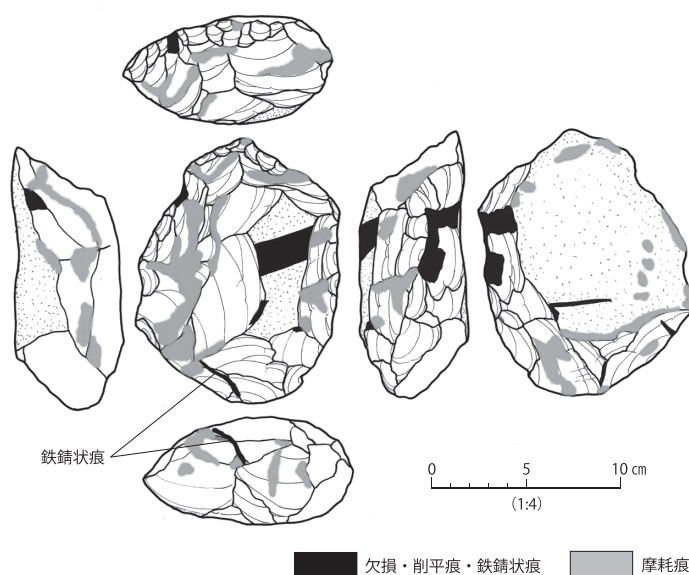


図 4 八丁平遺跡第 1 地点採集石器の傷跡

そ 38,000 年前の堆積を境にそれより下の層から石器が出土しない。両者の対照的な立地の違いに対して、佐藤は南関東地方の台地が丘陵に対して比較的平坦で広大であることの理由を次のように説明している。広い台地上に人類が進出したのは特定の資源の集約的な利用が可能になった後期旧石器時代以降であるのに対して、それ以前の遺跡が背後に山を控えたその出入口にあたる丘陵に立地しているのは、多種多様な生態系を網羅的に利用していたことによるという（佐藤 2006：22）。②の指標はクリアされているといってよい。

問題は③である。八丁平遺跡の第 1 地点採集石器は、崖面においておよそ 10 万年前の火山灰層の直下に露出していたとされるので、中期旧石器時代の石器として層位的にも裏付けられたかに見える。しかしその検出状況に対して、この石器には新しい傷が多くみられ（図 4）、この石器が長く地表に露出していた可能性があることから、再検討の余地があると言わざるを得ない。そこで、発掘調査時に壁面から採集した各層の土壌と石器に付着している土の比較分析を藤根久に依頼しておこなったが、いずれとも一致していなかった。こうした検討を経ずに『町史』で層位的な所見を中期旧石器の根拠としたのは軽率であった⁹⁾。

石器の包含層が不明瞭となると、縄文時代早期の礫器である可能性も視野に入れなくてはならない。そこで、愛鷹山麓を中心として後期旧石器時代から礫器が衰退する縄文時代中期までの遺跡の発掘調査報告書にあたったところ、礫器は八丁平遺跡第 2 地点採集の礫器のように基部が未調整で丸い礫面を残すものがほとんどであった。第 1 地点採集石器と近似した形態と技術による石器であれば、石核をとりあげなくてはならないが、そもそも礫器を含めた礫石器は剥片をはがした礫の芯の部分の部分を石器にすることから石核石器と

も呼ばれる（稲田 2010：13）ので、形状も近似するのは当然である。さらに、洋梨形に仕上げて円刃に整えた石核はもはや石核ではないのであり、これらの点から八丁平遺跡第 1 地点採集の石器を縄文時代の石器と見なすことににわかに賛成することはできない。

註

- 1) この石器は『大仁町史』で触れているので、この章では扱わない。
- 2) 第 1 地点との間は発掘調査はもちろん、表面採集もおこなっていない。将来、一続きの遺跡である可能性も否定できず、そうなった場合は発掘調査地点は第 2 地点になる。
- 3) その後、伊豆の国市文化財年報に発掘調査の結果を公表したが、『大仁町史』の再録である（設楽・山本 2015）。いずれ、正式な発掘調査報告書を刊行したい。
- 4) 増島淳からは堆積土壌の分析報告をいただいているが、これも正式な発掘調査報告に譲る。
- 5) 竹岡俊樹は前期旧石器としている（竹岡 2002）。
- 6) 佐藤宏之は中期旧石器としている（佐藤 2010：367）。
- 7) 黄土—古土壌序列において、黄土層が L、古土壌層が S で表記されており、第三黄土であれば L₃ とされる。
- 8) 稲田孝司は砂原遺跡の玉髄製の資料は自然破碎の礫および剥片とする（稲田 2011：11）。
- 9) 本稿は『大仁町史』の記載の軌道修正をはかったが、『大仁町史』の層位的な所見にもとづいて八丁平遺跡第 1 地点採集の石器が中期旧石器に遡ることを論じた文献がすでにある。この点について、おわびしたい。

引用・参考文献

- 稲田孝司 2010 「旧石器時代の人類史と日本列島」『旧石器時代上』講座日本の考古学 1, 青木書店, 3-39
- 稲田孝司 2011 「列島「最古級の石器」とその調査の問題点」『旧

石器研究』7:1-14

- 小野章太郎 2018 「前期旧石器研究と東北日本」『東北日本の旧石器時代』東北日本の旧石器文化を語る会, 221-237
- 小畑弘己 2010 「朝鮮半島の旧石器文化」『旧石器時代(下)』講座日本の考古学2, 青木書店, 481-510
- 加生沢遺跡調査会 1968 『愛知県加生沢旧石器時代遺跡』言文社
- 加藤真二 2000 『中国北部の旧石器文化』同成社
- 加藤真二 2010 「中国の旧石器文化」『旧石器時代(下)』講座日本の考古学2, 青木書店, 452-480
- 菊池強一ほか 1986 『金取遺跡』宮守村教育委員会
- 金正培 2005 『韓国の旧石器文化』六一書房
- 黒田篤史 2005 『金取遺跡-第2・3次発掘調査報告書-』宮守村文化財調査報告書第8集, 宮守村教育委員会
- 黒田篤史・小向裕明・武田良夫・菊池強一 2017 「岩手県遠野市金取遺跡の調査」『第31回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』72-81
- 紅村 弘 1989 『加生沢遺跡石器資料写真集』
- 佐川正敏 2008 「東アジア旧石器時代の大重量石器を考える」『芹沢長介先生追悼 考古・民族・歴史学論叢』六一書房, 167-187
- 佐川正敏 2010 「東アジアに於ける竹佐中原遺跡の位置づけー大重量石器の視点からー」『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ 国道474号(飯喬道路)埋蔵文化財発掘調査報告書2-飯田市内その2-』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書85, 国土交通省中部地方整備局・(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター, 354-364
- 佐藤達夫・小林達雄・坂口 豊 1962 「大分県丹生遺跡出土の前期旧石器(予報)」『考古学雑誌』47(4):293-311
- 佐藤宏之 2003 「中期旧石器時代研究の地平」『博望』4:9-22
- 佐藤宏之 2009 「東アジア型ハンドアックス石器群の展開」『加藤晋平先生喜寿記念論文集物質文化史学論聚』北海道出版企画センター, 45-55
- 佐藤宏之 2010 「日本列島における中期/後期旧石器時代移行期の石器群と竹佐中原遺跡」『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ 国道474号(飯喬道路)埋蔵文化財発掘調査報告書2-飯田市内その2-』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書85, 国土交通省中部地方整備局・(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター, 365-372
- 佐藤宏之 2016 「更新世の日本列島における自然・資源環境の変動と人類行動の応答」『考古学は科学か 上』田中良之先生追悼論文集, 中国書店, 199-214
- 設楽博己 2010 「八丁平遺跡」『大仁町史 資料編1 考古・古代・中世・美術』伊豆の国市教育委員会, 14-17
- 設楽博己・増島 淳 2014 「八丁平遺跡の旧石器」『大仁町史 通史編1 原始・古代・中世・近世』伊豆の国市教育委員会, 22-
- 31
- 設楽博己・山本哲也 2015 「八丁平遺跡」『伊豆の国市 文化財年報1』伊豆の国市文化振興課, 5-7
- 鈴木忠司(編) 1992 『大分県丹生遺跡群の研究』古代学研究所研究報告第3輯、財団法人古代学協会
- 諏訪間 順 2010 「後期旧石器時代初頭石器群からみた最古の旧石器の諸問題」『旧石器時代研究の諸問題-列島最古の旧石器を探る-』日本旧石器学会第8回講演・研究発表・シンポジウム予稿集, 日本旧石器学会, 49-52
- 大工原 豊 2002 「打製石斧の系譜」『石斧の系譜-打製斧形石器の出現から終焉を追う-』第10回岩宿フォーラム/シンポジウム予稿集, 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会, 10-15
- 大工原 豊 2004 「不二山遺跡に関する問題-その「史料批判」的検討-」『群馬の旧石器』みやま文庫, 47-67
- 竹岡俊樹 2002 「大分県丹生遺跡の最検討」『日本旧石器学の再出発三十六人の提言』SCIENCE of HUMANITY bensei vol.40:171-175, 勉誠出版
- 竹岡俊樹 2005 『前期旧石器時代の型式学』学生社
- 長井謙治 2010 「前・中期旧石器時代の石器製作技術」『旧石器時代研究の諸問題-列島最古の旧石器を探る-』日本旧石器学会第8回講演・研究発表・シンポジウム予稿集, 日本旧石器学会, 45-48
- 春成秀爾 2018 「権現山の「洋梨形」ハンドアックスとは何だったのか」『旧石器考古学』83, 旧石器文化談話会, 1-30
- 裴 基同(著)・黄 昭姫(訳) 2001 「韓半島の前・中期旧石器時代」『旧石器考古学』62:1-10
- 松藤和人・麻柄一志・中川和哉・津村宏臣・黄 昭姫 2007 「レス-古土壤編年による東アジア旧石器編年の再構築」『東アジアにおける古環境変遷と旧石器編年』同志社大学, 77-106
- 松藤和人編 2013 『砂原旧石器遺跡の研究-島根県出雲市多伎町砂原所在砂原遺跡発掘調査報告書-』砂原遺跡学術発掘調査団
- 八幡一郎・賀川光夫 1955 『早水台』株式会社森沢商店早水台出版部
- 王 建・陶 富海・王 益人 1994 「丁村旧石器時代遺址群調査発掘簡報」『文物季刊』1994年第3期, 1-75
- 金 元龍・鄭 永和 1979 「全谷里아슬리안兩面核石器文化予報」『震檀学報』第46・47合併号, 震檀学会, 5-57
- 鄭 永和 1984 『全谷里発掘中間報告』学術調査報告第5冊, 嶺南大学校博物館
- 裴 文中(主編) 1958 『山西襄汾県丁村旧石器時代遺址発掘報告』中国科学院古脊椎動物研究所 甲種專刊第二号, 科学出版社
- Movius, Jr., H. 1944 Early man and Pleistocene stratigraphy in southern and eastern Asia, *Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology*, Harvard University, Vol. 19(3):1-125.

(設楽)

4. 八丁平遺跡採集石器に対する所見

4-1. 前・中期旧石器時代の存否論と八丁平遺跡 第 1 地点の石器

4-1-1. 2つの教訓

金木と丹生 日本列島の人類史は、どこまで古く遡るのか。この問い掛けに、1949 年、杉原荘介が 1 つの答えを出した。群馬県岩宿遺跡の表土下、更新世に火山灰が降り積ってできた赤土（ローム層）の中から、旧石器時代の石器群を掘り出したのである（杉原 1956）。以後、確認された石器群の数は、全国各地で 1 万 5 千を超える（日本旧石器学会 2010）。だが、いずれも古さは後期旧石器時代止りで、遺跡の捏造がからむ紆余曲折もへて、前・中期旧石器時代の存否についての見極めはついていない。その、これまでの道程を振り返ると、3 つの転機が認められる。

まず、最初が、1953 年の青森県金木だ（杉原 1954）。赤土下の砂礫層中にある「一見人工が加わったごとく見える破碎礫の一群」が、杉原に発掘の実施を決意させる。杉原は、赤土中の石器に照らして、「石器の粗製なることと、地質時代の古さとが合理性をもって合ってくる」とし、赤土の下に前・中期旧石器時代の存否を探る手掛かりがあると考えた。そこで、地質学者と地理学者とを加えた調査団を組み、砂礫層の中により古い旧石器時代の石器を求めた。共に岩宿遺跡を発掘した芹沢長介も、同じ調査団の一員だ。

金木砂礫層は、石英粗面岩の円礫と硬質頁岩の角礫から構成されていて、後者の角礫に石の打ち割り（貝殻状剥離）時に生じる打瘤（バルブ）や石器を仕上げる打ち欠きの細部加工など、「人工的に剥離が加えられたごとく見えるもの」が混在していた。ところが、「その角礫は相互にぶつかる時は、破碎礫として打瘤のごときものが偶然にできることもあるし、同じような接触が繰り返されれば細部加工に類似した角礫の縁辺も生ずる」ものとわかる。

加えて、「遺跡という概念から見れば、それが角礫層中に発見されるということから、一次的な生活を知ることは全然できない」と断定する。その結果、「遺跡としての観察や、岩石の産地よりする方法などから、これらの破碎礫を人工のものだとすることは困難」との結論に達し、破碎礫の全てをみな偽石器とみなした。ただし、「遺跡という概念」や「遺跡としての観察」の内容が具体的に示されることはなかった。

こうして、日本の旧石器時代研究は、石器については人工の認否が、地層については居住環境の適否が、それぞれ前・中期旧石器時代の存否を探る大前提であることを学んだ。なお、この金木の調査結果は、1954 年に公表されたが、20 年後に、原著にはなかった破碎礫の実測図を新たに添えて再刊されている（杉

原 1974）。その実測図を作成した私は、「限りなく人工品らしく、限りなく自然石らしく描くように」と杉原に命ぜられ、困惑した思い出がある。

丹生遺跡 杉原が金木で偽石器と遭遇してから 9 年が過ぎた 1962 年、大分県丹生遺跡の石器群が華々しく学界に登場した。日本考古学協会の場の同一会場で、司会が杉原という巡り合せの中、2 つの研究グループが相前後して、丹生遺跡について別々に発表をおこなうという、かつて前例のない出来事が起こる（角田 1962；金関ほか 1962）。というのも、丹生石器群には、東アジアにおける中期旧石器時代の礫器石器群として、この発表のわずか 4 年後にはヨーロッパの専門書に図解されることになる、一連の石器が含まれていたからに他ならない（Leroi-Gourhan ほか 1966）。あたかも、日本列島に後期よりも古い旧石器時代が存在したとの証拠を巡る、その先陣あらしの様相を呈した。

確かに、金木とは違って、丹生遺跡の石器をみて、偽石器だと疑う研究者はなかった。だが、別の問題があった。それは、海外でも紹介された礫器に付きまとう、古さを決定するうえでの困難さだ。発表者の 1 人である角田文衛も、その後自ら、こう述べている（角田 1971）。「礫器と言う素朴なる石器は、製作の技法や形態に若干の相違はあっても、旧石器時代から新石器時代を通じて製作・使用されたものであり、その存在を特定の時期に定位せしめることは出来ない。これは特に遠古における文化の周辺地域において顕著に見られる事象である」と。実際、当時の学界では、縄文時代の遺跡から出土する礫器の諸例が知られていた。

それが、ことさら問題視されたのは、「石器の大部分は、ブルトーズによって拓かれた畑地や道路面に散乱する礫に混じって」、「少数は崖面露呈した赤土層とその下方の角礫層との境めから」、それぞれ採取・採集された資料だったことによる（角田 1962）。そして、以後 4 次におよんだ調査を踏まえて、1992 年、正式報告書が刊行された（古代学協会 1992）。しかし、丹生遺跡の石器群が包含されていた地層とその形成経緯および古さの全貌は、今なお明らかになったとはいえない。

つまり、丹生遺跡からは、前・中期旧石器時代の存否を探る手掛かりとして、石器については人工の認否に加え古さの同定が、地層については居住環境の適否に加え石器出土層準の確定が、各々必須の条件となることを学んだのである。岩宿遺跡に始まる日本の旧石器時代研究に与えられた、金木につぐ 2 つ目の教訓だ。以来、日本人類文化の起源を探る研究は、石器の型式とその出土層準を一体的にとらえる必要性を痛感し、考古学と地質学の連携が一段と深まる。

座散乱木 そうした中で、日本の旧石器時代研究

は、岩宿以来の枠組みを再構築しようとしていた。その研究体系の見直しは、関東平野の武蔵野台地を舞台にして、2つの方向に進む。東京都野川遺跡（小林ほか1971）が端緒となった、重層遺跡の層位的な出土例にもとづく石器の編年研究と、埼玉県砂川遺跡（戸沢1968）から出発した、個別別資料分析法を土台とする遺跡の構造研究だ。

層位的な出土例の検出作業は、東京都ICU Loc.15遺跡（キダーほか1972）で立川ローム層の下底部に達すると、東京都平代坂遺跡（小金井市教育委員会1974）、同中山谷遺跡（キダー・小田1975）、同高井戸東遺跡（小田ほか1977）など、一挙に類例が増加し、研究者のどれも、より下位の武蔵野ローム層に手が届くのは時間の問題だと実感し始める。立川ローム層は後期旧石器時代に、武蔵野ローム層は中期旧石器時代に、それぞれ該当する古さの地層だ。中期旧石器時代の存否の確認が、にわかに現実味を帯びてきたのである。

また、個別別資料の分析は、遺跡にブロックをなす石器群のまとまりが、ローム層中に残る住まいの痕跡であることを明らかにした（安蒜1974）。いいかえると、石器群がブロックを形作っていれば、地層中のその場が旧石器時代の住まいであった証しとなる。ここに、ブロックという遺構が、「遺跡という概念」の実態であり、「遺跡としての観察」基準の1つとなった。したがって、逆に、ブロックがない石器の出土状況は、一帯に住まいがなかったと判断されてくる。その意味で、石器群の出土状況を示すドット・マップの提示は、極めて重要な役目を担う。

その後、1980年代に入り、ついに、武蔵野ローム層からブロックが掘り出された。だが、場所は武蔵野台地ではなく、東北の地であった。1983年、石器文化談話会（東北旧石器文化研究所の前身）が、宮城県座散乱木の武蔵野ローム層に相当する古さの火山灰層中から、ブロックを発見したと報告（石器文化談話会1983）。そして、同報告書中で、「ほぼ日本の考古学が始まった時から、学界の課題となり、芹沢長介をはじめとした多く研究者によって精力的に推進されてきた前期（＝前・中期、後述）旧石器存否論争は、ここに結着した」と宣言するに至る。以後、石器文化談話会と東北旧石器文化研究所の主導のもと、前・中期旧石器時代の遺跡が次々に発掘されていった。しかし、2000年、それら一連の遺跡の捏造が発覚する。

日本考古学協会は、捏造発覚直後、前・中期旧石器問題調査研究特別委員会を設置し、4カ年にわたる検証の結果、166カ所を捏造された遺跡と結論付け公表した。捏造は、発掘が進行中の現場で、年代が明確な火山灰の地層に、事前に準備した石器をブロック状に埋めるかたちでおこなわれ続けた。この手口は、そ

こが遺跡であると判断する決め手のブロックそのものを偽造するという巧妙さと、石器が傷のついた表面採集品であったり、地層が居住不可能な火砕流であったりするなどの稚拙さとを、併せもっていた（日本考古学協会2003）。

こうして、日本の旧石器時代研究は、約20年間の前・中期旧石器時代捏造史という十字架を背負って、再度、「金木・丹生」の教訓を噛み締めることとなった。だが、捏造の発覚は、直ちに日本列島の前・中期旧石器時代を否定するわけではない。改めて、2つの教訓を生かし、前期と中期の存否を論じる段階を迎えたのだ。まずは、芹沢長介が主張する「前期旧石器時代」の検証が必要となる。

4-1-2. 芹沢長介の「前期旧石器時代」説

芹沢説の組み立て 芹沢が「1964年いらい、私たちは日本における前期旧石器の研究を続けてきている」（芹沢1971）と回顧する研究の端緒は、長崎県福井洞穴（鎌木・芹沢1964）と大分県早水台遺跡（芹沢1965）だ。芹沢のいう「前期旧石器時代」とは、3分法の後期旧石器時代に先立つ前期と中期を合わせた時代で、日本列島の旧石器時代を約3万年前で新旧に2分する時代区分にもとづいている（芹沢1969）。そして、芹沢は、層位は型式に優先するという「鉄則」のもと、石器の層位的な出土例と¹⁴C年代を駆使して、日本旧石器時代の編年を組み立てた（芹沢1967）。

芹沢は、まず、福井洞穴には立川ローム層から武蔵野ローム層相当期の、栃木県星野に武蔵野ローム層から下末吉ローム層相当期の、それぞれ層位的な石器の出土例が残されていると考えた。ついで、この前提に立って、「星野の層序のうえに福井の層序をつき足して」、「日本旧石器の縦の系統図」を作りあげる。こうして、日本旧石器時代の編年に、後期旧石器時代を遡る「前期旧石器時代」が位置付けられることになった。

その星野に代表される「前期旧石器時代」の石器群は、後期旧石器時代の貝殻状剥離とは異なる技術で作られていた。すなわち、石器は、バルブ（打瘤）などを生じない、「打撃点から髭状フィッシャーが流出」する「板状の剥離」で仕上げられる。しかも、石材は、珪岩一色。また、それらの「珪岩製旧石器」は、ほとんどが出土層中で自然礫と混在し、ブロックをなすことはなかった。この「芹沢の前期旧石器時代」に、1967年、杉原が異を唱える（杉原1967）。

芹沢説の検証 杉原は、星野の「珪岩製旧石器」を人工品ではなく自然石と断じた。それは、とりもなおさず、「珪岩製旧石器」と一体化した「芹沢の前期旧石器時代」の否定を意味する。そればかりか、杉原は、日本には、もともと下部・中部（前期・中期および芹沢の「前期」に相当）の時代そのものが存在しなかったとする

仮説を提示した(杉原 1967)。ここに至り、日本の旧石器時代研究は、「珪岩製旧石器」の真偽と直結した「芹沢の前期旧石器時代」と、日本列島ではまだみぬ、広く世界に共通する貝殻状剥離で石器が製作された、「未知の前・中期旧石器時代」の存否という、2つの争点が生じる事態に直面することとなった。

それから4年後の1971年、杉原・芹沢間に端を発した論争が頂点に達した。2つの争点が生じる中、「第四紀研究」誌上で、考古学と地質学の双方の立場から、石器の認否と出土層位の適否についての諸問題が討議される(日本第四紀学会 1971)。だが、「芹沢の前期旧石器時代」と「未知の前・中期旧石器時代」の存否についての明確な結論は下されなかった。この状況は、今なおかわらない。とはいえ、近年、「未知の前・中期旧石器時代」追究が新発見待ちの中、「芹沢の前期旧石器時代」の存在を危ぶませる2つの動きがある。

1つが、「珪岩製旧石器」についての研究だ。「珪岩製旧石器」は、「今日、多数意見は、人工品であることに否定的と思われる」(山田 2014)。それだけに、ドット・マップが示されない場合の多い、「珪岩製旧石器」の出土状態には、何故ブロックを形成しないかについての十分な説明が求められている。果して、「珪岩製旧石器」は、石器か自然石か。元来「珪岩製旧石器」群には分布の集中がないのか(無ブロック)、それとも元位置から動いてブロックのかたちをくずしているのか(流れブロック)。捏造事件を機に設立された日本旧石器学会は、2010年、「珪岩製旧石器」の組織的な検証に入ることを表明した。だが、いまだ実現をみない。

いま1つは、星野とともに芹沢の日本旧石器時代研究に編年の序列を与えた、福井洞穴の層位的な石器の出土例だ。最下底の福井第15層は、「芹沢の前期旧石器時代」と後期旧石器時代をつなぐ鍵層で、同層の ^{14}C 年代は、 $> 31,900$ 年(Gak-952)と報じられてきた。その福井洞穴が、史跡整備の一環として2012年に再発掘され、新たな知見をもたらせた(佐世保市教育委員会 2013)。調査の結果、細石器文化の進展経緯を詳細に跡付ける層位的な出土例を追認し、福井洞穴がもつ細石器文化研究上の重要性を改めて認識させた。と同時に、最下層である福井第15層も細石器文化に関連する時期で、中期旧石器時代までには遡らない可能性がでてきた。以上2つの動向は、「芹沢の前期旧石器時代」の土台を根底から揺るがせそうだ。

4-1-3. 八丁平遺跡第1地点発見の石器

石器の観察 ここに、設楽博己から観察の所見を求められた、静岡県八丁平遺跡第1地点の石器がある。1967年に、農道取り付け用の切り通しから採集された石器だ。発見時、本石器は、切り通し断面の、10万年前に降灰したHk-Da-4の下位のローム層中に刺

さった状態だったという(設楽・増島 2014)。「芹沢の前期旧石器時代」に疑義をただした杉原が、自説の論陣を張った年の出来事だ。事の重大さを認識して、大仁町史編纂委員会は、2011年、同遺跡を発掘する。しかし、石器の発見地点を特定できず、採集層準中からの石器群の検出もならなかった。以下は、採集された石器についての所見である。

器面は摩滅し、擦り傷や欠け痕が生々しい。本来の遺物包含層を離れて、長時間地表にさらされてできた傷跡で、同石器が、採集時に元位置を保っていた可能性は皆無にひとしい。石器の表裏両面には、礫面が残されている。原石は、ホルンフェルスの扁平な円礫である。その原石を、3種類の剥離面が覆っている。鈍い角度で打ち取られた相対的に長大な剥離面と鋭い角度に打ち取られた相対的に短小な剥離面、それに細部を連続して打ち欠いた剥離面だ。これらの3者は、概略、記述順に、粗割り、整形、仕上げという石器製作の手順を示している。その石核石器(礫核石器)作りの過程で、一部に交互剥離状の加工もみられる。なお、器面には、槍先形尖頭器作りでも生じる「ステップ」や「瘤」に似た突起が残されている(小菅 2002)。これが作り手の技量を推量する材料となるとすると、したがって、本石器が熟練した作り手の作かどうかの疑念もわく。

さて、杉原は、人類史上で最も古い石器の一群として、礫器(Pebble tool)、片刃と両刃(Chopper, Chopping tool)の粗製石器、楕円形・長楕円形・洋梨形に区分できる握斧状石器(Hand-axe, 以下握斧)、鶴嘴状石器(Pick)、鉋状石器(Cleaver)、円盤状石器(Disc)を区分した(杉原 1965)。そして、いずれも石核石器が主なこれらを敲打器(Axe tool)と呼び、一群の石器が発達した階梯に敲打器文化の名を与えた。併せて、「敲打器そのものは、いわゆる旧石器、中石器、新石器時代を通じ、かたちをいろいろとかえて存在した。しかし、敲打器という石器を主体とした文化は、一般には下部旧石器時代(前期旧石器時代)を中心としてのみみられる」と解説した。八丁平遺跡第1地点の石核石器は、杉原のいう敲打器のうちの握斧に該当する。

学史からの検討 いうまでもなく、八丁平遺跡第1地点の石器は、「珪岩製旧石器」の真偽と「無ブロック」状況が問われる「芹沢の前期旧石器時代」ではなく、「未知の前・中期旧石器時代」の存否に係ってくる。ところで、初め「芹沢の前期旧石器時代」にあって、後に丹生遺跡と同様に、出土層準の確定をみずに編年表から削除された資料に、群馬県不二山石器群(新井 1956)と群馬県権現山I石器群(Maringer 1956)がある。その権現山I石器群に洋梨形の握斧が含まれているとみた杉原は、旧大陸だけではなく、日本列島にも敲打器文

化があったと推定した(杉原 1965)。そして、楕円形の握斧を特徴とする岩宿Ⅰ石器群を、「日本における敲打器文化の終末のすがた」と性格付けた。しかし、杉原は 2 年後、日本列島の敲打器文化の古さは後期旧石器時代を遡らず、前期や中期の旧石器時代は存在しなかったと見解を一変させてしまう(杉原 1967)。ここにも、敲打器、別けても握斧の古さを決定するうえでの難しさが示されている。

一方、杉原分類の敲打器は、立川ローム層および相当層の全層準から出土する(日本旧石器学会 2010)。たとえば 5 時期 3 文化編年に照らすと(安蒜 1986)、敲打器は、後期旧石器時代に相当する日本旧石器時代の全ての時期と文化に認められている。そうした中、敲打器は、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石器の各文化期の順で出土頻度が減り、第Ⅰ期には局部磨製石斧が特徴的に発達する。かつて、杉原が楕円形の握斧に分類した岩宿Ⅰ石器群の敲打器は、局部磨製石斧であった。また、丹生遺跡から出土した一連の「斧状石器」も立川ローム層該当層中の敲打器と考えられている(古代学協会前掲)。

では、それら立川ローム層中から出土する後期旧石器時代の敲打器と前・中期旧石器時代の敲打器とを、一体どう区分すべきか。これまでは、世界基準の典型的な示準石器との異同をとおして、敲打器の時代と文化の古さが論じられてきた。岩宿遺跡の発掘から、すでに 65 年が過ぎようとしている。そろそろ、従来の観点に加えて、立川ローム層中には存在しないという裏付けをとって古さを検証する、新たな敲打器の観察法が提示されてもよい。それが、日本列島における前・中期旧石器時代の存否をひもとく糸口にもつながるだろう。八丁平遺跡第 1 地点の石器を巡る年代の論議は、その 1 つの契機だ。

参考・引用文献

- 新井房夫 1956 「赤城火山西南部の関東ローム」『地球科学』28: 23-30, 地学団体研究会
- 安蒜政雄 1974 「砂川遺跡についての一考察ー個別体資料による石器群の検討ー」『史館』2: 1-8
- 安蒜政雄 1986 「先土器時代の石器と地域」『岩波講座日本考古学』5, 岩波書店, 27-60
- 小田静夫・伊藤富治夫・C.T.Keally・重住 豊 1977 『高井戸東遺跡』高井戸東遺跡調査会
- 金関丈夫・山内清男・佐藤達夫 1962 「大分県丹生遺跡の旧石器」『日本考古学協会第 28 回総会研究発表要旨』日本考古学協会, 10-11
- 鎌木義昌・芹沢長介 1964 「福井洞穴第三次調査について」『洞穴遺跡調査会報』12: 1
- 小金井市教育委員会 1974 『平代坂・七軒家』小金井市文化財調査報告書 3
- 小菅将夫 2004 「両面加工尖頭器の製作技術」『石器づくりの実験考古学』学生社, 123-136
- 古代学協会 1992 『大分県丹生遺跡群の研究』古代学研究所研究報告第 3 掲
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4: 231-252, 日本第四紀学会
- 佐世保市教育委員会 2013 『史跡福井洞窟発掘調査速報』佐世保市文化財調査報告書第 10 集
- 設楽博己・増島 淳 2014 「静岡県伊豆の国市八丁平遺跡の旧石器」『大仁町史』通史編, 伊豆の国市教育委員会, 1-10
- J.E. キダー・小山修三・小田静夫・及川昭文 1972 「国際基督教大学構内 Loc.15 の先土器時代」『人類学雑誌』80-1: 23-42, 日本人類学会
- J.E. キダー・小田静夫 1975 『中山谷遺跡』国際基督教大学考古学研究センター
- 杉原荘介 1954 「青森県金木砂礫層出土の偽石器」『INQUA 日本支部連絡誌』7 (再録: 1974 『日本先土器時代の研究』講談社, 179-183)
- 杉原荘介 1956 『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告考古学第 1 冊
- 杉原荘介 1965 「敲打器文化」『先土器時代』日本の考古学Ⅰ, 河出書房, 118-130
- 杉原荘介 1967 「"SUGIHARA'S HYPOTHESIS" を破ってほしい」『月刊考古学ジャーナル』8: 2-3, ニュー・サイエンス社
- 石器文化談話会 1983 『座散乱木遺跡一考古学と自然科学との連携』座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅲ
- 芹沢長介 1965 「大分県早水台における前期旧石器の研究」『日本文化研究所研究報告』第 1 集, 東北大学, 1-119
- 芹沢長介 1967a 「日本における旧石器の層位的出土例と ^{14}C 年代」『日本文化研究所研究報告』第 3 集, 東北大学, 59-109
- 芹沢長介 1967b 「＜連載講座＞日本の旧石器(特論)ー前期旧石器の諸問題ー」『月刊考古学ジャーナル』9: 11-14, ニュー・サイエンス社
- 芹沢長介 1968 『栃木市星野遺跡第 2 次発掘調査報告』ニュー・サイエンス社
- 芹沢長介 1969 「日本の石器時代」『科学』39-1: 28-36, 岩波書店
- 芹沢長介 1971 「前期旧石器に関する諸問題」『第四紀研究』10: 179-190, 日本第四紀学会
- 角田文衛 1962 「大分県丹生台地発見の石器類」『日本考古学協会第 28 回総会研究発表要旨』日本考古学協会, 9-10
- 角田文衛 1971 「賀川論文に対する論評」『第四紀研究』10-4: 223-225, 日本第四紀学会
- 戸沢充則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4-1: 1-42, 東京考古学会
- 日本旧石器学会 2010 『日本列島の旧石器時代遺跡ー日本旧石

器（先土器・岩宿）時代遺跡のデータベース』

日本考古学協会 2003 『前・中期旧石器問題の検証』

日本第四紀学会 1971 『第四紀研究 日本旧石器特集号』 10-4

山田しょう 2014 「前期旧石器時代存否論争と珪岩製旧石器」
『季刊考古学』 126: 19-23, 雄山閣

André Leroi-Gourhan, Gérard Bailloud, Jean Chavaillon et
Annette Laming-Emperaire 1966 *La Préhistoire*, Presses
Universitaires de France, Paris

J. Maringer 1956 *Einige faustkeilartige Geräte von
Gongenyama(Japan) und die Frage des Japanischen
Paläolithikums, Anthrops*, Bd.51:175-193

補記：前・中期旧石器時代存否の現況

以上は、2014 年時点の所見である。それから 6 年余が経過した。この間、日本の旧石器時代研究は、岩宿遺跡で後期旧石器時代の存在が確認されてから 2019 年に 70 年目の、また翌年 2020 年には座散乱木の前・中期旧石器時代遺跡の捏造発覚から 20 年目の、それぞれ節目を迎えた。だが、杉原・芹沢間の主張の違いに端を発した、前・中期旧石器時代の存否論争は、いまだ決着をみていない。

果して、「未知の前・中期旧石器時代」は実在するのか。八丁平遺跡発見の石器は、旧石器時代に作り使われた握斧の可能性が大きい。となれば、前・中期旧石器時代の存否は、とりもなおさず、八丁平遺跡から発見された握斧の古さとも直結してくることとなる。そこで、2014 年の所見に、前・中期旧石器時代存否研究の現況という視点からの所感を付記させて頂く。

前述のとおり、「珪岩製旧石器」と「日本旧石器の縦の系統図」が疑義にただされ、前・中期旧石器時代の存在を主張する「芹沢の前期旧石器時代（前・中期旧石器時代）」（芹沢 1967a）は、根拠が危うい。いうまでもなく、「座散乱木の前・中期旧石器時代」は虚構に終わった（日本考古学協会 2003）。では、日本列島には、「未知の前・中期旧石器時代」は存在しなかったのか。存在しなかったとする主張が杉原仮説だ（杉原 1967）。

そもそも杉原の仮説は、「日本と大陸との間にかけられた陸橋によってはじめて人間が移住できた」とする、大前提に立つ。そして、大陸と日本列島の間になかった陸橋として、新人の時代（後期旧石器時代）の新橋 I・II と旧人の時代（中期旧石器時代）の中橋、それに原人の時代（前期旧石器時代）の古橋を想定した。そのうえで、新橋を伝った新人の渡来をもって、日本旧石器時代（後期旧石器時代）の開始とする。

このように、杉原仮説は、中橋と古橋を設定しながら、日本列島に中期と前期の旧石器時代が存在しないと断じるが、「わが日本には、下部旧石器時代（前期旧石器時代）さらに中部旧石器時代（中期旧石器時代）に関す

る遺跡について、その存在を明確に立証できる資料はほとんどない」という説明以外の裏付けを欠く。見直しが必要だ。

関東ローム層に覆われた南関東は旧石器時代遺跡の密集地で、数多くの重層遺跡が残されている。関東ローム層最上位の立川ローム層は後期旧石器時代全期間の、直下の武蔵野ローム層とさらに下位の下末吉ローム層は中期旧石器時代の、それぞれ地層だ。だが、立川ローム層中で全層準から出土する石器群が、武蔵野ローム層中の石器群と重なり合う例はない。そればかりか、武蔵野ローム層中に石器群はない。立川・武蔵野ローム層は「堆積間隙の少ない風成堆積物」であるにもかかわらず、立川ローム層中にある遺跡が武蔵野ローム層中になく現実には「日本列島の人類史にとって特定の意味をもつ事実である」（町田 2005）。

実際、朝鮮半島の南部（韓国）では、後期旧石器時代遺跡の 3 割が中期旧石器時代以前の遺跡と重なり合う（安藤 2010）。これをも考え合わせれば、もはや、日本列島に中期旧石器時代、少なくともその後半期が存在しないことは明白だ。と同時に、「航海のできない」旧石器時代人を前提とする杉原説がゆらぐ。というのも、後期旧石器時代の日本列島を取り囲む「海面変化の大局は、AT 堆積の直後のころから 1.5 万年前頃まで、多少の変動はあったが、-100m 以下とかなり低い位置を保っていた」からだ（町田・新井 2003）。

したがって、当該時期の日本列島は、北海道がサハリンと接続して古ユーラシア大陸の半島となり（古北海道半島）、本州は四国・九州と 1 つの島を形作っていた（古本州島）。この時点の琉球諸島は、すでに島嶼化している（古琉球諸島）。そして、後期旧石器時代は、古本州島に始まる。となれば、AT 堆積前の最終氷期の最寒冷期に向かう後期旧石器時代の初頭と、遡った間氷期の中期旧石器時代には、古本州島と古ユーラシア大陸間に陸橋はかからなかったようだ。

そうした状況下で、海を越えて、朝鮮半島にいた旧人は日本列島へと渡来せず、アフリカを出た新人は日本列島へと移住している。すなわち、杉原の前提とは異なり、旧人は海を渡れなかったが、新人はフネを造り航海していた裏付けがとれそう（安藤 2017）。これも日本列島に中期旧石器時代がなかった可能性を一段とつよめる。では、原人の時代である前期旧石器時代の存否については、どうか。

杉原のいう古橋がある前期旧石器時代の存否には諸説あるが（白石 2019）、いずれとも決していない。ちなみに、朝鮮半島の中期旧石器時代以前は、PSSB と敲打器が発達する石器群で特徴付けられている（Lumley ほか 2011）。どれもが礫核石器で、PSSB とは多面体石器（Polyhedrons）・半球状体石器（Sub-spheroids）・球状石

器 (Spheroids)・石球 (Bolas) の頭文字を組み合わせた略記で、敲打器には礫器と握斧とがある。別けても、アジアの礫器文化圏とヨーロッパの握斧文化圏とを対置させる通説 (Movius 1948) に反し、握斧が顕著だ。

これら朝鮮半島の石器群が、日本列島にもあったのか。その確かな存否は、未検証といわざるを得ない。そこで、芹沢説が存在を主張した前期と中期から実在しない中期を取り去り、杉原説が存在を否定した前期と中期から未確認状況の前期を残し置く時、「日本列島には中期はないが、後期に先立ち前期旧石器時代があった」という、第3の新たな仮説が成立しそうだ (安蒜 2017)。そして、八丁平遺跡発見の握斧が、その前期旧石器時代の存否に大きく係わってくる。

参考・引用文献

- 安蒜政雄 2010 『『前期旧石器時代』の存否と日本列島最古の石器群』『旧石器時代研究の諸問題 ―列島最古の旧石器を探る 日本旧石器学会第8回会講演・研究発表シンポジウム予稿集』, 31-34
- 安蒜政雄 2017 『日本旧石器時代の起源と系譜』雄山閣
- 白石浩之 2019 「総論 前・中期旧石器捏造問題 20 年の教訓と研究の方向性」『月刊考古学ジャーナル』730:3-6, ニュー・サイエンス社
- 町田 洋・新井房夫 2003 『新編 火山灰アトラス ―日本列島とその周辺』東京大学出版会
- 町田 洋 2005 「[総説] 日本旧石器時代の編年: 南関東立川ロームの再検討」『旧石器研究』1:7-16, 日本旧石器学会
- Movius, H. L. Jr. 1948 The Lower Palaeolithic Cultures of Southern and Eastern Asia. *Transactions of the American Philosophical Society*, 38
- Henry de Lumley, Yung-Jo Lee, Young-Chul Park et Kidon Bae, Les industries du Paléolithique ancien de la Corée du Sud dans leur contexte stratigraphique et paléoécologique, Leur place parmi les cultures du Paléolithique ancien en Eurasie et en Afrique. CNRS EDITIONS, 2012

(安蒜政雄)

4-2. 八丁平遺跡の石器 2 点観察・分析報告

4-2-1. 基礎的データ

遺跡地 静岡県伊豆の国市浮橋八丁平

発見年月 1967 (昭和 42) 年秋

発見者 漆畑稔

発見状況 農道・畑の崖断面から採取

資料 1: 第 1 地点 二枚の軽石層があり、上位は 9 万年前の「達磨山 Da-5」(1.5m)、下位は 10 万年前の「達磨山 Da-4」(2m) で、その直下のローム層 (0.5m) 中に、突き刺さった状況で石器が露出していた。現在、発見地点は不明である。

2011 年 6 月 1 ~ 18 日、大仁町史編纂委員会が発掘調査した。下部軽石層下の、ローム層中から「自然小礫」が 1 点出土した。この地点の地表面下 3.3m には「礫層」が認められる。

地層の年代観、上位軽石は Hk-Da-5 (9 万年前)、下位は Hk-Da-4 (10 万年前)、そして下位軽石直下のローム層中ということで、「前期・中期旧石器時代」の可能性が指摘されている。

資料 2: 第 2 地点 地表からそれほど深くない崖面から採取し、現在も地点は確認できる。周辺の畑からは縄文早期の土器も採集でき、縄文時代の可能性も指摘されている。

石器の器種・石材

(資料 1) 尖頭礫器、ホルンフェルス製

(資料 2) 片刃礫器、ホルンフェルス製

4-2-2. 分析報告 - 資料 1 について (第 1 地点) -

表面観察 1 この石器の表面を、ルーペを使用して詳細に観察した結果、石器製作時以降に付いたと考えられる、三種類の「二次的痕跡」が確認された。

A タイプー線状痕。表面が削れて、幅を持った深い溝や破碎状になっている。

B タイプー磨滅痕。表面が潰れて、トロトロになっている。

C タイプー摩耗痕。表面の一部が光に照らすと、光沢を帯びている。

A タイプは、石材よりも硬質の道具によって、表面が削られた痕。道具が走った方向が推定される。おそらく、鉄製の鍬などの農耕具によって付けられたキズであろう。

B タイプは、石器の「稜」を中心に表面が擦れたように、新しい磨滅痕が観察される。おそらく、この石器が軟質石材であり、土壤中で移動した際に、突出した部分が砂粒などで擦れたと推定される。

C タイプは、この石器が水などの影響で表面に鉄分が生成され、また水磨による光沢が生じたと推定される。両面にある自然面に顕著に認められるので、原石の時に水流による影響で付着していた可能性もある。

表面観察 2 この石器は、剥離面を含めて表面が著しく「風化」している。石材の性質や石器の遺存環境が影響してか、鋭い剥離痕が全て摩耗している。

表面観察 3 この石器は、剥離面を含めて表面が著しく「風化」している。その結果、鋭い剥離痕が失われていて、本来そうした細部に残されているはずの「包含層土壌」が認められない。したがって、この石器の原位置ローム層 (参考年代推定資料) と考えられる土壌の摘出は不可能であった。

製作技術 この石器は、分厚い楕円形の転礫を使用し、礫を横形にして両接打法を利用して、やや両面加

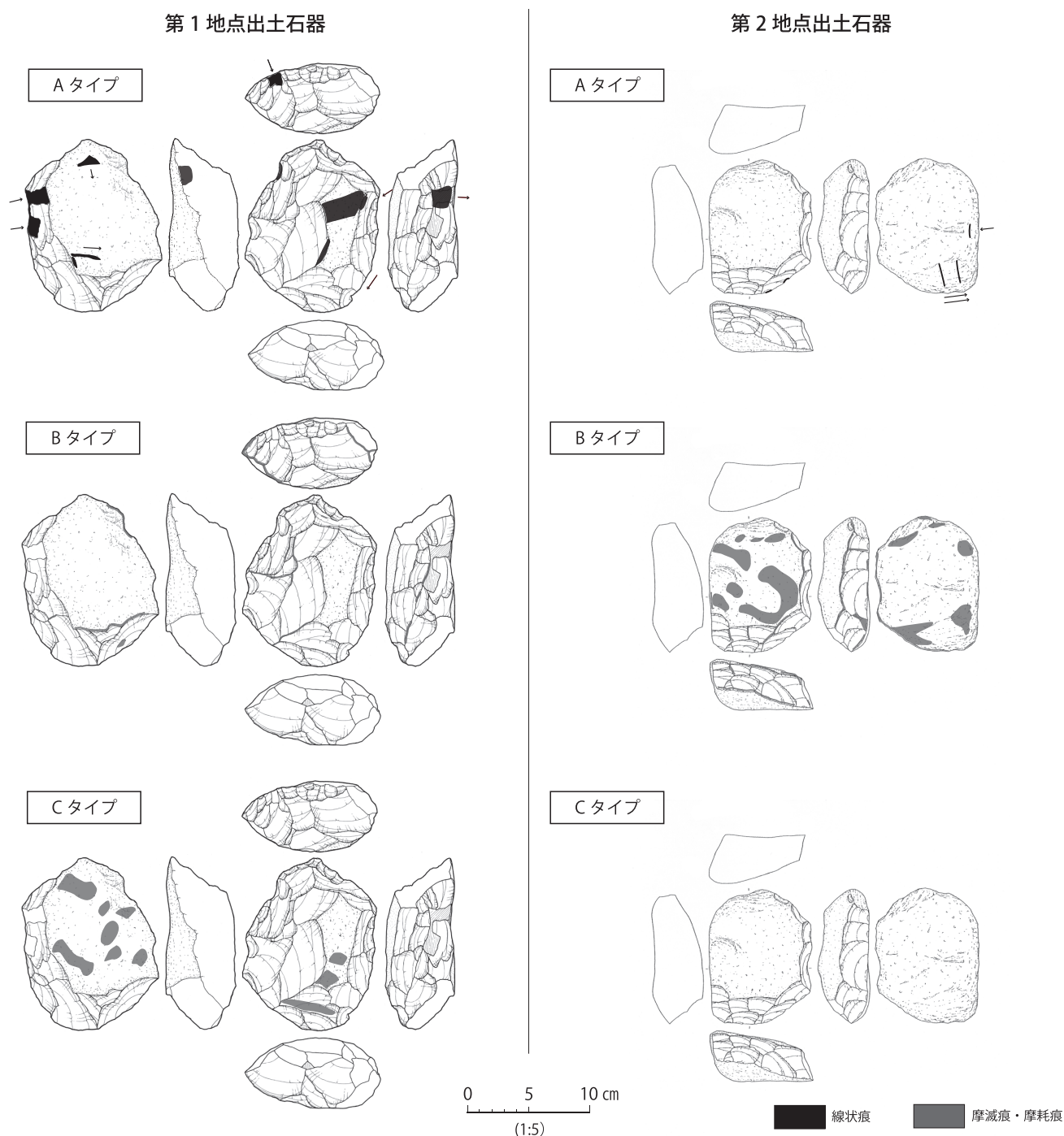


図5 八丁平遺跡出土石器の二次的痕跡

工状の整形を行っている。こうした技法は、縄文時代の打製石斧の製作に用いられることが知られている。

この石器は、石斧という用途ではなく、片面に大きく、もう片面にも自然礫面を残している。先端をやや尖らすような細部調整が施され、「尖頭状礫器」的な形状を呈している。

石材 この石器は、ホルンフェルスと判定されている。武蔵野台地の旧石器時代の礫核石器は、砂岩、安山岩、チャート、流紋岩、頁岩、凝灰岩、ホルンフェルスなど多様な石材が使用されている。概して、旧石器時代前半期は、硬質石材、終末期はやや軟質石材を

使用する傾向がある。

4-2-3. 分析報告－資料2について（第2地点）－

表面観察1 この石器の表面を、ルーペを使用して詳細に観察した結果、石器製作時以降に付いたと考えられる、二種類の二次的な痕跡が確認された。

Aタイプ－線状痕。表面が削れて、幅を持った深い溝や破碎状になっている。

Bタイプ－磨滅痕。表面が潰れて、トロトロになっている。

Aタイプは、資料1と同じ解釈。

B タイプは、資料 1 と同じ解釈。

表面観察 2 この石器は、剝離面を含めて表面が資料 1 より、著しく「風化」している。

石材の性質や石器の遺存環境が影響してか、鋭い剝離痕が摩耗している。また、表面に点在する黒点状のシミは、クロボクと呼ばれる表土（黒色土）の付着物とも考えられる。

表面観察 3 この石器は、剝離面を含めて表面が著しく「風化」している。その結果、鋭い剝離痕がなく、本来そうした細部に残されているはずの「包含層土壌」が認められない。したがって、この石器の原位置ローム層（参考年代推定資料）と考えられる資料の摘出は不可能であった。

製作技術 この石器は、楕円形の転礫を使用して、二つの側縁に、一方から荒い整形加工を施して、「片刃礫器」として仕上げている。こうした礫核石器は、縄文早期前半（押型文土器文化）に特徴的に伴うことが知られている。

石材 この石器は、ホルンフェルスと判定されているが、資料 1 とはやや異なった石材（火山岩か）とも考えられる。武蔵野台地の礫石器は、砂岩、安山岩、チャート、流紋岩、頁岩、凝灰岩、ホルンフェルスなど多様な石材を使用している。概して、旧石器時代前半期は、硬質石材、終末期はやや軟質石材を使用している。

4-2-4. 武蔵野台地の様相

武蔵野台地における旧石器時代の「礫核石器」の出土は、大きく三つの時期に分けて確認されており、いずれも「立川ローム層」中に発見されている。

第 1 期（第Ⅹ層～第Ⅸ層、3 万 5,000 ～ 2 万 8,000 年前）

「先ナイフ石器文化」と「ナイフ形石器文化Ⅰ」に、多数存在する。長楕円形の分厚い礫の先端に、僅かな打調を加えて、片刃礫器に仕上げている。また、同様な形態の扁平礫を使用して、両面加工石器のように周辺を整形し、刃部を研磨した「磨製石斧」が多数伴っている。利用石材は、安山岩、流紋岩、頁岩、蛇紋岩など硬質で粘りのある岩石を使用している。

第 2 期（第Ⅳ層、2 万 8,000 ～ 1 万 6,000 年前）

「ナイフ形石器文化Ⅱ」には、発見数は少ない。本格的な礫核石器の発見はない。利用石材には特徴はない。

第 3 期（第Ⅲ層、1 万 6,000 ～ 1 万 4,000 年前）

「細石器文化」に、多数存在する。石材、製作技術は第 1 期と比較すると雑である。利用石材は、砂岩、粘板岩、ホルンフェルスなどの軟質の岩石をしている。こうした武蔵野台地の旧石器時代の石器の形態や製作技術、石材などを検討すると、この 2 点の「礫核石器」に対比できる石器類は認められないようである。

他の時期で、この 2 点と類似した礫核石器を探すと、東京地方では「縄文時代早期末～前期」の時期の遺跡

に多数存在する。石材も軟質なものが多く、表面の「風化度」も類似している。

4-2-5. 総合所見

本 2 点の石器資料は、石器表面に認められる多くの二次的なキズや摩耗、風化状況が観察される。つまり、この 2 点の石器は、長期間、地表近くの畑などの風化土壤中に包含され、農耕具（鋤）のキズと自然的な風化現象に晒されていたことが推察できる。

したがって、「地層断面からの抜き取り採取」という根拠は難しくなる。原位置で発見された武蔵野台地の多くの旧石器時代の礫核石器は、剝離面も新鮮で、このような風化状況も看取されない。もしも、断面採取が事実であれば、包含されていた地層が、二次的な再堆積物であった可能性も疑わなくてはならない。

ということで、この 2 点の石器類は、私の知る限り日本の「旧石器時代の礫核石器」の範囲内には認められない資料と考えられる。

また、本当に当石器類が、現在まで日本列島で発見されている旧石器文化「立川ローム層準、3 万 5,000 から 1 万 4,000 年前」より「古期の未知の石器類」であれば別である。ちなみに「捏造事件」発覚以降に、立川層準より古い遺跡・石器資料（その多くが、自然礫、二次的堆積遺物、遺跡地ではない）と発表されている石器類には、こうした大型の立派な「礫核石器」は発見されていない。

引用・参考文献

漆畑 稔ほか 2002 『大仁町の文化財』大仁町教育委員会

漆畑 稔ほか 2005 『浮橋町史』大仁町教育委員会

設楽博己 2010 「八丁平遺跡」『大仁町史資料編 1 考古・古代・中世・美術』伊豆の国市教育委員会、14-17

（小田静夫）

4-3. 中国東部の大型石器 ―八丁平遺跡出土資料考察のために―

4-3-1. はじめに

筆者に与えられた課題は、八丁平遺跡から出土した資料に関して、中国の旧石器との比較検討をもとにコメントすることである。しかし、本論考の「4-3-7. 予察」で述べるように、この資料は、尖頭礫器あるいは礫器状石核に分類されると考えられるが、そうした石器は、中国においては、時期によって比率や数量の増減はあるものの、旧石器時代にはかなり普遍的に存在する。また、単体で採集されたことから、石器群全体での比較検討も困難な状況である。このため、後日の研究の進展に備え、中国東部における後期旧石器時

代前半以前 (>約 2.5 万年前) のこうした大型石器の様相を概観したうえで、八丁平遺跡資料との関係を予察してみたい。また、中国における大型石器に関しては、少し前に佐川正敏が大分県丹生の石器群を検討するために集成をおこない (佐川 1992)、最近でも、松藤和人らが長江下流域を中心とした資料を詳細に研究している (松藤編 2008、麻柄ほか 2008)。今回、これらに大きく依拠することをあらかじめお断りしておきたい。

今回対象とする中国東部は、李炳元ほか (2013) が提唱する中国地形区分中の「東部低山平原大区」にほぼ一致する。この地域は、おおむね、現中国領のうち、長江下流域の桐柏山 - 大別山 - 九華山 - 天目山 - 四明山 - 天台山を結ぶ山系の北麓以北、大興安嶺 - 太行山脈東麓以東の華北と中国東北部を指す。現在の行政区分では、吉林、遼寧、山東、江蘇、天津の各省・直轄市の全域、黒龍江、河北、河南、安徽、北京の各省・直轄市の大半、浙江省、内蒙古自治区の一部が含まれ、北半部は中国東北部、南半部は華北に属する。東方の朝鮮半島、西方の黄土高原・モンゴル高原、南方の華南地域、北方のシベリア南部・アムール川流域との接点であり、中国でも日本列島に最も近い地域でもある (図 6)。

4-3-2. 中国東部における大型石器の変遷 - 前期前半 (30 万年前以前)

長江下流域 この地域で最古と考えられる石器群の

1 つ、本地域南端部にあたる安徽省宜州陳山 (図 6 の 1) では、黄土 (L) / 古土壌 (S) サイクルの第 8 古土壌帯 (S8: 86.6 ~ 79.0 万年前、MIS28 相当) に相当する 10 層から、ともに石英砂岩製の基部に礫面を残す「尖状砍砸器 (pointed chopper) (麻柄ほかはハンドアックスとする)」1 点、「使用石核 (Usable core、チョッパーコア?、麻柄らはチョッパーとする)」1 点が出土している (房 1997、麻柄ほか 2008)。

前者は、棒状の礫を素材とし、その左側縁の 4/5、右側縁の 1/3 を粗く単面加工し、両縁が交わる一端に舌状の尖端を形成する。尖端に近い左右両縁辺には細かな剥離が密集する。刃角は側縁 80°、尖端部 49°。長さ 23.7 × 幅 12.6 × 厚さ 8.9cm、重さ 2,890g (図 7-1)。後者は、扁平な角礫を素材とし、その一縁に数枚の粗大な剥離痕が連続する。報告者はこれを剥片生産のための剥離と認識するとともに、剥離痕が連続する縁辺中央に明確な使用の痕跡がみられることから、使用石核とする。一方、麻柄一志らは剥離を二次加工とすることから、チョッパーとみなしたのだろう。礫器と石核が複合した礫器状石核 (チョッパー・コア) かもしれない。剥離角 (刃角?) 72 ~ 83°、長さ 11.2 × 幅 10.3 × 厚さ 5.6cm、重さ 878g (同図 2)。長江下流域で、陳山 10 層に後続する石器群としては、陳山の 9 ~ 2 層、江蘇省金壇和尚墩 (L6 ~ S2: 65.9 ~ 18.6 万年前、MIS16 ~ 7 相当、図 6-2)、同省句容放牛山 (S3 ~ S1: 33.4

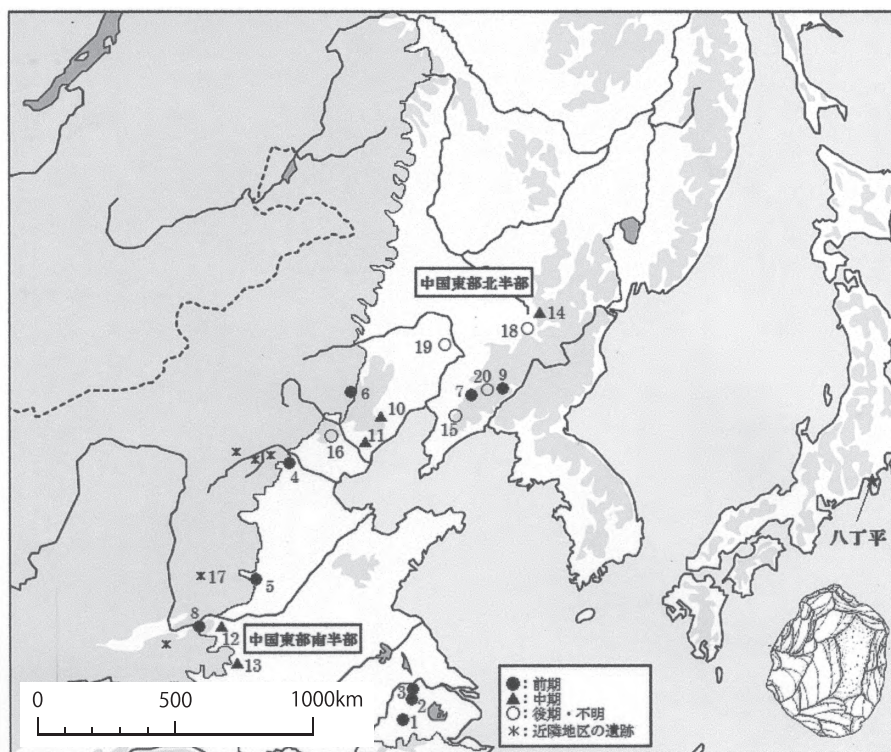


図 6 関連遺跡地図

- 1: 陳山、2: 和尚墩、3: 放牛山、4: 周口店遺跡群、5: 新橋、6: 西官地、
7: 廟後山、8: 水溝・会興溝、9: 牛鼻子、10: 鴿子洞、11: 爪村、12: 織機洞、13: 靈井、
14: 新郷磚場、15: 小孤山仙人洞、16: 四方洞、17: 丁村、18: 寿山仙人洞、19: 東小陵西山、20: 香磨南山

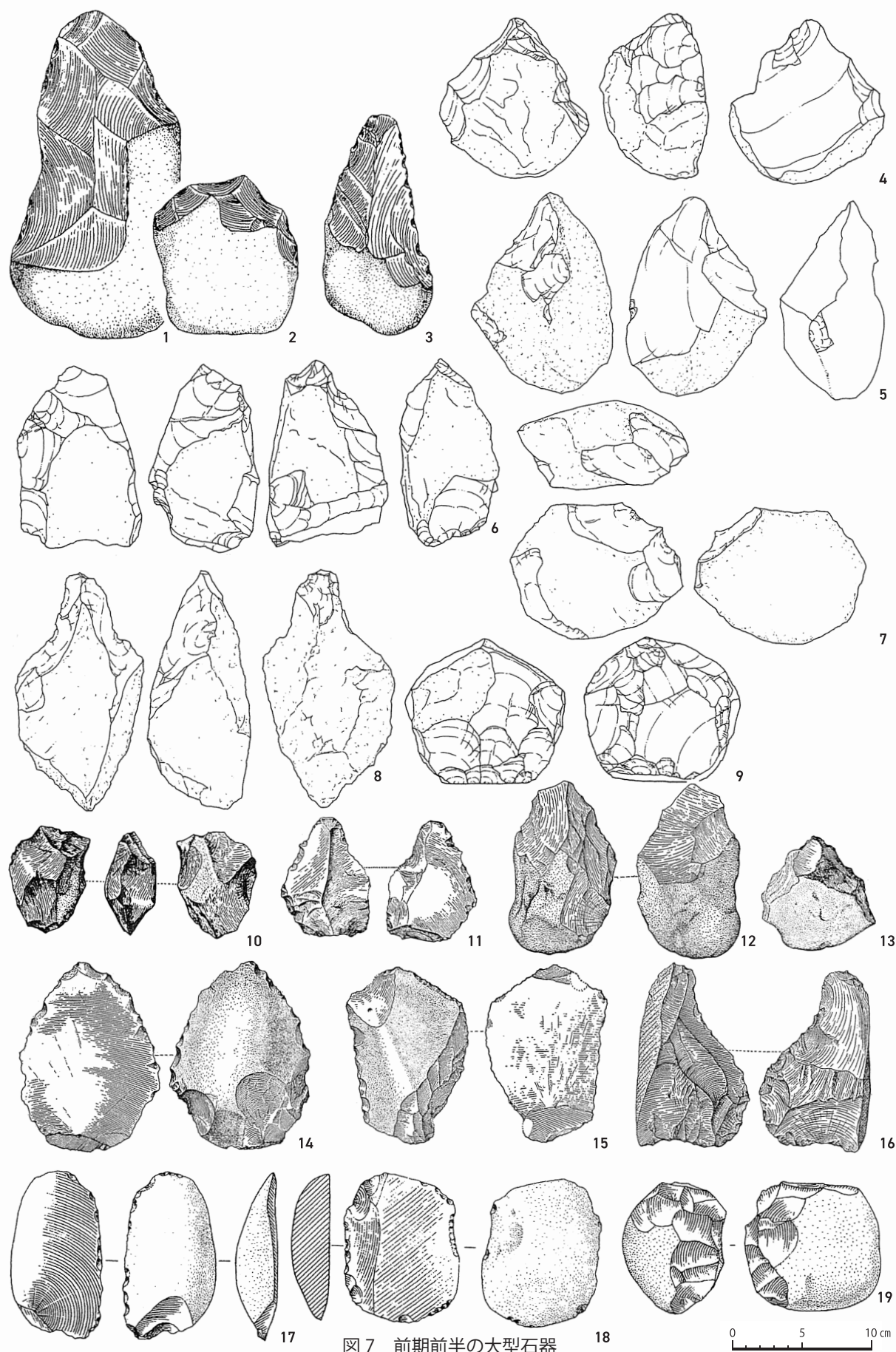


図7 前期前半の大型石器

1～3：陳山、4～7・9：和尚塚、8：放牛山、10：周口店第13地点、11～16：周口店第1地点、17～19：新橋

～7.1 万年前、MIS9～5 相当、同図 3) などがあげられる (房ほか 2002、2008、麻柄ほか 2008)。

これらの石器群では、チョッパー (片刃礫器、図 7-7) や球状石器 (同図 9) などとともにみられた尖頭礫器 (房のいう pointed chopper) が、陳山 8 層 (S7: 78.7～76.0 万年前、MIS19 相当、同図 3) で出土したのを最後に姿を消し、かわりにピック (鶴嘴状石器) が和尚墩 12 層 (L6: 65.9～62.1 万年前、MIS16 相当) に出現して以降、陳山 2 層 (S1: 12.7～7.1 万年前、MIS5 相当) まで確認できる¹⁾。

以下、麻柄ほか (2008) をもとにピックの事例をいくつかみてみよう。

和尚墩 12 層: 分厚い石英岩の打割礫の 82°前後で交わる二側縁に主剥離面から急角度の粗い二次加工を施して尖頭部を形成している。長さ 9.3 × 幅 9.1 × 厚さ 6.7cm、重さ 680g (図 7-4)。

和尚墩 11 層: 卵型の石英砂岩の礫を打割し、一側縁と礫面の稜から数回の剥離をおこなって尖頭部を形成している。長さ 14.3 × 幅 9.3 × 厚さ 7.2cm、重さ 820g (同図 5)。

和尚墩 10 層: 石英砂岩の角礫の一端に尖頭部を作り出す。刃部形成や形状修正とは直接的には関連しない剥片生産のためと考えられる剥離もみられることから、礫器状石核の可能性がある。長さ 12.8 × 幅 7.7 × 厚さ 6.7cm、重さ 899g (同図 6)。

放牛山 6 層: 石英砂岩の棒状の角礫の一端両側から数回の大きな剥離を施し、尖端部を形成している。尖端部の裏面にも小さな剥離痕が数枚みられる。長さ 17.2 × 幅 9.3 × 厚さ 7.3cm、996g (同図 8)。

太行山脈周縁部 中国東部南半部の淮河流域以北の大型石器の事例としては、北京市周口店第 1 地点 (約 50～23 万年前あるいは 67～41 万年前 [ともにウランシリーズ年代]、図 6-4)、同第 13 地点 (第 1 地点 11-13 層に相当: 57～66 万年前 [ESR 年代])、河北省涉県新橋 8 層 (S3: 30.1～33.4 万年前、MIS9 相当、同図 5) など、太行山脈周縁部の石器群の事例があげられよう。

周口店遺跡群 (Pei1934、裴・張 1985) で最古のものに位置付けられる周口店第 13 地点、第 1 地点 11-13 層において、すでに礫器類の出土が知られている。前者で燧石製チョッピングツール 1 点 (図 7-10)、後者で砂岩製チョッパー 1 点、石英製チョッピングツール 1 点出土した。

後続する第 1 地点の各層でも礫器類 (チョッパー、チョッピングツール)、球状石器が次のように出土している (裴・張 1985)。

10 層: 礫器 13 点 (石英 6、水晶 1、砂岩 6) / 総点数 443 点

8-9 層: 礫器 63 点 (石英 4、燧石 3、砂岩 47、石英岩 2、片岩 3、石灰岩 1、基性火成岩 3)、球状石器 4 (石英 2、砂岩 1、

石英岩 1) 点 / 総点数 1,336 点

Q II 層: 礫器 13 (石英 4、水晶 1、砂岩 6) 点、球状石器 1 (石英 1) 点 / 総点数 1,204 点

7 層: 礫器 1 (砂岩 1) 点 / 総点数 119 点

6 層: 礫器 5 (砂岩 4、鉄質片岩 1) 点 / 総点数 1,045 点

4-5 層: 礫器 32 点 (石英 7、燧石 1、砂岩 18、石灰岩 2、大理石 1、角閃石 1、斑岩 1、正長岩 1) 点、球状石器 1 点 / 総点数 6,651 点、

1-3 層: 礫器 22 (石英 11、燧石 1、砂岩 7、斑岩 2) 点、球状石器 2 (石英 2) 点 / 総点数 3,484 点

L3 層: 礫器 4 (砂岩 2、片岩 2) 点 / 総点数 585 点

これらの中には、数こそ少ないが、尖頭チョッパー (8-9 層 P2505 [図 7-11]、4-5 層 P2072 [同図 12])、クリーヴァー (8-9 層 P2017、P2148 [同図 14・15])、ピック (6 層 P5007 [同図 13]、1-3 層 P2063 [同図 16]) に分類することができる資料が交じっている。また、周口店第 1 地点の特徴としては、大型石器が多量の石英製小型剥片石器とともに出土していることや、石英製の大型石器が散見されることがあげられる (裴・張 1985)。

新橋 8 層 (梅ほか 2001) では、石英砂岩や石英製の剥片、スクレイパーに交じって、石英砂岩製の大型剥片を素材とするクリーヴァー 2 点、同じく石英砂岩製の球状石器 2 点出土している。クリーヴァーは長さ 13.2 × 幅 7.2 × 厚さ 3.3cm、重さ 359g (図 7-17)、長さ 11.4 × 幅 9.3 × 厚さ 3.0cm、重さ 430g (同図 18)。球状石器のうち 1 点は長さ 10.4 × 幅 9.7 × 厚さ 8.3cm、重さ 1,081g (同図 19)。

4-3-3. 中国東部における大型石器の変遷 - 前期後半 (30-10 万年前)

長江下流域 当該地域の事例としては、陳山 4-2 層、和尚墩 6-5 層、放牛山 2 層など、先述した長江下流域の石器群の後半段階のものがあげられる。

陳山 4-2 層 (房ほか 2008) では、チョッパー 4 点 (石英砂岩 4) やピック 2 点 (砂岩 1、石英岩 1) が出土しているという。このうち、チョッパーは、石核を転用した 1 点を除き、礫や打割礫を素材とする。石核を転用したものは、2 面みられる石核の打面の縁辺を二次加工したもの。長さ 8.8 × 幅 11.2 × 厚さ 9.1cm、重さ 800g (図 8-1)。またピックは、石英岩製のもの (長さ 19.8 × 幅 10.5 × 厚さ 8.1cm、重さ 1,800g) と、砂岩製のもの (長さ 19.9 × 幅 9.2 × 厚さ 7.9cm、重さ 1,580g) が出土している。いずれも棒状礫を素材とし、その端部両側に二次加工を加えて、三角形の尖端部を作出している (麻柄ほか 2008)。

和尚墩 6-5 層 (麻柄ほか 2008) では、ピック 3 点、球状石器 1 点 (7.2 × 8.4 × 8.7cm、重さ 770g。石英砂岩製 [図 9-6])、チョッパー 1 点 (長さ 9.7 × 幅 10.5 × 厚さ 8.7cm、重

さ 761g。石英砂岩製 [同図 5]) が出土している。ピックのうち、2 点は石英砂岩製の石核を素材としたもののようで、尖頭部の作出を目的にした剥離以外の剥離面が分厚い器体の背面を覆っている (長さ 17.3 × 幅 11.1 × 厚さ 7.8cm、重さ 1,679g [同図 3]、長さ 22.8 × 幅 11.1 × 厚さ 10.2cm、重さ 2,200g [同図 2])。残り 1 点は石英砂岩の扁平な棒状礫を素材とし、端部両側から一側全縁に比較的急角度の剥離が為されたもの。長さ 25.2 × 幅 9.7 × 厚さ 5.8cm、重さ 1,915g (同図 4)。

放牛山 2 層 (麻柄 2008) では、石英砂岩の分厚い大型剥片を矩形に分割し、打面部にわずかに二次加工を施したクリーヴァーが出土している。長さ 14.2 × 幅 15.3 × 厚さ 7.7cm、重さ 1,558g (図 8-7)。

太行山脈周縁部 中国東部南半部では、太行山脈沿いの新橋 6 層 (S2: 24.2 ~ 18.6 万年前、MIS7 相当)、周口店 15 地点 (約 14 ~ 11 万、約 28.4 ~ 15.5 万年前 [ウランシリーズ年代])、本地域最西奥にあたる河南省三門峡水溝・会興溝²⁾ (図 6-8) の事例が知られる。

新橋 6 層 (梅ほか 2001) では、石英砂岩の打割礫を素材としたチョッパー 1 点と石英砂岩の礫を用いた球状石器 1 点が、石英や石英砂岩製の剥片 44 点などと出土している。チョッパーは長さ 7.3 × 幅 6.1 × 厚さ 4.3cm、重さ 241g (図 9-1)。石球は直径 6cm、重さ 339g。

周口店 15 地点 (Pei1939、高 2001) では、現在残されている 1,283 点の資料中に礫器 13 点 (脈石英 4、火成岩 5、砂岩 4)、クリーヴァー 3 点 (火成岩 2、石英岩 1)、球状石器 2 点 (ともに石英) を確認できるという。これらのうち、礫器は、9 点が礫、3 点が打割礫、1 点が大型剥片を素材とし、クリーヴァーはいずれも大型剥片を素材としている (図 9-2)。また、礫器には、砂岩の扁平礫を素材とした、大きな突出部をもつものがある。ピックとみることができる (同図 3)。

水溝・会興溝の 2 地点 (黄 1964、黄ほか 2001) では、石核 25 点、剥片 48 点とともに、礫器 11 点、ピック 4 点、球状石器 4 点、クリーヴァー? 1 点が出土している。このうち、火成岩 (輝緑岩) 製を中心とする礫器には、大型剥片を素材としたピックやクリーヴァーに分類できる資料を見出せる (図 9-5 ~ 7)。報告では「大尖状器」とされた打割礫を素材としたピックは、長さ 16.6 × 幅 11.3 × 厚さ 7.7cm (同図 4)。

中国東部北半部／南半部境界 中国東部北半部と南半部の境界付近にあたる地域では、燕山山脈の河北省承德西官地 (図 6-6)、千山山脈の遼寧省本溪廟後山 (約 40 ~ 10 万年前 [ウランシリーズ年代]、同図 7)、同じく千山山脈に所在し、本地域東端で朝鮮半島と接する遼寧省桓仁牛鼻子 (同図 9) などの事例があげられる。

西官地³⁾ では、扁平な火成岩の礫を素材としたハ

ンドアックスが出土している。一側縁ならび尖端部両側を交互剥離、残りの側縁は片面剥離で平面形を涙滴形に二次加工している。基部には礫面を残す。長さ 17 × 幅 9 × 厚さ 6cm。

廟後山 4-6 層 (遼寧省博物館ほか 1986) では、石核 3 点、剥片 28 点、スクレイパー 13 点など、71 点の石器が出土している。大型石器としては、5・6 層を中心に、石英砂岩、安山岩の礫、打割礫、大型剥片を素材とする礫器 12 点が出土している。このうち、大型剥片を素材としたものには、ピック、クリーヴァーに分類できるものが含まれる。

ピックとみなせるものは石英砂岩の平面形が台形的大型剥片を素材としている。左側縁と下端縁に鋸歯状を呈する粗いインバースリタッチを施し、両縁が交わる角部を三角形の先端にしている。長さ 11.2 × 幅 11.0cm、重さ 415g (図 9-8)。

クリーヴァーに分類できるものとしては、安山岩製のもの (長さ 9.8 × 幅 8.0 × 厚さ 3.0cm、同図 9) と石英砂岩製のもの (長さ 16.0 × 幅 13.8 × 厚さ 4.4cm、重さ 1,010g、同図 10) がある。ともに長幅比が 1 : 1 に近い板状の大型剥片を素材とし、刃縁である一側縁以外の縁辺を比較的緩やかな角度で奥に入る剥離で調整する。この際、打瘤部の厚みを除去している。

このほか、10 万年以降とされる 7 層でも、台石技法によって剥離された分厚い石英砂岩の大型剥片を素材としたクリーヴァーが出土している。長さ 12.5 × 幅 13.7 × 厚さ 3.9cm、重さ 810g (同図 11)。

牛鼻子 (陳ほか 2013) では、剥片素材のチョッピングトウール 2 点、クリーヴァー 1 点、礫素材のハンドアックス 1 点が出土している。チョッピングトウールは、礫面を大きく残す平面形が円形の扁平な石英砂岩製剥片を素材とする。1 点は長さ 10.0 × 幅 10.6 × 厚さ 3.1cm、重さ 353g (図 9-12)。クリーヴァーは、ホルフェルス製の楕円形剥片を素材としている。一部にインバースリタッチが施されるが縁辺の大半は無加工で、使用痕らしい小剥離が並ぶ。長さ 15.5 × 幅 9.6 × 厚さ 3.7cm、重さ 589g (同図 14)。ハンドアックスは、ホルンフェルスの礫を素材としたものか。四周から粗い加工が施される。上端 (尖端部側) が破損する。背面中央には礫面が残る。長さ 12.2 × 幅 8.7 × 厚さ 5.4cm、重さ 569g (同図 13)。

4-3-4. 中国東部における大型石器の変遷 - 中期 (10-4 万年前)

この時期の石器群の主体となるのは、石英岩製の分厚い剥片に鋸歯状を呈する粗い二次加工を施した各種スクレイパー、鋸歯縁石器、尖頭石器、舟形石器などであり、礫器類や球状石器は、中国東部北半部／南半部境界の遼寧省喀左鸽子洞 (約 5 万年前?、遼西丘陵、図

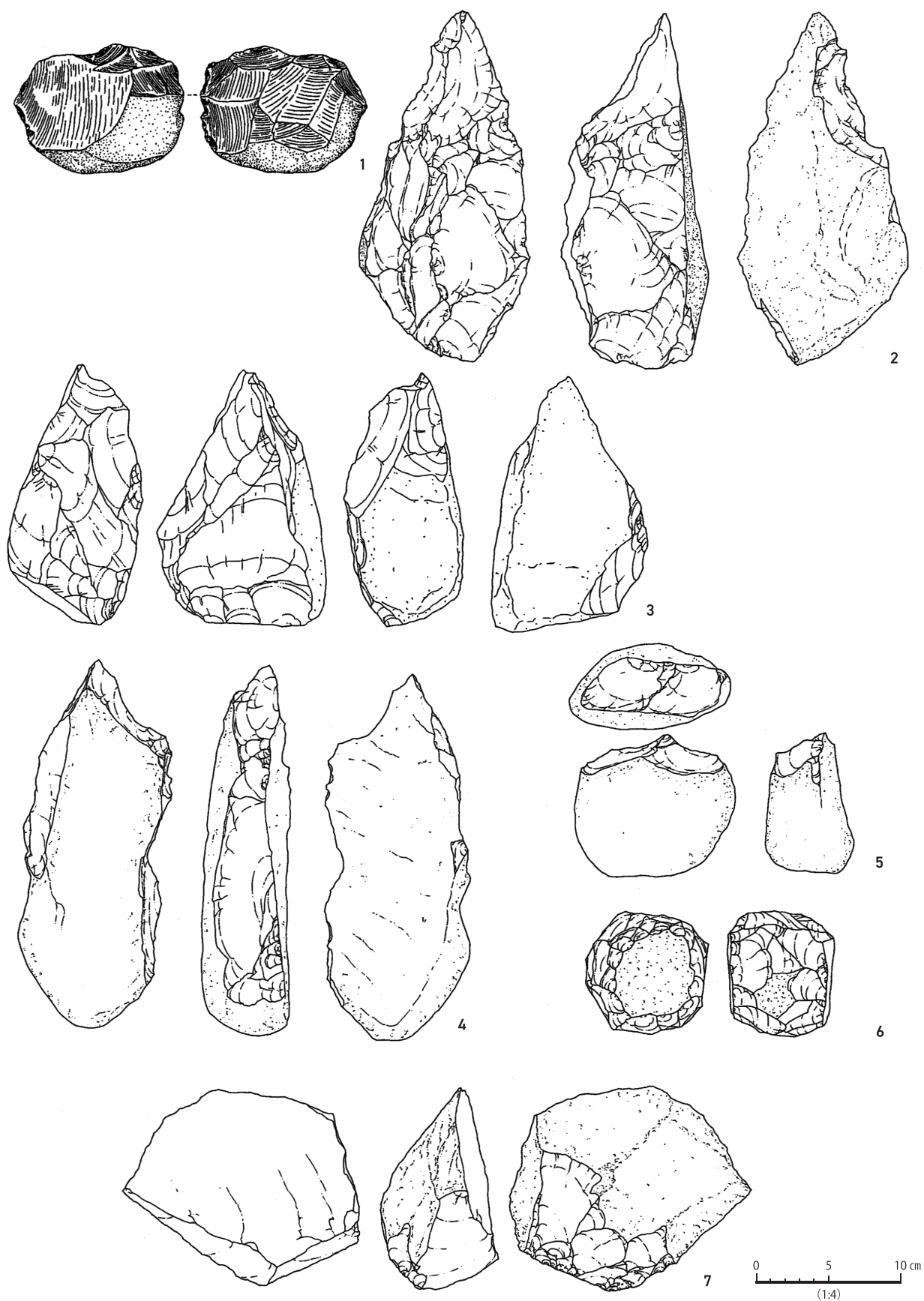


図 8 前期後半の大型石器（長江下流域）
1：陳山、2～6：和尚墩、7：放牛山

6-10)、河北遷安省爪村下層 ($48 \pm 2, 44 \pm 2$ ka [ウランシリーズ年代]、燕山南麓、同図 11)、秦嶺山脈東麓の河南省滎陽織機洞 8-9 層 ($>46.5 \pm 4.1$ ka [OSL 年代]、嵩山丘陵、同図 12)、同省許昌靈井下層 (約 10 ~ 8 万年前 [OSL 年代]、黃淮平原、同図 13) などで見られる。また、中国東部北半部 (中国東北部) では、吉林省吉林新郷磚場 (62 ± 6 ka [ウランシリーズ年代]、長白山西麓、同図 14) で大型石器を含む石器群が検出されている。

中国東部北半部／南半部境界 鴿子洞 (傅 1992) では、石核 25 点、剥片 144 点、スクレイパー 57 点、尖頭石器 11 点などとともに、礫器類が 9 点出土している。チョッパーとチョッピングツールがあるようだ。石英岩の扁平礫を素材とし、左右両側縁に刃部を形成したチョッパーが最大のもの (LP026) で、長さ $16.3 \times$ 幅 $11.3 \times$ 厚さ 6.8 cm。やはり、チョッパーとされるもの (LP021) は、長さ $6.9 \times$ 幅 $8.3 \times$ 厚さ 4.4 cm の小型のもの。石英砂岩の礫を素材とする。

爪村下層 (張 1989) では、燧石、石灰岩を素材とした剥片 14 点、石核 2 点、スクレイパー 2 点、尖頭石器、彫器各 1 点にともなって、ピック状のチョッパー 1 点が出土している。燧石の礫を素材としたもので、一側縁と末端部に二次加工が施されている。ピック状の突出部をもつが、素材の礫の形状を反映したもので、尖端部の形成を意図した二次加工はみられない。長さ $15.5 \times$ 幅 $6.4 \times$ 厚さ 4.4 cm (図 9-1)。

秦嶺山脈東麓 織機洞 8-9 層 (王 2008) では、石英砂岩を素材とした礫器が主体を占める。7 層 (ca. 50 ka?) 以上の層では、礫器類の比率は減少、石英や燧石を素材とした剥片石器が主体となるといえる。

靈井下文化層の 2005 年出土品では、脈石英製小型石器 235 点 (スクレイパー 158、尖頭石器 41、彫器 32、錐 4) にともなって大型石器 10 点 (礫器 8、球状石器 1、ピック 1) が出土した (李 2007)。また、2006 年出土品では、前者 330 点 (スクレイパー 201、尖頭石器 79、彫器 50)、後者 13 点 (礫器 9、球状石器 4) となっている (河南省文物考古研究所 2010)。大型石器は、2005 年出土の脈石英製の球状石器 (図 10-5) をのぞき、いずれも石英岩製。代表例としては、チョッピングツール (円礫素材：長さ $8.2 \times$ 幅 $7.6 \times$ 厚さ 6.5 cm、重さ 386 g [図 10-2]、残核素材：長さ $10.1 \times$ 幅 $9.8 \times$ 厚さ 6.4 cm、重さ 672 g [同図 3])、チョッパー (扁平礫素材：長さ $11.5 \times$ 幅 $7.8 \times$ 厚さ 6.3 cm、重さ 661.5 g) があげられている。また、ピックは礫片を素材としたもので、長さ $6.9 \times$ 幅 $7.4 \times$ 厚さ 4.8 cm、重さ 265 g (同図 4)。

中国東部北半部 新郷磚場 (陳・程 1996) では、石核 4 点とともに、珪質石灰岩の礫を素材とするチョッピングツール 1 点 (長さ $8.4 \times$ 幅 $11.8 \times$ 厚さ 6.0 cm)、ハンドアックス 1 点が出土している。後者は、ホルンフェ

ルスの棒状礫を素材としたもので、表面は剝離面に覆われ、裏面は右側縁下部から下端部にかけて礫面が残り、平面形はやや不整形なアーモンド形をしている。長さ $20.0 \times$ 幅 $10.0 \times$ 厚さ 6.2 cm (図 10-6)。

4-3-5. 中国東部における大型石器の変遷 - 後期前半期 (4-2.5 万年前)

石英や火成岩を素材とする小型剥片石器を中心とするが、それに交じって大型石器が散見される。この時期に特徴的な大型石器としては、遼寧省海城小孤山仙人洞 3 層 (約 2 ~ 3 万年前、遼東丘陵、図 6-15) や河北省興隆四方洞下層 ($27,880 \pm 510$ ^{14}C BP、燕山南麓、同図 16) にみられる扁平な礫の周縁ならびに長軸端にあまり奥に入らない小ぶりの剝離を施して刃部を形成する礫器があげられる⁴⁾。

小孤山仙人洞 (遼寧省文物考古研究所 2009) のものは、長さ $18.5 \times$ 幅 $11.5 \times$ 厚さ 4.6 cm、重さ $1,265$ g。閃長岩製 (図 10-7)。

四方洞 (中国科学院古脊椎動物与古人類研究所ほか 1992) では 3 点の礫器が出土しているが、このうち、長さ $6.2 \times$ 幅 $8.9 \times$ 厚さ 3.8 cm、重さ 250 g のチョッピングツールがこれに該当する (同図 8)。

4-3-6. 中国東部での大型石器の様相

中国東部での大型石器の事例を概観してきた⁵⁾。まとめると、次のようにならうか。

前期前半 前期前半の大型石器は、石英砂岩、石英岩、砂岩などを素材とし、比較的粗大な形状の礫器 (チョッパー・チョッピングツール)、尖頭チョッパー、球状石器、ピック、クリーヴァーなどの器種がみられる。これらは、部分的に両面に剝離が施されたものがあるものの、基本的には礫や分厚い打割礫を素材とし、粗い片面調整で二次加工したものが主体的である。両面調整で厚みを減じた真性のハンドアックス (握斧、バイフェイス [両面調整石器]) は、今のところみられない。

これまで、大型石器については、中国南部で盛行するとされ、北部では小型剥片石器が発達するとみられていた。確かに、中国南部に隣接する長江下流域で頻度高く大型石器が検出されている。しかし、それ以北の地区でも、石器群における比率が異なるとはいえ、大型石器が存在することが分かる。こうした状況は、典型的な小型剥片石器群とされる周口店第 1 地点の各層において、大型石器が出土していることでも看取することができる。

さらに、石英砂岩、石英岩製の多数の不定形剥片類が検出された和尚墩の状況 (房ほか 2008) をふまえれば、長江下流域を含め、中国東部南半部では、大型石器は不定形な小型石器に交じって存在するのが一般的であったと想定できる。

前期後半 前期後半にはいると、大型石器は、周口

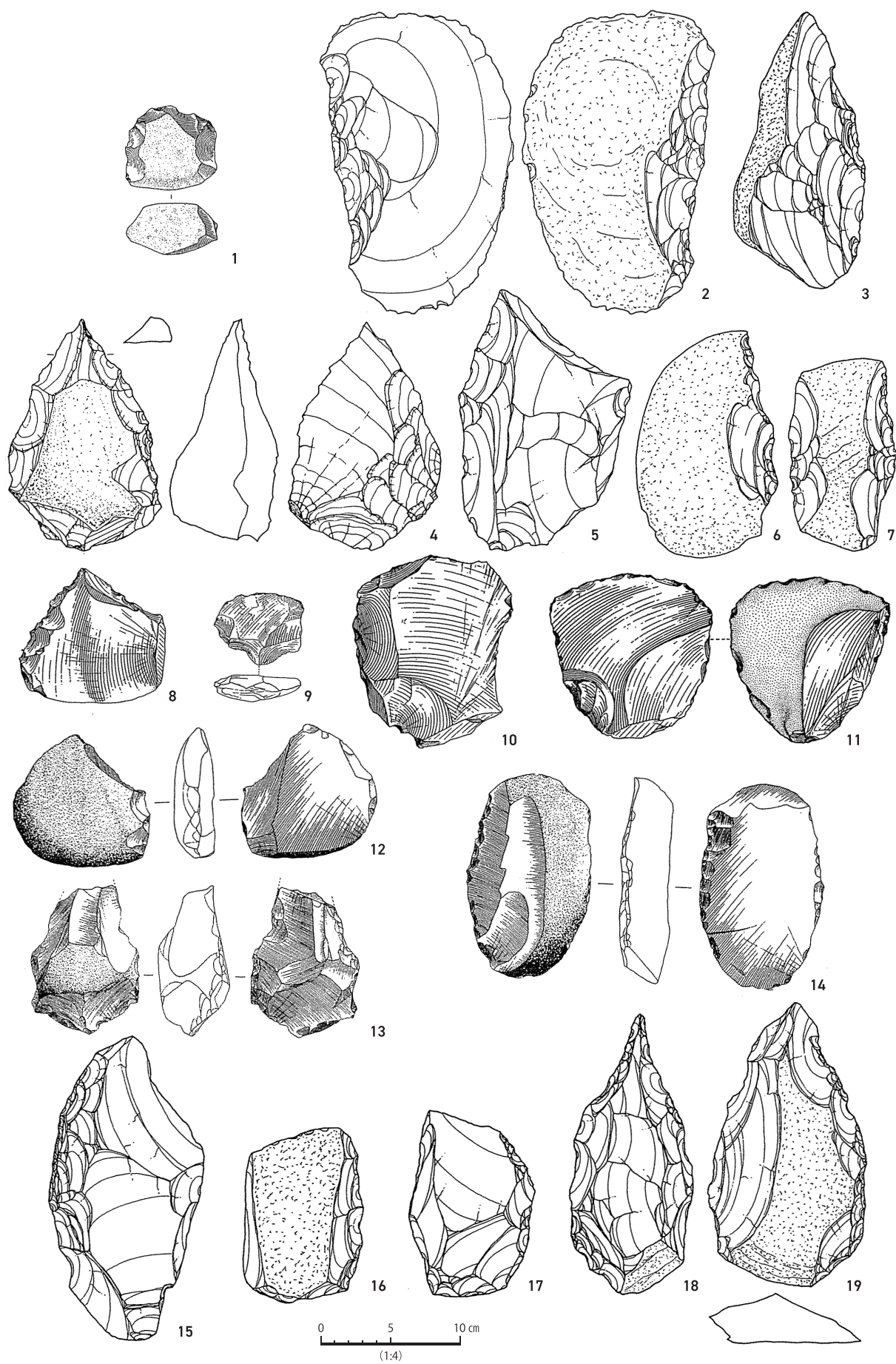


図 9 前期後半の大型石器（太行山脈周縁部・中国東部北半部／南半部境界・近隣地区）

1：新橋、2・3：周口店第 15 地点、4～7：水溝・会興溝、8～11：廟後山、12～14：牛鼻子、15～19：丁村遺跡群

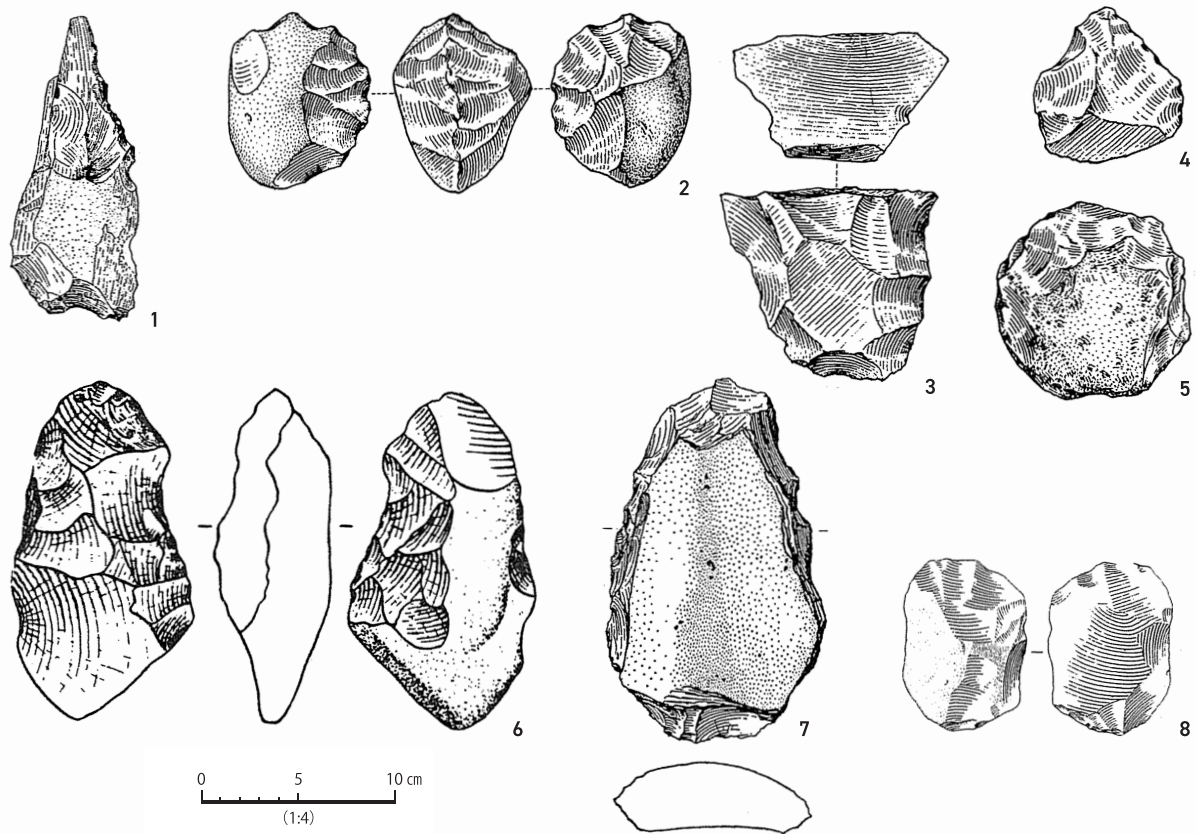


図 10 中期・後期前半の大型石器

1：爪村、2～5：霊井下層、6：新郷磚場、7：小孤山仙人洞、8：四方洞下層

店第 15 地点では石英製小型剥片石器群、廟後山、新橋、水溝では大型石器と同じ石材でつくられた削器などの剥片石器とともに出土する。また、小口面型、円錐形、円柱形の大型石核から剥離された大型の石刃様剥片もみられ、一部ではトウールの素材ともなっている。この時期の大型石器は、大型剥片を素材とした比較的薄く、精緻なつくりのものがみられるようになる。また、ハンドアックスが出現し、クリーヴァーなどとともに、その出土量が増える。さらに、大型石器の石材には、前期前半に主要なものであった石英砂岩、砂岩、石英岩などに加え、火成岩、安山岩、ホルンフェルスなどもみられるようになる。こうした前期後半の大型石器をもつ石器群の様相は、近隣の黄土高原の汾河流域で同時期に展開する丁村石器群（中国科学院古脊椎動物与古人類研究所編 1958・王ほか 1994）（図 1-17）でも見出すことができる（図 9-15～19）。

中期以降 中国東部南半部の華北地域では、ピック、ハンドアックス、クリーヴァーなどは衰退し、礫器、球形石器が主体となり、石器の大きさもやや小さくなる傾向を示すようだ。一方、中国東部北半部（中国東北部）では、華北では衰退する器種の大型石器が存続するようである。また、長江下流域では状況は不明となる。大型石器の石材は、石球に脈石英・石英などが用いら

れ、その他のものは、石英岩、石英砂岩のほか、ホルンフェルス、燧石、閃長岩など比較的多様である。

4-3-7. 予察

本論考執筆のきっかけとなった八丁平の資料は次のような特徴をもつ。

- ①ホルンフェルスの扁平礫を素材とする。
- ②大きさは、長さ 14.0 × 幅 10.5 × 厚さ 5.5cm、重さ 994g。
- ③片面加工の部位と両面加工の部位があり、前者は刃角が鋭角かつ略三角形の突出部がみられ、使用によるものか、細かな剥離痕が密集しており、主刃部と判断される。後者は、剥離角がより急角的、階段状を呈しており、刃部形成を意図したものではなく、剥片剥離を目的としたものか。このため、冒頭で述べたように、扁平礫の残核を素材とした尖頭礫器（尖頭チョッパー）、あるいは礫器状石核（チョッパー・コア）と分類されよう。

これらの八丁平資料の特徴について、中国東部の資料と比較しながら、初歩的に検討してみよう。

中国東部では、大型石器の石材としては、石英砂岩、石英岩、砂岩などが主流であり、八丁平資料の素材となっているホルンフェルスなどのその他の石材を素材とするものは、洞穴遺跡である前期前半の周口店遺跡

表 1 中国東部の大型石器と八丁平資料（体積でソート）

遺跡名	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	体積(cm ³)	重さ(g)	石材	素材	時期
周口店 1-11	CP	18.1	14		0.0	2,076	砂岩	礫	前期前半
周口店 1-1.3	CT	6.9	6.5		0.0	132	石英	残核	前期前半
廟後山 6	P	11.2	11		0.0	415	石英砂岩	剥片	前期後半
廟後山 6	CP	8.2	4.8	2.8	110.2		石英砂岩	剥片	前期後半
廟後山 6	CT	6.8	5.2	3.2	113.2	130	石英砂岩	剥片	前期後半
周口店 1-10	C	5.5	4.7	4.5	116.3	130			前期前半
新橋 6	CP	7.3	6.1	4.3	191.5	241	石英砂岩	打割礫	前期後半
四方洞下層	CA	6.2	8.9	3.8	209.7	250		礫	後期前半
霊井下層	P	6.9	7.4	4.8	245.1	265	石英岩	礫片	中期
鴿子洞	CP	6.9	8.3	4.4	252.0		石英砂岩	礫	中期
周口店 1-6	P	8	7.6	4.2	255.4	254	鉄質片岩	残核	前期前半
牛鼻子	CT	10	10.6	3.1	328.6	353	石英砂岩	剥片	前期後半
周口店 1-8.9	CT	10.8	8.5	4	367.2		脈石英	礫	前期前半
霊井下層	CT	8.2	7.6	6.5	405.1	386	石英岩	礫	中期
爪村	P ?	15.5	6.4	4.4	436.5		燧石	礫	中期
周口店 1-Q II	CP	10.4	7.5	6.7	522.6		水晶	礫	前期前半
周口店 1-下洞	CT	8.7	7	8.7	529.8	343	石英	礫	前期前半
周口店 1-4.5	CP	14.2	8	4.7	533.9		燧石	剥片	前期前半
霊井下層	CP	11.5	7.8	6.3	565.1	662	石英岩	礫	中期
和尚墩 12	P	9.3	9.1	6.7	567.0	680	石英岩	打割礫	前期前半
牛鼻子	HA ?	12.2	8.7	5.4	573.2	569	ホルンフェルス	礫	前期後半
和尚墩 10	CP	9.1	12.9	4.9	575.2	765	石英砂岩	礫	前期前半
周口店 1-10	CT	11.2	8.9	6.1	608.0	825		残核	前期前半
霊井下層	CT	10.1	9.8	6.4	633.5	672	石英岩	残核	中期
陳山 10	CC	11.2	10.3	5.6	646.0	878	石英砂岩	残核	前期前半
和尚墩 10	P	12.8	7.7	6.7	660.4	899	石英砂岩	礫	前期前半
周口店 1-7	CP	11.2	10.7	5.6	671.1	797	砂岩	礫	前期前半
周口店 1-Q II	CP	13.6	9.1	6	742.6			残核	前期前半
周口店 1-10	HA ?	14.2	9.3	6.1	805.6	761		残核	前期前半
八丁平	PC	14	10.5	5.5	808.5	994	ホルンフェルス	残核	?
和尚墩 1 1	CT	11.8	10.6	6.6	825.5	899	石英砂岩	礫	前期前半
和尚墩 6-5	CP	9.7	10.5	8.7	886.1	761	石英砂岩	礫	前期後半
陳山 4-2	CP	8.8	11.2	9.1	896.9	800	石英砂岩	残核	前期後半
西官地	HA	17	9	6	918.0		火成岩	礫	前期後半
和尚墩 11	P	14.3	9.3	7.2	957.5	820	石英砂岩	打割礫	前期前半
小孤山仙人洞	CA	18.5	11.5	4.6	978.7	1,265	閃長岩	礫	後期前半
放牛山 6	P	17.2	9.3	7.3	1,167.7	996	石英砂岩	礫	前期前半
新郷磚場	HA	20.2	10	6.2	1,252.4		フォルンフェルス	礫	中期
鴿子洞	CP	16.3	11.3	6.8	1,252.5		石英岩	礫	中期
周口店 1-Q II	CT	13	12	8.5	1,326.0	1,692	石英	残核	前期前半
和尚墩 6-5	P	25.2	9.7	5.8	1,417.8	1,915	石英砂岩	残核	前期後半
水溝	P	16.6	11.3	7.7	1,444.4		火成岩	打割礫	前期後半
陳山 4-2	P	19.9	9.2	7.9	1,446.3	1,580	砂岩	礫	前期後半
和尚墩 6-5	P	17.3	11.1	7.8	1,497.8	1,679	石英砂岩	残核	前期後半
周口店 1-8.9	CT	15	12	8.5	1,530.0		石英岩	礫	前期前半
陳山 4-2	P	19.8	10.5	8.1	1,684.0	1,800	石英岩	礫	前期後半
和尚墩 6-5	P	22.8	11.1	10.2	2,581.4	2,200	石英砂岩	残核	前期後半
陳山 10	PC	23.7	12.6	8.9	2,657.7	2,890	石英砂岩	礫	前期前半
周口店 1-8.9	CT	6	8			226		礫	前期前半

器種凡例 CP：チョッパー，CT：チョッピングツール

P：ピック，HA：ハンドアックス，CA 斧形石器，PC：尖頭礫器

群を除き、前期後半以降に散見されるようになる。また、ホルンフェルスに関していえば、北半部の長白山西麓地区に多いようだ。中国東部の近隣地区では、西隣の黄土高原の汾河流域に分布する前期後半の丁村石器群でホルンフェルス製の大型石器が発達する。こうした特徴的な石材の選択がみられるようになる状況が、なんらかの文化・技術伝統の動向を反映しているかどうかを判断するには、さらなる事例の積み重ねが必要である。なお、丁村のものを含め中国のホルンフェルス製大型石器は、大型剥片を素材とするものが多く、礫を素材とする八丁平資料とは差異をみせている。

形状では、後期旧石器時代前半に小孤山仙人洞などで特徴的にみられる扁平で曲刃をもつもの(図10-7・8)とは異なるといえる。八丁平資料のような尖端部をもつ大型石器としては、尖頭礫器やピックなどを挙げることができる。こうした尖端部をもつ大型石器は、長期にわたって存在しているが、中期以降は、あまりみられなくなるようだ。

大きさ(体積=長さ×幅×厚さ)では、周口店第1地点10層の尖頭礫器?や和尚墩11層のチョッピングツール、重さでは、放牛山6層のピック、和尚墩10層のピック、同11層のチョッピングツールなどに近い(表1)。太行山脈周縁部の周口店のものもあるが、どちらかといえば長江下流域の前期のものに近い印象を受ける。ただし、母集団データが不十分であり、これらの単純な数値が年代や系統を示すかどうかとも定かではない。

八丁平資料については、採集地周辺の火山灰の分析から、約10万年前の年代が想定されている。もし、そうだとすれば、陸橋が成立していなかった最終間氷期(MIS5:127-71ka)にあたる。当時の人類は、まだ有効な渡海能力をもっていなかったと考えられており、八丁平資料と同時期の大陸の石器群が人類の移動とともに列島に拡散してきたとは想定し難い。このため、最終間氷期以前の寒冷期に出現した陸橋を経由して移入してきたものの後裔であった可能性が高いのではないだろうか。とすれば、前期後半以前のものと関連が考えられる。これは、とりあえずは、上記のような形状や大きさなどからの初歩的な推測や印象と齟齬を来たすものではない。

4-3-8. おわりに

八丁平遺跡出土資料については、中国東部の前期後半以前のものと関連性を今後検討する必要があると思われる。しかし、同時に、すでに述べたように、この種の大型石器は、単体では決して分解能が高い示準化石とはいえないものである。八丁平遺跡出土資料を比較考古学的に分析し、その系統などを解明するためには、当該資料と本来共伴していた石器を検出し、石

器群全体を把握したうえで、分析を進めていかなければならない。これまで検討してきたように、中国東部においては、大型石器に共伴する石器群の時期的、地域的な特徴をある程度把握できることは重要である。また、当然ながら、中国東部と日本の間に位置する朝鮮半島の様相についても注視しなければならない。

いずれにせよ、今後の調査の進展が期待されるところである。

註

- 1) 房(1997)は、尖頭礫器は一側縁の1/2以上に刃部を作り出すとともに尖頭部をもつ礫器とするのに対して、ピックは刃部が一側縁の1/2を超えず、専ら尖頭部に二次加工が集中するとしている。
- 2) 水溝・会興溝の石器群について、本論文では丁村の石器群との形態学的類似から前期後半(30-10万年前)と想定した。しかし、最近、会興溝の石器群の出土層位について、レス・古土壤サイクルと残留磁化率の測定から、第9レス層(L9)(86-95万年前)とする論文(李ほか2017)を知った。同石器群の位置づけについては、更なる検討を要するといえる。
- 3) 西官地についての報告は、新聞発表などに限られている。河北省文物研究所にて実見し、謝飛、王法崗らから出土状況などをうかがった。
- 4) このほか、長白山西麓地区の吉林省樺甸寿山仙人洞上文化層(34,290±510¹⁴C BP、図1の18)では、黒曜石製搔器などとともにホルンフェルスの礫、打割礫を素材とした礫器の出土が報じられている(陳ほか2007)。しかし、実見したところ、石核と思われた。
- 5) 最近、中国東北部南部の遼寧省域で、康平東小陵西山(付ほか2013、図1の19)、本溪香磨南山(李ほか2013、図1の20)などの大型石器を含む石器群が表採、報告されている。これらについては、表採品で全貌と詳細が不明なことから、今回はとりあげない。前者では石英製の礫器とクリーヴァー、後者では石英砂岩製の礫器がみられる。

引用・参考文献

- 黄 慰文・何 乃漢・佐川正敏 2001 『百色旧石器-中国広西百色遺跡群発見のハンドアックスの比較研究-』東北学院大学文学部考古学佐川研究室
- 王 幼平 2008 「中国・織機洞遺跡の古人類活動と年代学・古環境的背景」松藤和人編『東アジアにおける旧石器編年・古環境変遷に関する基礎的研究』平成16～19年度科学研究費補助金 基盤研究(A)研究成果報告書, 175-184
- 佐川正敏 1992 「中国旧石器時代の礫器」『大分県丹生遺跡群の研究』, 古代学研究所研究報告3, 財団法人古代学教会, 389-406
- 房 迎三・何 未艾・恵 強 2008 「江蘇金壇和尚墩旧石器遺跡の地層・遺跡と年代」松藤和人編『東アジアにおける旧石

- 器編年・古環境変遷に関する基礎的研究』平成 16～19 年度科学研究費補助金 基盤研究 (A) 研究成果報告書, 125-146
- 麻柄一志・松藤和人・津村宏臣・上峯篤史 2008 「レス-古土壌編年による東アジア旧石器編年の再構築 (1) - 中国 -」松藤和人編『東アジアにおける旧石器編年・古環境変遷に関する基礎的研究』平成 16～19 年度科学研究費補助金 基盤研究 (A) 研究成果報告書, 185-213
- 松藤和人編 2008 『東アジアにおける旧石器編年・古環境変遷に関する基礎的研究』平成 16～19 年度科学研究費補助金 基盤研究 (A) 研究成果報告書
- 陳 全家・程 新民 1996 「吉林市地区首次発現の旧石器」『東北亜旧石器文化』, 国立忠北大学校先史文化研究所・遼寧省文物考古研究所, 247-258
- 陳 全家・李 霞・王 曉陽・魏 海波・石 晶 2013 「遼寧桓仁闡枝溝牛鼻子地点発現の旧石器」『辺疆考古研究』13: 1-20
- 陳 全家・趙 海龍・王 法崗 2007 「吉林樺甸仙人洞旧石器遺址 1993 年発掘報告」『人類学学報』26(3): 222-236
- 房 迎三 1997 「安徽省宣州市陳山旧石器地点 1988 年発掘報告」『人類学学報』16(2): 96-106
- 房 迎三・王 結華・梁 任又・王 菊香・翟 中華・楊 春 2002 「江蘇句容放牛山発現の旧石器」『人類学学報』21(1): 41-49
- 傅 仁義 1992 「鸽子洞遺址時代の再研究」『北方文物』1992(4): 19-27
- 付 永平・陳 全家・王 曉陽・盧 悦 2013 「瀋陽市康平県東小陵西山旧石器地点の石器研究」『草原文物』2013(2): 1-7
- 高 星 2001 「關於周口店第 15 地点石器類型和加工技術的研究」『人類学学報』20(1): 1-18
- 高 星 2001 「周口店第 15 地点石器原料開發方略与經濟形態研究」『人類学学報』20(3): 186-200
- 河南省文物考古研究所 2010 「許昌靈井旧石器時代遺址 2006 年発掘報告」『考古学報』2010(1): 73-100
- 黄 慰文 1964 「豫西三門峡地区的旧石器」『古脊椎動物与古人類』8(2): 162-177
- 李 炳元・潘 保田・程 維明・韓 嘉福・齊 德利・朱 澈 2013 「中国地貌区劃新論」『地理学報』68(3): 291-306
- 李 霞・陳 全家・趙 清波・魏 海波・石 晶 2013 「遼寧本溪香磨南山発現の旧石器」『辺疆考古研究』14: 1-12
- 李 興文・林 杉・敖 紅・黄 慰文・侯 亜梅・案 芷生 (2017) 「河南三門峡水溝 - 会興溝旧石器遺址の黄土地層研究」『地層学雑誌』41(2), 166-172
- 李 占揚 2007 「許昌靈井遺址 2005 年出土石製品の初步研究」『人類学学報』26(2): 138-154
- 遼寧省博物館・本溪市博物館 1986 『廟後山 遼寧省本溪市旧石器文化遺址』文物出版社
- 遼寧省文物考古研究所 2009 『小孤山 遼寧海城史前洞穴遺址総合研究』科学出版社
- 梅 恵傑・程 新民・陳 全家・郭 禄堂 2001 「涉県新橋旧石器遺址発掘報告」『人類学学報』20(1): 19-33
- 裴 文中・張 森水 1985 『中国猿人石器研究』, 中国古生物誌総号 (168), 新丁種 (12), 科学出版社
- 王 建・陶 富海・王 益人 1994 「丁村旧石器時代遺址群調査発掘簡報」『文物季刊』1994(3): 1-75
- 王 幼平 2008 「織機洞の石器工業与古人類活動」『考古学研究』7: 136-148
- 張 森水 1989 「河北遷安県爪村地点発現の旧石器」『人類学学報』8(2): 107-113
- 中国科学院古脊椎動物与古人類研究所編 1958 『山西襄汾県丁村旧石器時代代遺址発掘報告』中国科学院古脊椎動物研究所甲種專刊 (2), 科学出版社
- 中国科学院古脊椎動物与古人類研究所・河北省文物研究所 1992 「四方洞 - 河北第一处旧石器時代洞穴遺址」『文物春秋』1992 年増刊, 98-120
- Pei W.C. 1934 Report on the excavation of the Locality 13 in Choukoutien. *Bulletin of the Geological Society of China*, 13(3): 359-367.
- Pei W.C. 1939 A preliminary study on a new palaeolithic station Known as Locality 15 within the Choukoutien Region. *Bulletin of the Geological Society of China*, 19(2): 147-187.

補記:『東京大学考古学研究室紀要』掲載にあたって

以上の論考は、2014 年 5 月に提出したものである。それから 6 年以上の年月が経っている。この間に、中国東部北半部の遼寧省瀋陽地区において、珪質泥岩や石英岩などを素材とする礫器、ピック、クリーヴァーなどをもつ石器群が多数存在することが明らかになった。註 5 にあげた東小陵西山もその 1 つであった。それらの多くは年代測定されていないが、農大後山では、第 6 層 ($101.0 \pm 9 \sim 110.2 \pm 7$ osl ka) ～第 2 層 ($24,800 \pm 1,400$ osl BP) の各層で、礫器、ピック、クリーヴァーなどが出土した (瀋陽市文物考古研究所ほか 2015)。東部南半部の華北においては、ピックやクリーヴァーなどは姿を消すが、北半部では、これらが残存した可能性がある。とはいえ、八丁平遺跡出土資料は「最終間氷期以前の寒冷期に出現した陸橋を経由して移入してきたものの後裔であった可能性が高いのではないだろうか」という結論には抵触しないと考える。

瀋陽市文物考古研究所・吉林大学辺疆考古研究中心 2015 『瀋陽地区旧石器考古発現与研究』科学出版社

(加藤真二)

4-4. 八丁平遺跡第1地点採集の尖頭状礫器について

4-4-1. はじめに

本資料が採集された経緯とその後の発掘調査等については、他の項目で詳しく紹介されているため、省くことにする。筆者は2011年6月に行われた発掘調査に参加しており、その時は当該資料の確実な出土位置・層位等の情報は残念ながら確定できなかった。しかしながら、遺跡現地および周辺地域の踏査での観察所見や関係者の証言、地質学者からの教示等に基づいて、本稿では、当該石器は約10万年前に降下したと推定されている下位パミス層(Hk-Da-4)の下位に起源する可能性が高いとされることを念頭に分析を加えてみたい。

4-4-2. 石器の観察

本資料は、八丁平遺跡第1地点から発見された石器である。扁平な円礫を素材とし、周囲から粗い剝離を加え、先端部をより小型の急角度な剝離によって尖状部を作出した尖頭状礫器(チョッパー)である。最大長14.0cm、最大幅10.5cm、最大厚5.5cm、重さ994gである。表裏両面に素材の自然面が残されているが、背面側は広く剝離面に覆われ、器体中央部の小範囲に自然面をとどめるに過ぎない一方、裏面側には自然面が広く残置されている。

基部は大振りの交互剝離によって器体成形が行われた結果、平面観は緩い弧状で側面観は典型的なジグザク状を呈する基部形態を作出している。右側縁は大振りの交互剝離を施した後、粗い階段状剝離を施しているため、やや整った直線状に近い側面観をもつが、左側縁に比して鈍角気味である。

一方左側縁は数回に及ぶ裏面側からの大振りの片面剝離によって、基本的な器体成形が行われており、角度の鋭い平らな刃縁が形成された。その後0.5～2cm程度の不連続な剝離が加えられているため、刃部として機能した可能性が高い。

先端部は、左側縁同様裏面の平坦な自然面を打面とした大振りの剝離によって尖状部を粗く作り出し、そののち1.0～1.5cm程度の連続した鋸歯状の剝離によって尖頭部を最終的に作出している。先端部を成形している剝離は右側縁の成形剝離よりも後行するので、尖頭部の作出が最後に行われたと考えられる。

石器の表面は風化が進んでおり、稜線上やエッジ部分に摩耗が認められる。また礫器の自然面部分には、重機等によって削られたと推定される擦過痕や部分的なガジリも観察される。

このような形態学的・技術的特徴を有する礫器が、型式学的分析のみで時代特性を有しないのは明らかである。日本列島においては、中期旧石器時代から縄文時代(特に早期)にかけての各時期に、類似する特徴を

共有する礫器(または石器・石核)が認められるのも確かである。従って、発掘調査により出土位置・層位を確定することがきわめて重要であるが、本資料は残念ながら確定することはできなかった。そこで前述したような方針で、以降の分析を加えることとする。

4-4-3. 東アジアの尖頭状礫器

側方から見た全体の形状では、器体の大部分が素材の形状を保持したまま厚手であるのに対し、先端部のみが片面から急速に厚みを減じているため、チョッパー状を呈している。機能部は左側縁と先端部にあると考えられるが、基部成形は粗い加工にとどめているのに対して、側縁から先端部にかけて次第に調整加工が丁寧になるという特徴は、基本的には東アジアの中期旧石器時代に発達する礫器の加工法とよく共通する。

ユーラシアの前期旧石器時代の文化圏は、前期後半(50-20万年前)のアジア大陸中央に出現したモヴィウス・ラインによって東西に二分され、それ以降石器群にみられるこの大きな差異は後の時代まで継続した。西側のハンドアックス文化圏と東側の礫器(チョッパー)・剝片石器文化圏である。その後中期旧石器時代(20-4万年前)になると、西側はルヴァロワ技法をもつムステリアンに移行するが、東側は北部と南部(南中国・東南アジア等)のふたつの文化圏に分かれた。北部では非ムステリアンの調整石核技術を有する東アジア型中期旧石器時代の剝片石器群と大型礫器が発達する一方、南部は前期後半以来の礫器(チョッパー)・剝片石器群が基本的に継続する(佐藤2003、2018、2019、2020)。

特に大型礫器では、モヴィウス・ライン東側には器体全面を調整する後期アシュール系のハンドアックスは認められず、先端に加工が集中し基部側は粗い補助的加工か未加工のまま残置する東アジア型ハンドアックスが少量見られるにすぎない。ほとんどの礫器はチョッパーで、尖頭状チョッパーを比較的多く含むことに特徴がある(佐藤2009)。こうした特徴はベトナム・タイ・ミャンマーといった東南アジア大陸部や台湾および南中国に顕著で、韓国でもよく見られている。従って八丁平遺跡第1地点の尖頭状礫器の存在も、これらの考古学的現象と矛盾することはない。

4-4-4. 日本列島の類例

日本列島の中期旧石器時代あるいは中期/後期旧石器時代移行期は、礫器等の大型石器と小型剝片石器の両者から基本的に構成されている。大型の礫器は周辺大陸に比べて発達が弱いが、これはおそらく当時列島が、相対的に森林環境が卓越していたためと思われる(佐藤2013、Sato2016)。その中にあって岩手県金取遺跡Ⅲ文化層から出土した2点の礫器が注目される。

どちらも両面加工の礫器ではあるが、片面の加工は弱く、チョッパー状を呈する。特に 1 点は明らかな尖頭状礫器である。第Ⅲ文化層の年代は、火山灰分析や年代測定から 9-5 万年前とされており、八丁平遺跡の本資料の推定年代に近い（黒田 2005）。類似する資料は、大分県上下田遺跡下層からも検出されている（橘 1983）。

ところで、本資料の左側縁や先端部に見られる不連続ないしは鋸歯状の調整加工は、列島の中期旧石器時代後半または中期・後期旧石器時代移行期の調整加工によく類似する（佐藤 2017）。また右側縁に見られる鈍角状で直線に近い側面観は、後期旧石器時代初頭の初期の局部磨製石斧の一部に見られる加工法に近似するのも確かである。今のところ大陸側には局部磨製石斧の類例は認められないので、尖頭状礫器のような大型礫器の製作技術伝統の中から、列島で独自に技術進化したと考えられる（佐藤 1992）。

以上のことから、本資料は、日本列島の中期旧石器時代の礫器と解釈することが可能である。

引用・参考文献

- 黒田篤史編 2005 『金取遺跡第 2・3 次発掘調査報告書』宮守村教育委員会
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 佐藤宏之 2003 「中期旧石器時代研究の地平」『博望』4: 9-22
- 佐藤宏之 2009 「東アジア型ハンドアックス石器群の展開」『物質文化史学論聚』北海道出版企画センター, 45-55
- 佐藤宏之 2013 「日本列島の成立と狩猟採集の社会」『岩波講座 日本歴史 第 1 巻 原始・古代 1』岩波書店, 29-62
- 佐藤宏之 2017 「日本列島の中期 / 後期旧石器時代移行期に関する再検討」『ラーフィダーン』38: 55-60
- 佐藤宏之 2018 「旧石器時代における境界と地域性の形成」『日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集』3-12
- 佐藤宏之 2019 『旧石器時代：日本文化のはじまり』敬文舎
- 佐藤宏之 2020 「東アジア旧石器社会の歴史的変遷と愛鷹旧石器文化の意義」『愛鷹山麓の旧石器文化』343-378 頁、敬文舎
- 橘 昌信 1983 『大分県上下田遺跡第 2 次発掘調査報告書』別府大学付属博物館
- Sato, H. 2016 Recent research on the Early and Middle Palaeolithic in Japan : an overview. *Bulletin of the Society for East Asian Archaeology*, 3: 29-35

（佐藤宏之）

4-5. 伊豆の国市八丁平遺跡の石器の時代の特定

4-5-1. はじめに

本稿では、伊豆の国市八丁平遺跡の石器を、その出土状況と石器の状態・製作技術から時代を特定する作

業を行う。また比較のために、前期旧石器時代の石器と類似しているといわれる、縄文時代早期の石器を分析し、その特徴を捉える。

4-5-2. 石器の観察

石器 1（図 11）は、出土状況を示す写真（図版 3：ただし後日の復元写真）と、石器の風化面の色から、火山灰層達磨山 Da-4（10 万年前）の下から抜き取られたと考えられた（伊豆の国市教育委員会 2010）。

石器が採取されたとされる崖面（第 1 地点とされる）は、写真からも、削られてからかなり年月を経ていることが分かる。崖面は浸食によって崩れ、その土が下に堆積し、その上に草が生えている。

写真によると、石器はその崩れた土の頂上付近に乗っており。「崖面に突き刺さっていた」という状態ではない。また、突き刺さっていた痕跡（穴）も見られない（図 12 参照）。

石器には多方向からの傷が裏表、およそ全体に残されている（図 11 の 1-a-e）。もし、崖に埋まっており、それが削られた時にできた傷なら、一方向、片面に限られるだろう。

また、削られてから年月を経た崖面に、削った時の傷を持つ石器が「突き刺さっている」ことは考えられない。さらに、もしこのような傷が残されるほどの衝撃を受ければ、石器はローム層に留まっていなかったろう。

したがって、この石器は写真に示される場所に突き刺さっていた（原位置にあった）のではないと判断される。

石器に残された傷は、地表で転がりながら、農具などによってつけられた可能性が大きいと考えられる。小さな打点を持つ剥離痕（図 11 の a・b）は尖った先端を持つ鍬のような農具、平らな平行な傷（c2）は、平らな先端を持つ鋤のような農具などによってつけられたものだろう。

石器の風化面に転磨痕がなく、かなり新鮮であることから、地表に出て傷がつき、まもなく採取されたものと考えられる。

石器 2 も同じところに、異なる崖面（第 2 地点）から同じ人物によって採取されたとされる。出土状況を示す写真を見ると、石器はなだらかな崖面に置かれており、石器 1 と同じような状況である。ただし、置かれている場所は、石器 1 のように深い層（地表下 2 メートル以上？）ではなく、地表に近い層で（地表下数十センチか）、黒土層あるいはそれに近い層だろう。

この石器にも先端のとがった鍬のような農具（2 本の平行な傷があることから、先端がフォーク状か）によると思われる傷がみられる（図 11 の 2-a。図 11 の 1-c1 と同じ）。ただし、傷は片面 1 か所だけで、崖を削るときにできたと考えることもできる。しかし、このような傷がで

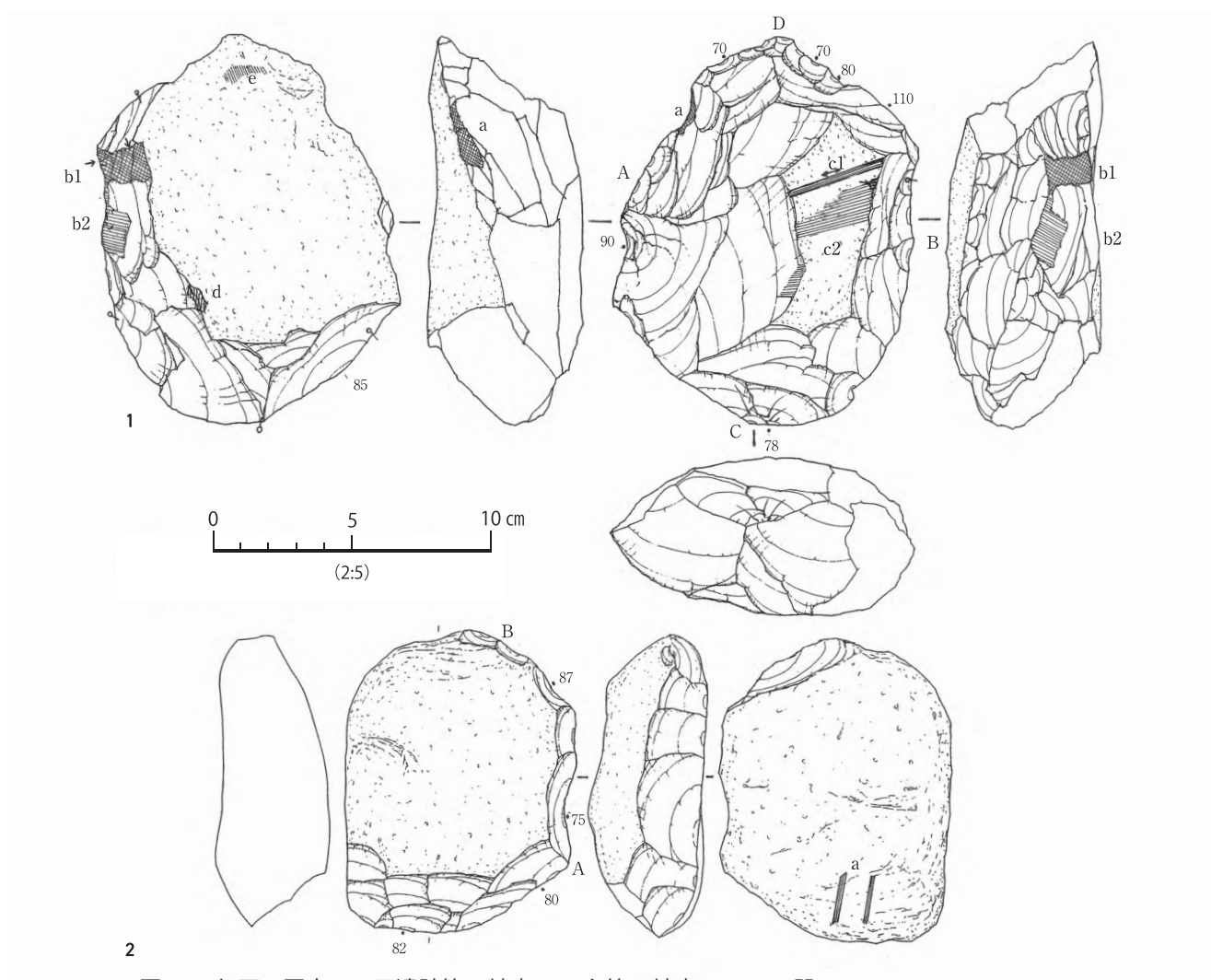
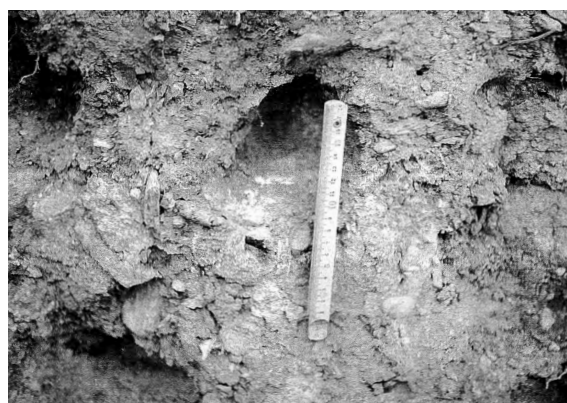


図 11 伊豆の国市八丁平遺跡第 1 地点 (1) と第 2 地点 (2) の石器 (伊豆の国市教育委員会 2010)
(a～e が新しい傷)



1



2

図 12 大分県丹生遺跡第 10 地区 A 地点のチョッパーの出土状況 (中村 2002)
(1 はつき刺さっている状態、2 はそれを抜いた穴。地層は志村砂礫層 [40 万年前]。中村俊一撮影)

きるほど敲かれれば、石器が柔らかな土の崖面（原位置）に留まることは難しいだろう。また、この石器の風化面も、石器 1 とおなじ黄褐色である。

このように、崖面の状況、傷の状況、風化面からは、多くの矛盾が指摘される。この矛盾を解消するもっとも単純な解釈は、石器 1・2 が写真の崖面（第 1・2 地点）ではなく、開墾された平地で採取されたと考えることである。この解釈によって石器 1・2 がともに同じような傷を持ち、かつ同じ色の風化面を持っていることが理解できる。

では、この 2 点の石器はいつごろの所産だろうか。黄褐色の風化面の色をそのまま包含されていた地層の土の色と比較することは難しいだろう。また、山村貴輝の教示によると、伊豆地方ではローム層から出土する遺物は旧石器時代の石器に限らないとのことである。石器 2 の採取された第 2 地点付近には縄文時代早期の土器が散布していたとされ、石器もその時代の可能性が述べられている（伊豆の国市教育委員会 2010）。石器 1 も同じ場所で採取されたのかもしれない。

次に石器の製作技術から時代を考えて見てみよう。

石器 1 は扁平なホルンフェルスの礫を素材として、70 度から 90 度の急角度の粗い剥離によって形成されている。左辺 (A) は片面加工で右辺 (B) は両面加工である。右辺は階段状剥離となって刃部は形成されていない。基部 (C) は両面加工で、数回のジグザグの剥離がなされている。上部 (D) には比較的小さい一方向の剥離によって、やや尖る先端部が形成されている。この部分が用いられたのだろう。

石器 2 も扁平なホルンフェルスの礫を素材として、80 度前後の粗い剥離によって、下部から右辺 (A) そして上辺 (B) を加工した石器で、上辺は両面加工になっている。石器 1 に類似する石器を日本の後期旧石器時代初頭、あるいはそれ以前の可能性のある遺跡に求めると、両面加工石器（ハンドアックス）と円盤状石器には図 13-1~6 のようなものがある。しかし、石器 1 は礫面を多く残す礫器で、剥離痕は急角度で粗く、「原初的」な様相を呈し、一方、図 13 の石器類は厚い剥片を素材とするものが多く、剥離はより平坦である。

次に、石器 2 を後期旧石器時代初頭、あるいはそれ以前の可能性のある遺跡に求めるが、正確に該当する石器は見られない。ただ、大分県丹生遺跡には礫器が多く採取されており、中には似たものがみられる（図 13-7）が、この資料も時代を特定することができない。

石器 1・2 は、製作技術の観点でも時代を特定することが困難である。可能性があるとするれば、前期旧石器時代か、縄文時代かということになる。出土層位が明確でない場合、縄文時代と前期旧石器時代の礫器の

類似はしばしば問題となってきた（たとえば、丹生遺跡についての論争参照）。それは、縄文時代の研究が土器に偏って、石器についての興味は、縄文時代に特有の、石斧や石鏃、石匙、石棒などに限られていたことにある。旧石器時代にも縄文時代にもみられる石器や剥片・石核については報告書に記述されることも稀である。しかし、旧石器時代の文化と縄文時代の文化との関係（連続するのか非連続かなど）を知るためには、縄文時代の石器についても旧石器時代の石器と同じ観点・方法で分析する必要がある。

4-5-3. 縄文時代早期の石器の分析

次に、縄文時代早期の遺跡の石器を分析して、旧石器時代の石器と比較してみよう。この作業によって縄文時代の石器についての問題が明らかになるだろう。対象とするのは長野県木曽郡大桑村下條Ⅲ遺跡の打製石器である。（株）アルカが実測や記述を依頼され、筆者が指導した。

下條Ⅲ遺跡は、縄文早期中葉（高山寺式。楕円押型文土器）ころの遺跡で、石器は、石鏃（90）、石錐（9）、石匙（10）、小形の削器（56）、中・大形の削器（83）、搔器（1）、楔形石器（14）、石核（8）、加工のある剥片（41）、剥片（7）、未完成品（6）、礫器（3）、打製石斧（20）、磨製石斧（1）、磨石（29）、特殊磨石（2）、台石（2）、石棒（1）と分類されている。ただし、打製石斧は他の石器類とは分布をやや異にしてまとまって出土しており、石斧や石棒は中・後期に属すると考えられている。

この遺跡を特徴づけるのは多様な削器である。旧石器時代の石器と同じようにその属性を次のように分類し、名づける（剥離角や剥離技術については図に書き入れてある。石材については、安山岩＝安、チャート＝チ、黒曜石＝黒、下呂石＝下と記述）。

イ. 剥離技術；二次加工にはハンマーストンによる直接打撃と押圧剥離（押と記述）が用いられている。

ロ. 加工の方向；主要剥離面から背面への加工を正方向、背面から主要剥離面への加工を反方向と呼ぶ。反方向の剥離によって形成された削器を裏面削器と呼ぶ。そして、正・反両方向への加工によって形成された削器を両面加工削器と呼ぶ。

ハ. 加工の形状；滑らかな刃部を持つものを削器、粗い剥離でやや鋸歯状を成す刃部を持つものを鋸歯状削器、そして、意図的にジグザグの刃部が形成されたと判断される石器を鋸歯状石器と呼ぶ。

ニ. 辺の組み合わせ；加工された辺が一本のものを削器、複数のものを複式削器、そのうち 2 辺が収斂するものを収斂削器、そして 2 辺によって先端が形成されているものを尖頭削器と呼ぶ。

ホ. 素材；通常の剥片を用いるものと、厚い、しばしば板状の剥片を用いるものとがある。後者を厚手と呼ぶ。

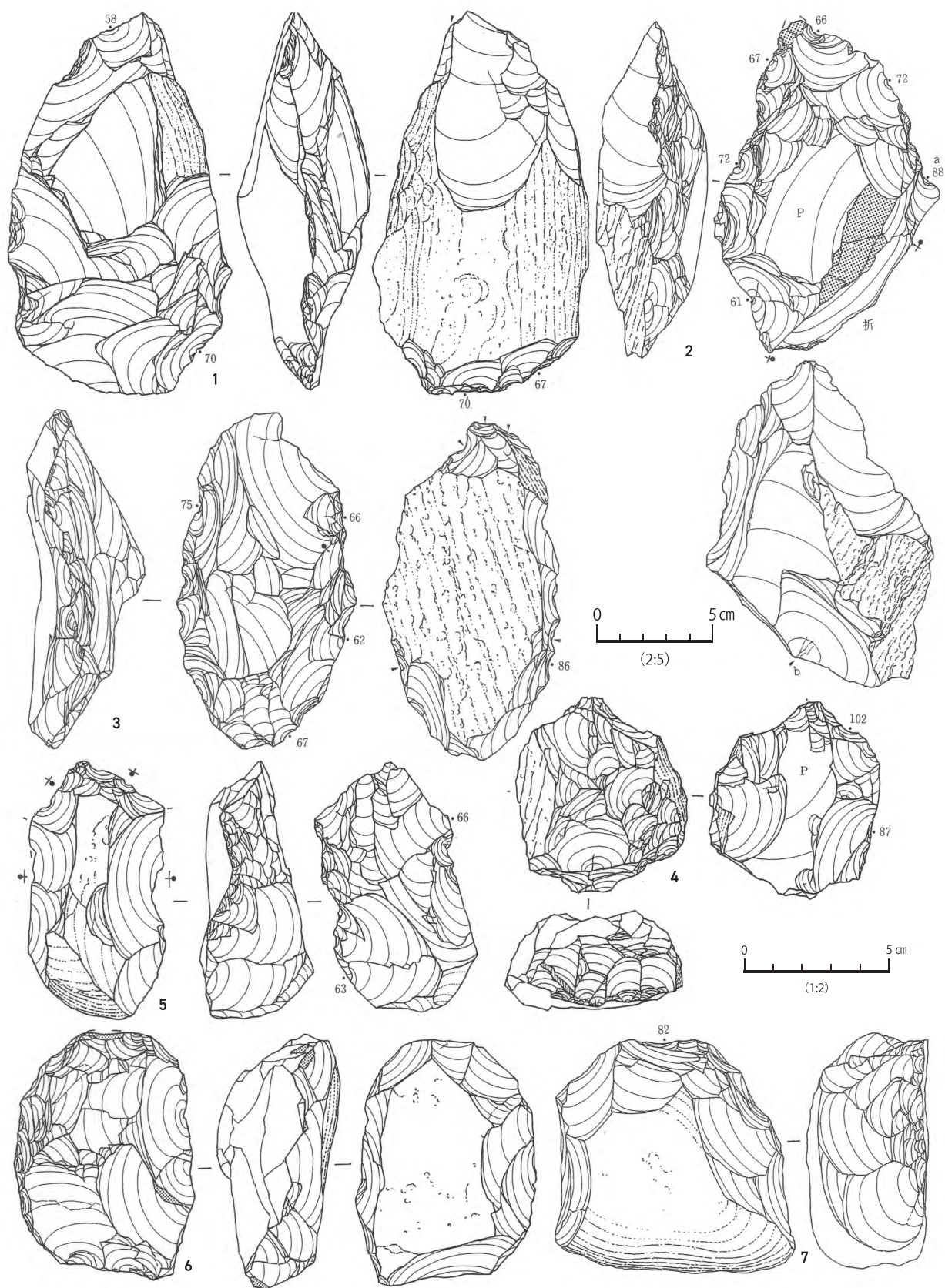


図 13 日本各地のハンドアックス (1・2・3・5)、円盤状石器 (4・6)、チョッパー (7) (竹岡 2005)
 (1 岩手県金取遺跡、2 香川県国分台遺跡、3 長崎県福井洞穴、4 東京都多摩蘭坂遺跡、5・6 福島県平林遺跡、7 大分県丹生遺跡)

なお、へ・加工された辺が、剥片の側辺にあるか、基辺・末端辺にあるか、ト・加工された辺を基準にして、石器が縦に長いのか、横に長いのか、なども分類基準となるが、ここでは省く。

以上のような属性は削器以外の石器についても記述の基準となる。

以下、主要な石器の分類名と、特徴について記述する。

図 14-1、裏面鋸歯状削器（安）；A・B・C の折れは意図的である。2、鋸歯状石器（安）。3、鋸歯状石器（安）；A の折れ面は意図的である。4、裏面収斂鋸歯状削器（安）；A（反方向）と B（正方向）の二辺が収斂する。5、裏面鋸歯状削器（安）、6、裏面鋸歯状石器（安）、7、複式削器（安）；A・B・C を正方向に剥離している。8、裏面鋸歯状石器（安）、9、両面加工鋸歯状削器（安）、10、削器＋裏面鋸歯状石器（安）；側辺（B）に粗い剥離で鋸歯状石器、末端（A）に押圧剥離で削器が作られている。安山岩を素材とした押圧剥離はこの資料だけである。

図 15-1、厚手収斂鋸歯状石器（安）；主要剥離面を薄く大きく剥離したのちに周辺部を剥離する。2、複式厚手鋸歯状削器（安）；右辺（A）は、正方向→反方向に剥離されている。3、厚手両面加工削器（安）；B には縦長の剥離が行われているが、意味は分からない。4、厚手両面加工削器（安）；A に尖頭部が作られている可能性がある。玉ねぎ状剥離面が多くみられる。5、尖頭両面加工削器（安）；C は折とりのような剥離面。6、厚手尖頭削器（安）；ねじ回しのような尖端（C）が形成されている。7、円盤状石器（安）；素材面はほとんど残されない。上辺（A）は鋸歯状をなす。

図 16-1、削器（チ）；素材の打面は反方向の剥離（B）で除去されている。2、削器（チ）。3、複式削器（チ）；C に使用痕と思われる微細な剥離痕がみられる。D の意味は分からない。4、複式削器（チ）；左辺（A）は正方向、右辺（B）は両面加工。5、両面加工削器（チ）；B の加工から、石匙と関連するかもしれない。6、裏面削器（チ）。7、削器（チ）。8、削器（チ・押圧）；素材の打面は折とられているようである（B）。9、裏面加工削器（チ・押圧）。10、両面加工鋸歯状削器（チ・押圧）。11、両面加工削器（チ・押圧）。12、両面加工鋸歯状石器（黒・押圧）；素材は礫である。13、両面加工鋸歯状石器（黒・押圧）；素材は礫。14、裏面加工鋸歯状石器（チ・押圧）。15、複式削器（チ・押圧）；左辺（A）は正方向の押圧剥離、右辺（B）はハンマーストンで剥離したのちに一部押圧剥離。右辺の加工の意味は分からない。16、裏面鋸歯状石器（チ・押圧）。17、石匙（チ・押圧）。18、石匙（チ・押圧）。

図 17-1、錐（チ）；稜上に微細な剥離痕が並んでい

る。2、錐（黒）；ハンマーストンによる直接打撃。3、尖頭石器（黒）；鋸歯状の剥離（A+B）によって形成されている。C の加工の意味は分からない。4、錐（チ・押圧）；左辺（A）は両面加工。C の加工から、石匙と関連するかもしれない。5、錐（チ・押圧）；石鏃のような輪郭をしているが、3 つの先端部を持つ錐。A は折れているが、B・C は細かな剥離によって形成されている。6、複式搔器（黒）；分厚い剥片の上端と下端に頑丈な弧状の刃部（A・B）が形成されている。7、石鏃の未完成品（下）。8、石鏃（チ・押圧）。9、石鏃（チ・押圧）。10、楔形石器（下）；背面は素材面。11、楔形石器（チ）。12、石核（チ）；正面左辺（A）→正面上辺（B）から剥片を剥離している。13、石核（チ）。14、石核（チ）；円盤状を呈する。15、残核利用の削器（チ）；正面上辺→左辺から剥離を行った後に、上辺から細かな加工を行っている。16、チョッピングツール（石英）。

削器・鋸歯状石器には 3 つの種類がある。

第 1 類；安山岩を素材としてハンマーストンによって粗い二次加工を施された石器類で、素材は礫からランダムに剥離された厚い剥片で、遺跡には石核も剥片も残されていない。すべてが製品としてこの遺跡に持ち込まれている（図 14・15）。

第 2 類；チャートの剥片を素材として、ハンマーストンによって細かな二次加工を施された石器で、素材は通常の石核（図 17-12～15）から剥離されている。ただし、石器のほとんどは製品の形でこの遺跡に持ち込まれており、剥片や石核の数は少ない（図 16-1～7）。

第 3 類；チャートの剥片や黒曜石の礫を素材として、押圧剥離によって製作された石器類（図 16-8～16）。

第 1 類は第 2・3 類とその大きさや剥離の粗さ、角度によって区別されるが（図 19 参照）、第 2 類と第 3 類の削器は形状や剥離角度に違いは見られず、異なる技術を用いる理由はわからない。ただし、第 3 類の鋸歯状石器（図 16-12～14）は押圧剥離でしか作ることができない。

錐や尖頭石器はハンマーストンによって製作されたもの（図 17-1～3）と押圧剥離によって製作されたもの（4・5）とがある。6 のような縄文時代の搔器は初見である。この遺跡では石鏃も製作されていないと考えられるが、それを知るためには微細な剥片の採取が必要である。10・11 の楔形石器は剥片を剥離する目的か、道具として用いられたのかはわからない。形状に旧石器時代の楔形石器と違いはない。石核（12～15）はチャート製の石器の素材となった剥片を剥離したものと考えられるが、この遺跡ではその作業は行われていない。このような石核は後期旧石器時代初期か、それ以前と考えられる遺跡、また後期旧石器時代の柏ヶ谷長ヲサ系文化（武蔵野台地第 IV 下層）にもみられる。

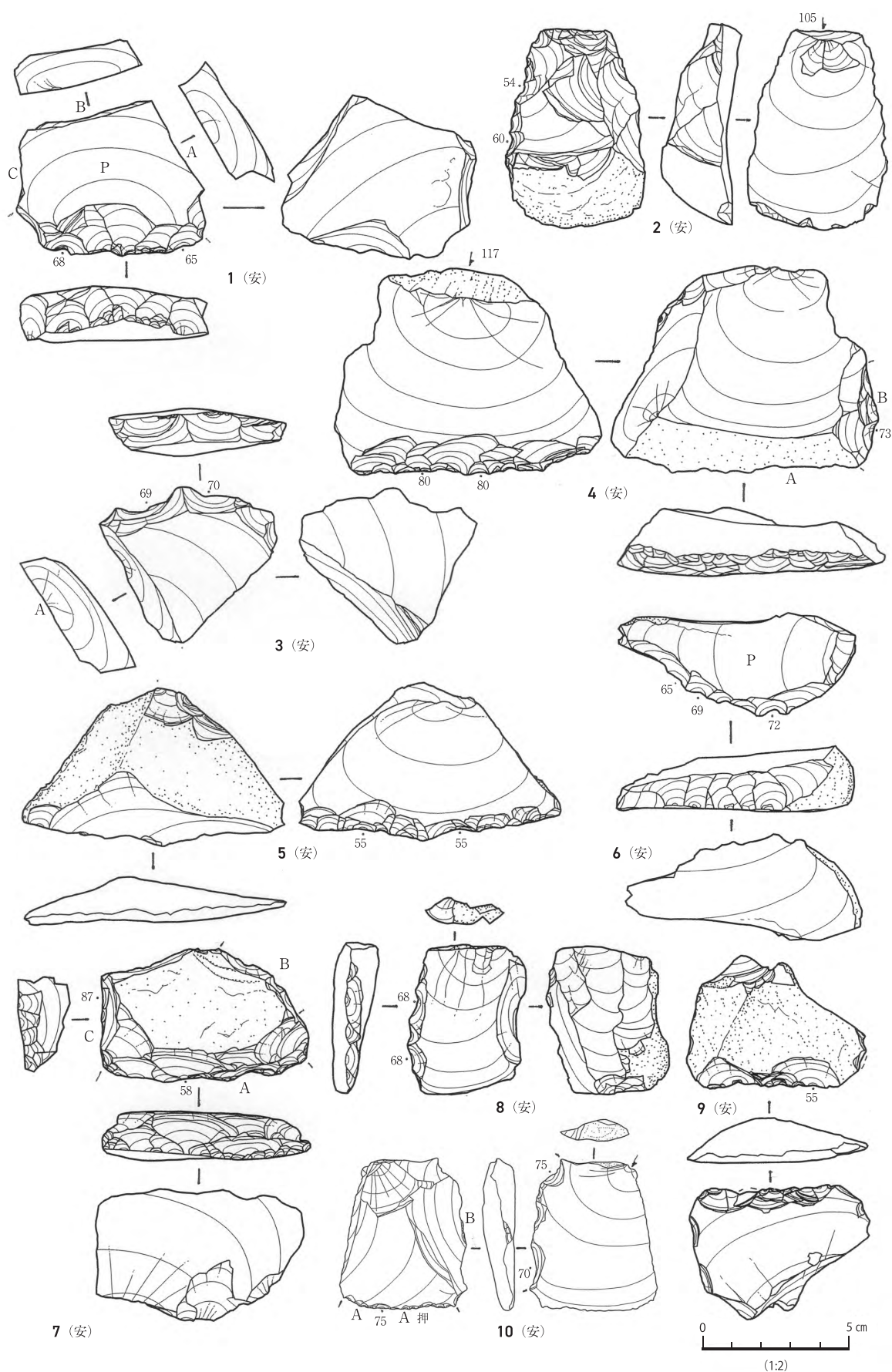


図 14 長野県大桑村下条Ⅲ遺跡の石器 (1) (大桑村教育委員会 2013)

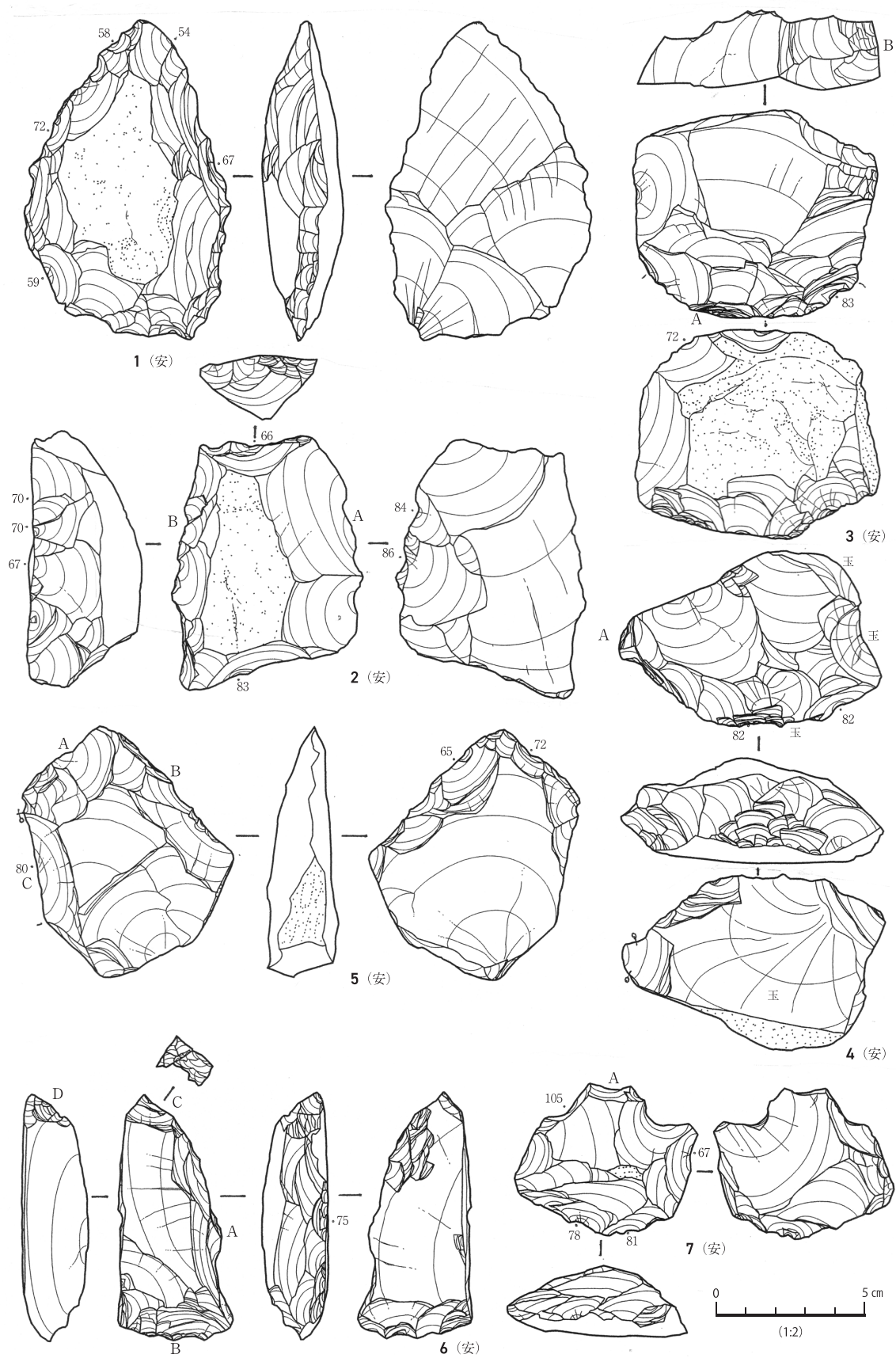


図 15 長野県大桑村下条Ⅲ遺跡の石器 (2)

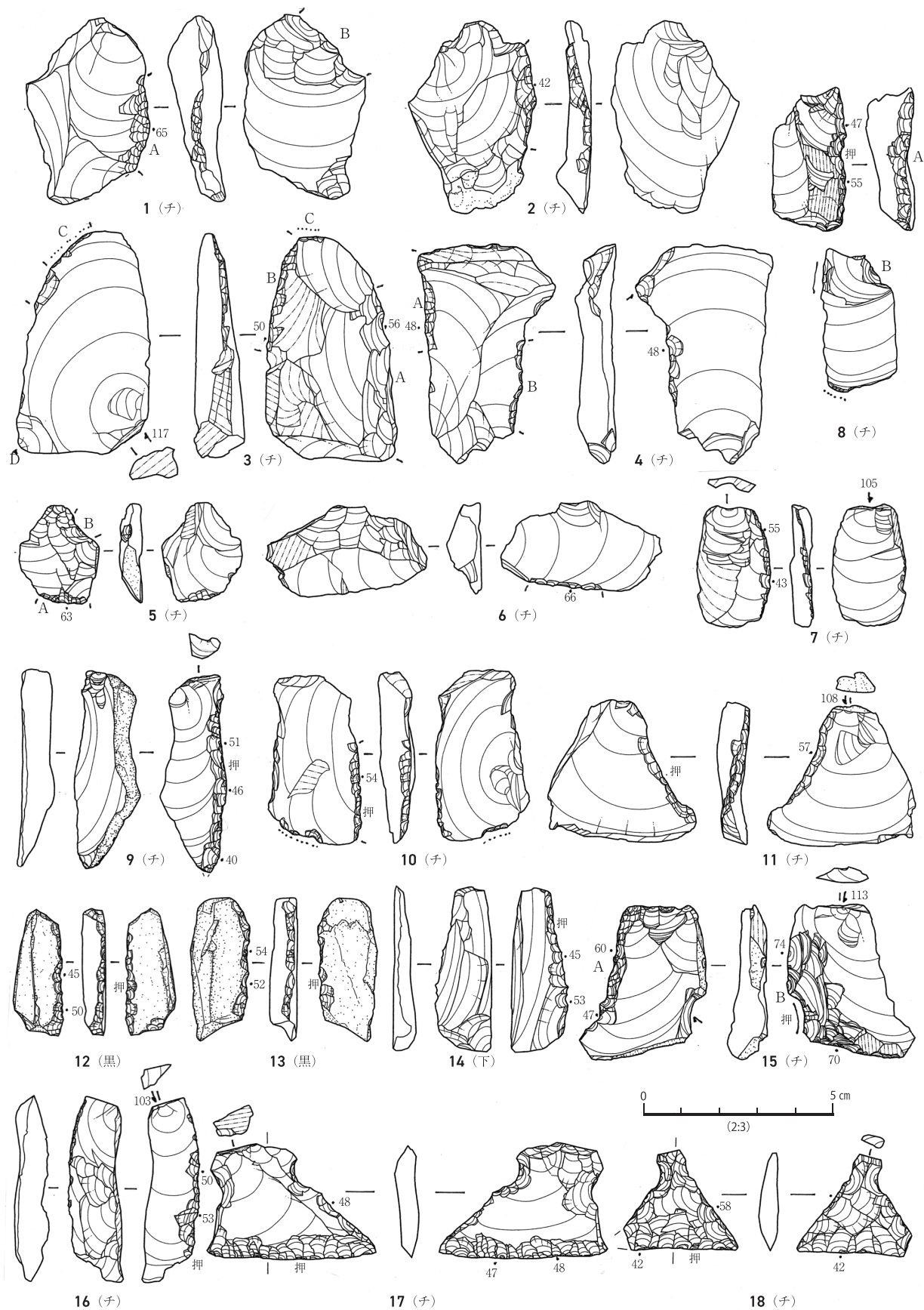


図 16 長野県大桑村下条Ⅲ遺跡の石器 (3)

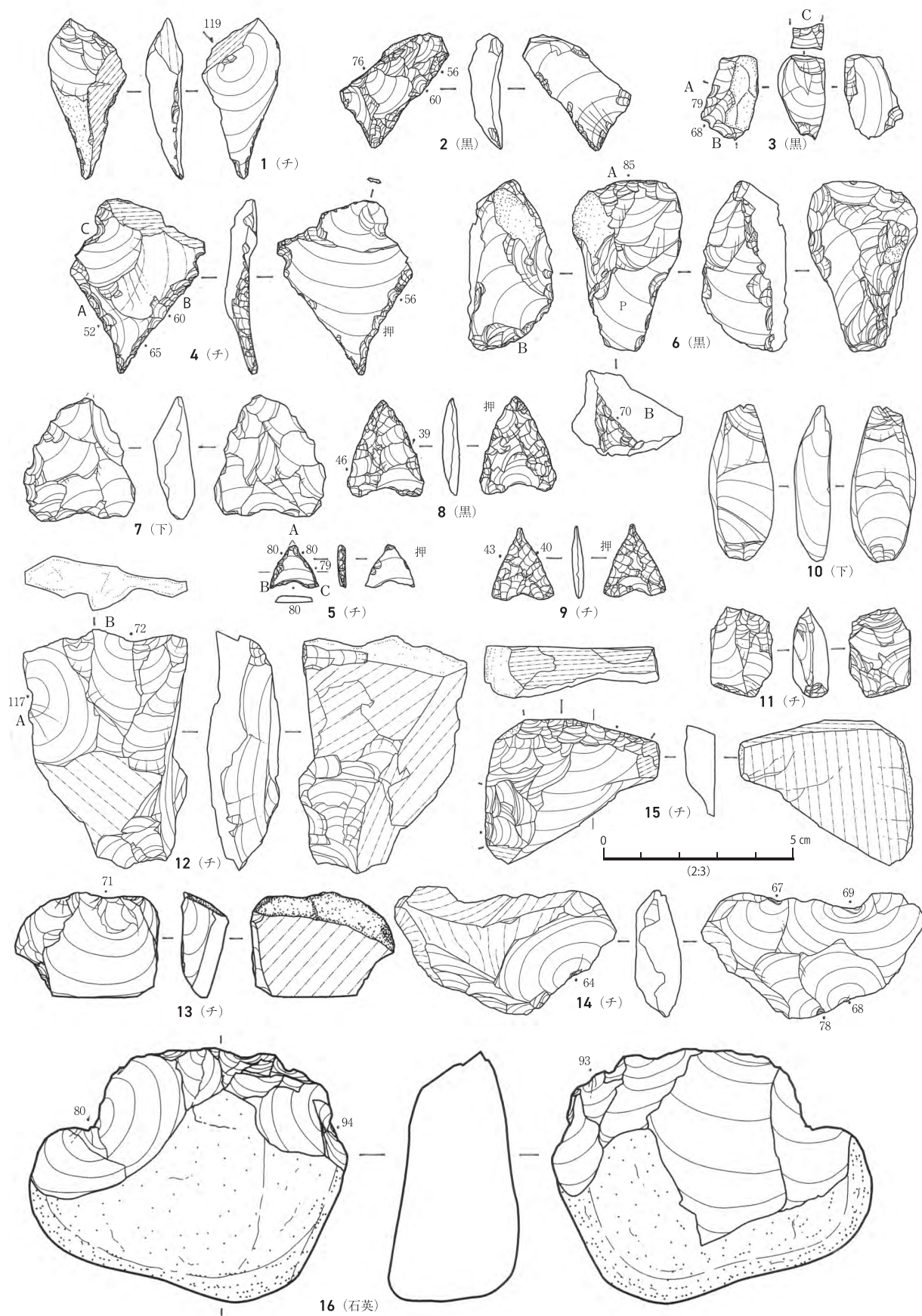


図 17 長野県大桑村下条川遺跡の石器 (4)

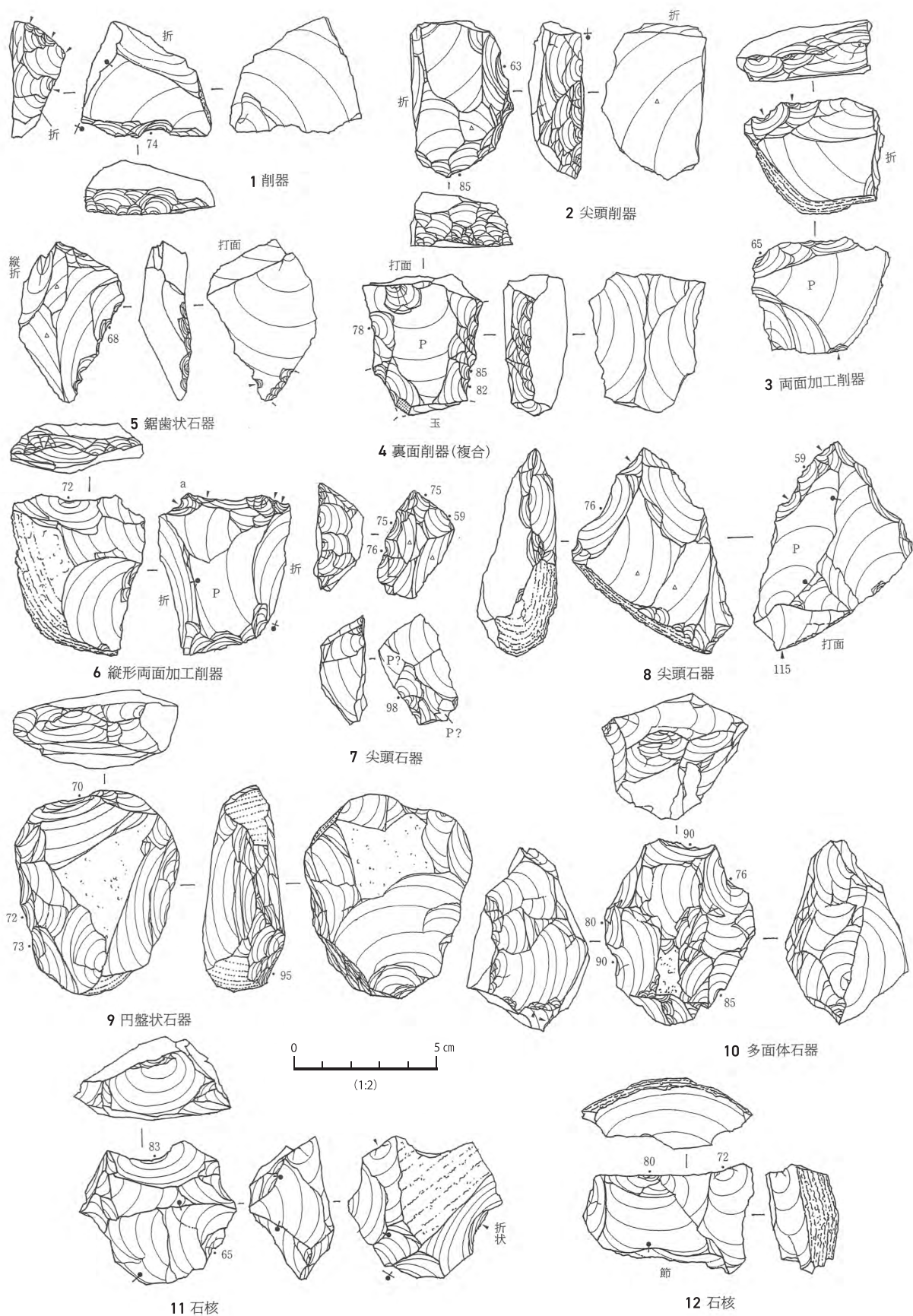


図 18 熊本県熊本市石の本遺跡の石器 (竹岡 2005)

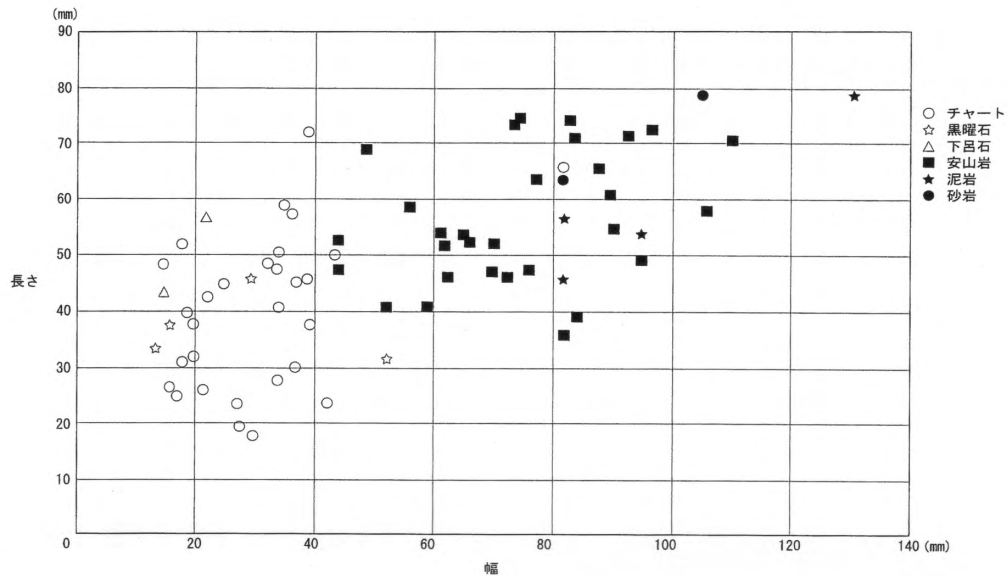


図 19 下条Ⅲ遺跡の削器の石材別大きさの比較 (大桑村教育委員会 2013)

16 の石英製の礫器は本格的なチョッピングツールである。

石器の種類においては石鏃や石匙、技術については押圧剥離を除けば、石器群の様相は旧石器時代とさほど変わらない。削器第 1・2 類は、前期旧石器時代にも同じような石器がみられる。たとえば、フランス、ル・ラザレ遺跡 (13 万年前) の資料に第 2 類を混ぜれば、区別できないだろう (石材などを除いて)。

図 18 は熊本県熊本市石の本遺跡の石器群である (竹岡 2005)。放射性炭素の測定値はおよそ 32,000 年前とされている。素材の安山岩は下条Ⅲ遺跡よりさらに粗質で折れ面が多い。この石器群と、前述の第 1 類とを区別することは困難だろう。

では、旧石器時代の石器群と縄文時代の石器群の違いはどこにあるのだろうか。この遺跡に関しては、次の点があげられる。

- ① 色々な石材の石器が遺跡外から持ち込まれ、製作の痕跡は見られない。これは、旧石器時代と縄文時代の社会のあり方 (分業や交易) の違いを反映しているのかもしれない。
- ② ハンマーストンによる直接打撃と押圧剥離という 2 つの技術が石材によって使い分けられている。その理由は①と関係するのかもしれない。しかし、同じチャート製の削器でも、用いられている技術が 2 種類ある。素材の多様性 (厚手剥片・剥片・礫)、剥片剥離技法の単純さ、技術のランダムな使い方から、石器製作に旧石器時代の石器文化に見られるような、厳密な規定がなかったと判断される。

4-5-4. まとめ

図 11 のような礫器は削器や鋸歯状石器と同様に、

時代をとおして存在する (図 17-16 参照)。そして、石器 1 点では石器文化の全体 (竹岡 2013 参照) を捉えることはできない。したがって、この石器の時代を判断することは困難である。筆者は、出土状況の写真や石器についた傷、製作技術、そして縄文時代の石器群の様相を総合して、この石器は縄文時代の所産であると判断する。

引用・参考文献

- 伊豆の国市教育委員会 2010 『大仁町史』資料編 1
 大桑村教育委員会 2013 『下条Ⅲ遺跡—村道拡幅工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
 竹岡俊樹 2005 『前期旧石器時代の型式学』学生社
 竹岡俊樹 2013 『旧石器時代文化研究法』勉誠出版
 中村知康 2002 「丹生文化発見」見聞記『Science of Humanity Bensei』40

(竹岡俊樹)

おわりに

静岡県伊豆の国市八丁平遺跡の 2 か所から石器が採集されたのは 50 年以上前であり、もはやそのうちの 1 か所である第 1 地点は採集場所もわからなくなってしまった。幸いなことに採集当時の写真が残されており、第 1 地点採集の石器が後期旧石器時代をさかのぼる可能性を追うべく、大仁町史編纂委員会で第 2 地点付近にねらいを定めて発掘調査をおこなった。その結果と石器に対する所見は、『大仁町史』に掲載したが、今回複数の旧石器文化研究者によりあらためてこの石器の位置づけを吟味した。

その結果、『大仁町史』において年代推定の拠り所としたおよそ 10 万年前の火山灰層の下に露出して発見されたという層位的な所見は、石器の観察によって軌道修正を余儀なくされた。50 年以上の月日が採集者の記憶をおぼろにしたのであろう。第 1 地点採集石器の技術形態的な分析によっても、縄文時代の石器ではないかとの見方も提示されたが、その一方で中期旧石器としての可能性は依然として残る。

前・中期旧石器捏造事件以後、日本列島における人類の成立問題は多方面からアプローチがなされている。あらゆる機会をとらえて議論を深めていくことが求められるのであり、その意味では今回の検証もその一角に位置する。

漆畑稔氏には議論の場に採集石器と当時の写真を快く提供していただき、さまざまな情報を寄せていただいたことに敬意を表して本稿を閉じたい。

(設楽)

謝辞

本稿は設楽が 5 名に石器を渡して観察していただいたうえで原稿を依頼し、編集した。観察や執筆にあたり、雨宮健祥、飯田茂雄、石川岳彦、市川岳朗、漆畑稔、王 益人、小野 昭、黒田篤史、高 星、紅村 弘、柴原聡一郎、島田和高、徐 天進、末松正義、張 恩恵、塚原明生、中村賢太郎、夏木大吾、原 秀三郎、春成秀爾、藤根 久、増島 淳の諸氏のお世話になった。柴原氏には英文要旨の作成と編集のご助力をいただいた。記して感謝申し上げる。

A Study on Stone Tools Collected at Hacchodaira Site in Izunokuni City, Shizuoka Prefecture

– Problems Related to the Middle Paleolithic in the Japanese Archipelago –

ANBIRU Masao, ODA Shizuo, KATO Shinji,
SATO Hiroyuki, SHITARA Hiromi, TAKEOKA Toshiki

Two stone tools were discovered in 1967 at Hacchodaira site (八丁平遺跡) in Izunokuni City, Shizuoka Prefecture. SHITARA Hiromi has mentioned in the "History of Ohito Town (『大仁町史』)" that the stone tool collected at Hacchodaira Loc. 1, may date to the Middle Paleolithic period based on the examination of the tool and the situation on finding. In this paper, several Paleolithic researchers have analyzed the stone tool. As a result, the stratigraphic view that the stone tool was found under the volcanic ash layer of about 100,000 years ago, which was the basis for the previous age estimation, has to be revised by the observation of the stone tool. It was also suggested that the artifact was from the Jomon period, but a morphological analysis of the artifact showed that there remains a possibility that it belongs to the Middle Paleolithic period. Since the hoax of Lower/ Middle Paleolithic artifacts, the issue of human origins in the Japanese archipelago has been approached from many angles. We should take every opportunity to deepen the discussion, and this paper is one of the attempts to do so.